

324-21

文學博士前田慧雲序  
黃洋境野哲著

印度支那  
佛敎史要

附朝鮮暹羅國

東京 鴻盟社發行

明治  
40 2 1  
內容

## 印度支那佛教史要序

凡そ佛教を研究せんとするものは、先づ其歴史の大要を知らんことを要す。然るに從來佛教の史籍、絶て善書なし。支那日本に係るものは、僅に二三ありと雖も、皆紀述其要を得ず。印度に到ては、燕雜のものたも猶ほなし。豈に佛教の一大闕事にあらずや。黃洋境野君曾て佛教史を研鑽すること。此に年あり。頗る精微を極む。曩に日本佛教史要を著はして、之を世に公にす。今又印度支那に係る佛教史實の大要を述へ、以て前書に續く。頃ころ印刷功を竣む。予に一本を示さる。乃ち披て之を讀むに、組織法あり。叙述要を得。三千年間佛教の史實、之を掌に指すか如し。洵に千古の闕事を補ふものと謂ふべし。それ獅子象を搏つにも全力を用ひ、兎を搏つにも亦全力を用ゆ。此

書其卷甚大ならずと雖も、蓋し象を搏つ力を用ゆるにあらざれば、此兔を獲ること能はざるなり。予、佛敎の爲めに深く君の勞を謝す。

明治三十九年十月下旬

含潤道人 前田慧雲識

序言

余前に『日本佛敎史要』を出すや、直ちに印度支那の部を續刊すべきことを書肆に約したりしも、俗事多端遂に荏苒其の意を果すこと能はず。

昨春鴻盟社主今村金次郎君、余を責むるに前盟を遂ぐべきことを以てす。乃ち忙中稿を草し、或は一葉、或は兩三葉、時には僅に數行を得てまた顧みる能はざるもの數日に及ぶことあり、斯くの如くにして本年五月に至り、本書印刷殆んど其の効を奏し、而かもなほ餘すもの僅に十餘紙。爾來余が繁務一層を加へ、續稿遂に成らざるに、今村君は濫焉として不歸の客となる、余實に慙然たらざるを得ざるなり。今製本將さに成らんとするに際し、君の靈に對して、余の君

に乖くもの多きを謝するの念に堪へず。

本書は元と『日本佛教史要』と雙卷をなすものなれば、中等宗教學校の教科書に充てんことを目的とするものなれども、余の『日本佛教史要』を出せし時とは、既に教育界の事情に多大の相違あり、加之、一週僅に一時間の教授に用ひんには、紙數も亦多きの患あるべし。斯くて本書の結構、舛裁、甚だ前著と同じからざるものあり、唯今前著に對し、本卷のみ其の紙數を減少せんが如きことは得て爲すべきにあらず。畢竟本書は、許す限り教科書たると共に、或は寧ろ參考書たるに適すべく、又一般佛教史を知らんとする初學者の机上に供するを得んこと、これ余の望みなり。

本書は全く余が獨斷の見を加へず、已むを得ざる場合の外、可成古

來の傳ふるところを重んじ、叙述したるに過ぎず、これ本書の性質自ら然らざるを得ざるものあるなり。

本書記するところ、印度支那を主とすと雖、亦錫崙、緬甸、西藏、朝鮮等の佛教をも、極めて簡單に之を附記したり。唯余の研究の足らざる、誤謬遺漏少からざるべきは疑を容れず、これ余が廣く世の叱正を仰がんと希望する所也。

本書宋以後の佛教を明すこと簡畧を極む、これ宋以後の佛教は、初學者に取りて甚だ必要ならざるのみならず、主として禪宗の法系を叙するが如き無味枯燥の事實は、之を叙述すること其の煩しきに堪へざるものあればなり。

本書挿む所の年表は、支那史上最も佛教に關係深く、而かも小國駢

立、彼此參些、甚だ搜索に苦む五胡十六國時代前後のものに屬すこ  
れ初學の人に取りて、少なからざる便宜を與ふべきを信ず。

明治卅九年十一月

境野黃洋識

目次

第一編 印度

第一章 印度概説

(一) 印度の地理及び住民

印度の面積人口(一) — 印度領有者(二) — 印度の地勢(三) — 印度中央平原(四) — ア  
ツカン高原(五) — 印度の住民(八) — 階級制度(九) — ドラヴィド人コリア人の住  
地(一〇) — 言語(一一)

(二) 印度歴史の概要

アールヤ人の南下(二二) — 印度の名稱(二四) — 吠陀時代(二五) — 叙事詩時代(二六)  
— 哲學時代(二七) — 佛教時代(二九) — 摩揭陀國(二九) — 摩羅羅朝(三〇) — 印度  
教時代(三四) — ラツプト族(三七) — 回教時代(三八)

第二章 印度の宗教

(一) 印度宗教の變遷

婆羅門教の起原(三三) — 『吠陀經』(三三) — 印度人の崇拜せる神の類別(三五) — 日神  
(三五) — 阿那尼(三六) — 因陀羅(三七) — 鳩波尼殺(三八) — 吠陀思想の復活(三九)  
— 三體神(四〇) — 人格崇拜教(四二) — 女性神(四二)

(二) 佛教の興起と婆羅門教の教義……………四三  
 哲學的諸派の起原(四三)——順世論(四四)——我生論(四五)——勝論(四五)——勝論の教義と佛教(五〇)——耆那派(五一)

第三章 佛陀の生涯……………五二

(一) 成道以前……………五二  
 佛陀降誕の年代(五二)——佛陀傳の三方面(五三)——佛陀の祖先(五四)——迦毘羅城と指城(五六)——佛陀の家系表(五六)——他の諸國民と釋種(五八)——降誕(五九)——四門出遊の傳説(六〇)——迦毘羅城脱出(六一)——對論の教義と佛教(六五)——成道(六八)

(二) 成道以後……………六九  
 佛入滅の年齡(六九)——五比丘と初轉法輪(六九)——雨安居(七一)——第一安居(七一)——三迦葉(七二)——三大弟子(七三)——成道後の迦毘羅耆父(七五)——佛陀在時の重なる結舎(七七)——佛陀滅時の遺教(七八)——入滅(八一)——佛陀に關する西洋學者の一説(八一)——基督教と佛陀(八二)

第四章 五百集法……………八二

提婆達多(八三)——舍利弗目連の死(八五)——大迦葉の結集企圖(八八)——阿難と第一結集(八九)——三變(九二)——十二部教(九四)——佛滅後の迦毘羅(九六)

第五章 五百集法以後四百年間の變遷……………九七

(一) 五師傳持……………九八  
 南北兩傳の五師(九九)——阿難入滅(一〇〇)——商那和修と末田地(一〇〇)——優婆塞多(一〇二)

(二) 七百集法……………一〇三  
 吠舍離國の起原(一〇三)——七百集法の年代(一〇四)

(三) 阿輸迦王……………一〇五  
 佛教と阿輸迦王の血統(一〇六)——第三集法(一〇七)——阿輸迦王の傳教師派遣(一〇八)——阿輸迦王の勅令(一〇九)——北傳の阿輸迦王(一一〇)

(四) 諸部の分裂……………一一一  
 上座大衆の二部(一一一)——五大律部(一一三)——分裂に關する南北二傳の相違(一一四)

(五) 迦濕彌羅集法……………一一五  
 迦濕彌羅王(一一六)——釋迦紀元(一一七)——迦濕彌羅王の摩揭陀征伐(一一八)——第四集法の事實(一一八)

(六) 佛滅後佛教の迫害……………一二〇  
 弗沙密多羅の破佛(一二〇)——弗沙密多羅王に就きて南北二傳の相違(一二一)——法滅盡の時(一二三)

第六章 大乘佛教の勃興

- (一) 傳統.....二二四
  - 優婆塞多下の傳統異説(二二五)——龍樹後の傳統異説(二二七)——彌羅掘王の佛教破滅(二二七)
- (二) 馬鳴菩薩.....二二八
  - 尊尊者と馬鳴(二二九)——馬鳴歸佛の異説(三〇)——馬鳴と迦麻色迦(三一)——馬鳴の述作(三三)——馬鳴と摩訶里制吒尊者(三三)
- (三) 龍樹提婆の二菩薩.....三三二
  - 龍樹の著述(三三三)——龍樹の歸佛(三四)——提婆と龍樹(三五)——提婆の教化(三六)——提婆の死(三七)
- (四) 無着世親の二菩薩.....三三八
  - 龍樹提婆後の名匠(三八)——無着の傳(四〇)——世親の『俱舍論』製作(四二)——世親と數論(四二)——衆賢論師の『順正理論』(四四)——世親歸入大乘の因縁(四四)——無着世親の著書(四六)
- (五) 世親以後の狀況.....三四五
  - 中觀宗の教系(四五)——瑜伽宗の教系(四六)——護法活辨と戒賢智光(四七)——小乗教の狀況(四八)

(六) 佛教の衰滅.....二四九

印度復古思想の勃興(四九)——佛教の滅盡(五〇)

第七章 南方佛教

- (一) 錫崙.....二五一
  - 錫崙佛教の初傳(五二)——羅摩衍那の傳説(五三)——錫崙史の起原と佛教初傳時代の錫崙王(五三)——錫崙の三藏策録(五五)——佛陀置沙(五七)
- (二) 縮緬.....二五八
  - 緬甸史の要領(五八)——緬甸佛教の初傳(六一)——佛陀置沙の來緬(六三)——錫崙佛教と緬甸(六五)
- (三) 暹羅.....二六六
  - 暹羅佛教の初傳(六七)——ピア、タク(六八)——暹羅佛教の新舊二派(六九)——キ、チャ、キト(七〇)

第二編 支那

第一章 支那史の概要

- (一) 地勢人種の略説.....二七四
  - 山脈(七四)——河流(七五)——葱嶺以西の諸國(七七)——支那の人種(七九)

(二) 諸朝の興廢……………一八〇

三代以後三國までの興廢年紀(一八二)——漢の武帝と西域(一八二)——五胡時代(一八四)——南北朝以後(一八七)

第二章 翻譯時代の佛教……………一九一

(一) 佛教東傳の最初……………一九一

後漢の明帝迎佛(一九二)——佛教初傳時に滋養せし重なる事實(一九二)

(二) 苻姚二秦の弘傳翻經……………一九四

二秦以前翻經の高僧(一九四)——小乘經典の翻傳(一九六)——經典翻譯の状況(一九七)——竺佛念(一九八)——道安(一九九)——鳩摩羅什(二〇二)

(三) 遠遊の名僧及び涼州江南の佛教……………二〇四

姚秦時代の四名僧(二〇五)——支那印度間の経路(二〇六)——法顯三蔵(二〇六)——盛無敵の涅槃經翻譯(二〇八)——沮渠京聲(二一一)——佛陀跋陀羅(二一一)——慧遠法師(二一二)

第三章 南北朝の佛教……………二二三

(一) 歷朝の佛教に對する待遇……………二二四

劉宋の諸帝と佛教(二一五)——沙門不敬王者論(二一六)——齊の蕭子良(二一六)——梁の武帝及び昭明太子(二一七)——北魏北周の二武(二一八)

(二) 僧官の變遷……………二二九

姚秦の僧官制定(二二二)——北魏の僧制(二二三)——南朝に於ける僧官の制(二二三)

(三) 南北朝時代の宗派……………二三四

(1) 毘曇宗(二二六)

(2) 三論宗(二二九)

關中の四傑(二二九)——道愍(二二九)——僧敏(二三〇)——僧暉(二三二)——道生(二三三)

(3) 成實宗(二三三)

『成實論』の五聚(二三三)——『成實論』に關する大小二乘の判(二三四)——南北朝時代に於ける『成實論』譯數の盛況(二三五)

(4) 律宗(二三七)

支那戒律の初め(二三七)——支那と四分律(二三九)——方等戒壇の創立(三四〇)——四大律の譯出(三四二)——戒律と羅什慧遠(三四二)——南方律と法顯(三四三)——南北朝の著名なる律匠(三四四)

(5) 涅槃宗(三四四)

『涅槃經』の大本と六卷本(三四四)——羅什門下と涅槃宗(三四五)

(6) 地論宗(三四六)

(7) 淨土宗(三四九)

淨土の三經(三四九)——支那淨土教の端緒(三五二)——支那淨土教の三流(三五二)——善導流念佛の系統(三五二)



- (8) 禪宗二五三
- 習禪と禪宗二五三——達磨二五四——達磨の法嗣二五五
- (9) 攝論宗二五六

### 第四章 隋唐の佛教

(一) 概説……………二六八

隋の文帝の興佛二六一——唐初佛教の隆盛二六二——三武一宗の厄二六三——唐  
代道佛二教の争二六三——唐の附制二六五

(二) 隋唐時代の諸宗……………二六五

- (1) 三論宗二六六
  - 三論の系統二六六——嘉祥大師二六七——日照三藏所傳の三論二六九
- (2) 天台宗二七〇
  - 慧文、南岳二七二——天台大師二七二——章安以後の系統二七三——荆溪の再興  
二七四
- (3) 淨土宗二七五
  - 淨土教以外の學者と念佛二七六——善導大師二七七——善導以後念佛弘傳者二  
七八——慈恩三藏二七八
- (4) 禪宗二七九
  - 南嶺北漸二八〇——六祖慧能二八〇——六祖傳法二八二——五家七宗系統圖二  
八三

- (5) 法相宗二八五
  - 玄奘三藏二八五——六經十一論二八七——玄奘門下二八八——窺基と圓測二八  
九——慧沼智周以後の學者二八九
- (6) 俱舍宗二九〇
- (7) 華嚴宗二九二
  - 華嚴宗の起原二九二——賢首大師二九三——賢首の門下二九四——澄觀二九四  
——宗密二九五——八十華嚴四十華嚴の翻譯二九六
- (8) 律宗二九七
  - 四分律の三宗二九七——道宣律師二九八——法蘊懷素二九九——新舊兩疏の調  
和三〇〇——義淨三藏と有部律三〇一
- (9) 密教三〇一
  - 金胎兩部の傳來三〇一——三經三〇二——不空三藏三〇三

### 第五章 宋以後の佛教

三〇四

宋の變遷と佛教三〇四——徽宗の排佛三〇五——蒙古と佛教三〇六——元の臨濟宗  
及び劉秉忠三〇七——明の太祖と佛教三〇八——明の僧官三〇八——僧道行と成祖  
(三〇九)——宋以後の天台宗三〇九——吳越王と歸震三〇九——天台宗山家山外の争  
(三一〇)——山家山外略系表三一〇——山家山外の重なる學者三一〇——宋代の四分  
律再興三一〇——華嚴宗の學者三一三——禪宗の状況三一四——楊岐黃龍二派略系  
表三一五——雲門曹洞二派の禪三一六——元の道教排斥三一七——雲棲と藕益三一  
八

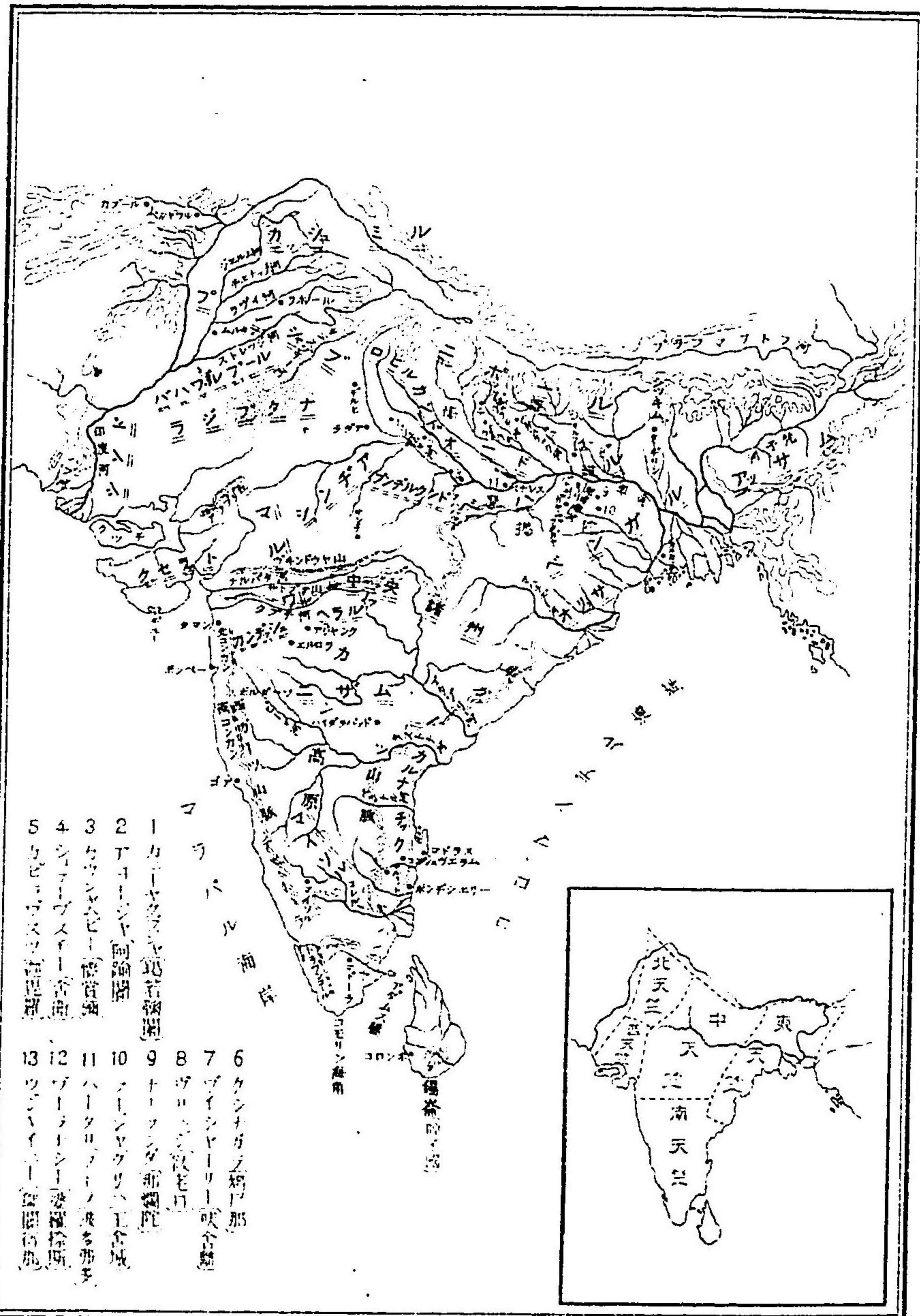
第六章 西藏及び朝鮮の佛教

(一) 西藏

西藏佛教の起原(三一九)——スロン、ツアン王とドルジャン及びドルガル(三二〇)  
 ——チ、スロン、ツアン王と喇嘛教(三二一)——ラン、タルマ王の排佛(三二一)——モラ  
 ムケル、ツアン王の佛教復興(三二二)——登思巴(三二二)——札克巴の喇嘛教改革(三二  
 二)——達賴喇嘛、班禪喇嘛(三二三)

(二) 朝鮮

朝鮮史の要領(三二四)——朝鮮變遷略表(三二六)——朝鮮佛教の起原(三二六)——三國  
 佛教の端緒(三二七)——新羅佛教の隆盛(三二七)——高麗の佛教(三二八)——僧遍照の  
 禍(三二九)——李朝の佛教排斥(三三〇)



- 1 カシヤノミヤノ石室(朝鮮)
- 2 丁卯(朝鮮)
- 3 カシヤノミヤノ石室(朝鮮)
- 4 シンイノミヤノ石室(朝鮮)
- 5 カシヤノミヤノ石室(朝鮮)
- 6 カシヤノミヤノ石室(朝鮮)
- 7 カシヤノミヤノ石室(朝鮮)
- 8 カシヤノミヤノ石室(朝鮮)
- 9 ナンノミヤノ石室(朝鮮)
- 10 ナンノミヤノ石室(朝鮮)
- 11 ナンノミヤノ石室(朝鮮)
- 12 ナンノミヤノ石室(朝鮮)
- 13 ナンノミヤノ石室(朝鮮)

# 佛敎史要

境野黄洋著述

## 印度

### 印度概説

(一) 印度の地理及び住民

印度は亞細亞大陸南面中央部より印度洋に突出したる三角形の一大半嶋にして、北緯八度より三十五度に達し、東西の最も廣きところは八百里に至る。面積凡そ二十三萬餘方里にして、殆んど我國の七倍に當り、人口は凡そ二億七千餘萬なり、其の首府カルカッタは、世界に於て最も人口稠密なるものゝ一なり。



印度半嶋最南端は即ちコモリン海角にして、アダムの橋を隔て、錫崙嶋と相對す。コモリン海角より半嶋の東海岸を、世に稱してコロマンデル海岸といひ、半嶋の東面、後印度半嶋との間にある一大灣は、之をベンガル灣となす。半嶋の西面を擁する海は即ちアラビヤ海にして、コモリン海角より西面に沿へる海岸を名けてマラバルといふ。

印度半嶋中には、マラバル海岸のゴア(面積四十方里)及びダマン(ポムベジの北)、(カムベリ)の如き葡萄牙の領地あり、ボンヂシリ(マドラスの南)、(カムベリ)の如き佛蘭西の領地あり、またヒマラヤ山の南麓地方には、彼のニポール、ブータンの獨立國ありと雖、其の他の大部は殆んど皆英國の支配する所にし、印度皇帝の任命したる印度總督の統轄を受くる直轄部は言ふ

に及ばず、今なほ藩王ありて其の統治をなすと稱する藩屬部も、皆印度總督の派遣したる英國官吏につきて其政務を諮問執行せらるゝものとす。

印度半嶋の地勢は、之をヒマラヤ山地方と、中央大平原と、南部印度とに三分して見ることを得べし。ヒマラヤ山(雪)は、印度の北に於て彎曲して東西六百里に亘れる大山脈にして、此の大山脈中の最高峰エヴェレストは、實に二萬九千尺の高さを有す。此の大山脈は、西藏及び中央亞細亞との境界をなすものにして、其の西端よりアラビヤ海に向うて一支脈を出すものをスライイマン山脈、ハいら山脈等とし、之に對してヒマラヤの東端より出づる支脈を、ナーガール、パトコイの諸山脈とし、之によりて印度と上緬甸との境界をなし、更に其の南にヤマ山脈ありて、また印度と緬甸本部との境界を劃

するなり。

ヒマラヤ山は、其の最下層には熱帯性植物繁茂し、其の上層七千尺以上には灌木叢生す。此等の地は瘴氣身軀を侵し、人の住居に適せざる處多しと雖、なほヒマラヤ族と稱する蠻人の巢窟となれり。最下層地方に至りては、固より一般人の生活に應へり、ニポール、ブータンは此の山麓地方の獨立國なり。

ヒマラヤ山及び其の支脈によりて、北方と東西の一部とを包まると一、大平原を名けて印度中央平原となす。此の大平原は、南ウインドゥヤの低山脈を限界とし、東は恒河領域の平原に屬し、西は印度河の領域地に屬す。印度河の西にハブの小流あり、これ印度とベルチスタンとの境界を劃するところとす。印度河はヒマラヤ山の背面西藏に發源し、山脈の間を貫流し、セールム(ヒダス)、ケーナッブ(アケシ)、ラ

ウ、及びストレッジ(ヒフ)の諸流を併せて南流し、アラビヤ海に注ぐ。印度河と恒河兩流灌域地の間には、一砂漠ありて其の分界をなす。一小流ヒマラヤの南麓に發して、其の跡を砂漠の中に没するもの、これ即ち古代の印度人が神聖視せしサラスワチ(辨才天は即ち此の河)とす。此等印度河の諸支流、及びサラスワチ(辨才天は即ち神なり)河の流るゝ地方を總稱してブンジブと名づくるなり。蓋し此の地方は、印度人の祖先が最も早く其の文化の端を開きたるところにして、其の後マケドニアの亞歷山王の來侵せしも亦此の地方なりとす。

恒河は印度中央平原の大部を潤ほす所の大水流にして、印度アルヤ文明の花は、實に此の河領の地に開けたるなり。支流無數南北より來りて之に合すと雖、就中大なるものはジムナ河とす。太古拘留(ルク)般遮羅(ヤンラ)の跡も此の流域の西部にあり、摩揭陀強盛の舊

都も此の流域の中央南部にあり、佛陀誕生の靈地入滅の聖跡も亦皆共に此の河領中央の北部にあり。恒河の下流に於てアッサムより來り、之と合流するブラマプトラ河は、印度河の發源地と遠からざる西藏に出で、ヒマラヤの東端を貫き、アッサムに出で、東ベンガルに至り恒河と合す。印度政廳のあるカルカッタは、恒河の三角洲に建てる大都會なり。

中央平原の南ウインドゥヤ山以南の高地を稱してデッカ高原といふ。(デッカは南の義、或は右手の義)此の高原は、中央平原より漸次南に登りてウインドゥヤ山となり、之と相並んでサトプラ山となり、以て高原地方に入る。ウインドゥヤは、グゼラットの半嶋底部より起りて、山脈東に延き、斷續せる丘陵をなして恒河の邊に達す。此の丘陵はウインドゥヤの西端より派出せる丘陵アラヴリと相對す。元來嚴密なる意味に於て、デッカの

稱呼は、ウインドゥヤ山とサトプラ山との間を流るゝナルバダ河と、東方ベンガル灣に入るクリシナ河との間を指すものなれども、一般にはウインドゥヤ山よりコモリン海角までの高地全體を汎稱することゝなれり。されどウインドゥヤの東端は一條の脈をなして海邊にまで達せるにあらず、即ちオリッサ地方と恒河領域地の間には、西部ウインドゥヤの如く分明に區別すべき境界なし、これ印度南部の文化は、早くオリッサの海岸を通して、遠く半嶋の南端に達することを得たりし所以なり。

デッカ高原は、北部ウインドゥヤ山脈を以て限らるゝのみならず、其の東西の二邊は、また東ガーツ、西ガーツの山脈を以て三角形に包圍せらる。(ガーツは上陸階段の義にして、海より上陸し、高原に入る階段をなせるによりて呼ばる)西ガーツは東ガーツより高峻にして、古昔は、此の山脈を越えてデッカに入ることを極めて困難

なりしなり。此の所謂高地の入口たる階段の道路の中に於て、ボル  
ガートの如きは最も有名なるものにして、デッカンの鍵鑰と稱せら  
れたる所とす。東ガーツの東邊はコロマンデル海岸の地と接続し、地  
勢稍廣し。東西ガーツの南端に至りて相合したる所は、地勢益高く、  
マイソール高地の南に於て、ニイグリースの丘陵は特に著名なりとす。  
デッカン高原よりの排水は、西アラビヤ海に注ぐものに、ナルバダ、タ  
プチの二流の北部にあるありと雖、タプチ以南コンカン、マラバル  
の地、一の其名を擧ぐべき河流なし。然れども東ガーツを貫流する  
大河は、マハナデー、ゴダヴリ、及びビーマ河を併せて東流するクリ  
シュナ(二名キ)並びに其の南方にもベンナル、ケプリー等の諸流あり  
て、其の流域は皆南方文明の最も早く開けたる地方とす。  
正當に印度の住民、即ち印度人と稱するものは、アールヤ人にして、

歐羅巴人、波斯人等と其の起原を同うす、之を印度アールヤ人と稱  
す。然れども印度の土地に住する人種は、獨り印度アールヤ人のみ  
にあらず、印度アールヤ人の印度に來りし以前、此の土地に住した  
りしドラウダ人あり、ドラウダの居住以前に印度に居りしコラリ  
ヤ人あり、此の二種族は、共にモリヤ人に屬するものにして、皮膚  
黒く、殆んど亞非利加黑人に近きものもあり。アールヤ人の印度に  
來るや、之がために征服せられて、或は南部デカんに潜匿せしもの  
あり、或は其の他の山地森林に逃れしものあり、若しくは全くア  
ールヤ人に服従して、奴隸となりしものあり、この征服者と服従者と  
の區別は、即印度のカスト、所謂社會階級制度の起原をなしたるも  
のなりといふ。

印度の階級制度は、摩菟の法典によりて定められたる如く、婆羅門、

刹帝利、吠舍、首陀の四類を根本とし、更に其の雜種にはまた幾多の區別を見るに至る。例へばアムバシタ(父、婆羅門、母、吠舍)ニキーダ(父、婆羅門、母、首陀)乃至旃陀羅(父、首陀、母、婆羅門)等の如し。蓋し此等の階級はもとアールヤ人と服従者たるドラウダ人(首陀)との二種の區別に過ぎざりしが、後に至り王族を助けて祭祀を行へるものは自ら之を以て其の職とし、子孫に傳ふることゝなりて、婆羅門族を生じ、婆羅門は其の職の神靈に關するの故を以て、終に王族(武)を壓して自己の神聖を主張するに至り、之と同時に、また一方には、戦時には武人たり、平時には農民たりしアールヤ人は、自らこゝに武人と農民(平)との區別をも見るに至りたるものなるべし。但し現今の印度にありては、第三級の吠舍は、殆んど之を見ること能はずといふ。

現今ドラウダ人の住する地方は、半嶋の南部トラブンコールより

コモリン海角の地を經、東海岸カルナチック地方(タミル語の、トラブンコールの北、マラバル海岸の南部)(マラヤラム語、マドラスの北、コロマンデル海岸に沿へる地方)(テルグ語の、)其他マイソル、并びにポムペー以南の一部の地(カナレシ語の行はるゝ所)にして、北方にはまた一層未開の状態にあるドラウダ人の住する所あり、中央諸州(セントラルプロヴィンセス)のゴンドワナに住するゴンド、西ベンガルとクッタックの南西山地に住するオライオン、其の南西オリッサとチカンの間の山地に位するコンドの如き、其の他一々枚擧するに違あらず。ユラリア人の系統に屬するものは、中央諸州のナーグプールの高地に住するコール人にして、ホー、サントール、ジュアング等の諸族なほ多し。

ヒマラヤの山地地方には、西方ブンジブより、東部ベンガルまでの間に、また左ラニア種に屬すべき蠻人の住するところを見る。所謂ヒマ



十二  
ラヤ族と稱するものにして、ブンギア以西には、此の種族を見ずといふ。勿論ヒマラヤ山地の住民は、皆ヒマラヤ族たるにはあらずして、印度支那人と稱すべき雜種は、ヒマラヤの南側より、アッサム、緬甸に廣く住することを見るべし。

同一印度アールヤ人にて、其の用ふる言語は極めて多様にして、一般高級の印度人の用ふる印度語の外、ベンガリー(ベンガール語)、マラーティー(デブガンのマハラトラーシンドラ語、コンカン語之に屬す)、グジラター(グゼラット語)、ベンギール(ベンガル語)、シンデー(ドシ語)、カーシミーリー(カシム語)、オリヤ(オリッ語)、并びにニポール人のニポリー、アッサム人のアッサミス、錫崙に行はるゝシンハリース等の區別あり、また回教徒の中には、アラビヤ人、アフガン人、モイガル人、波斯人等を含むが故に、言語また自ら異なるものありて、或る學者の説によれば、印度言語の複雑なること、其の土語の區

別をも數ふるときは、凡そ五百三十餘の種類に上るべしといへり。今此等の言語の系統を尋ぬる時は、ドラウド人の語、コラー人、印度支那人の語、印度人の語、回教徒の語の四種に大別することを得べしといふ。斯くの如く其の言語の複雑を極むる所以のものは、また以て人種の複雑なることをも證するものといふべし。

## (二) 印度歴史の大要

印度は歴史の最も不明なる國にして、學者の所説容易に一致し難きものも少からずと雖、今其の概要をこゝに示すべし。

印度の歴史は、アールヤ人の印度に來りしに其の端緒を發く。アールヤ人はもと中央亞細亞の阿姆河附近の地に居住せしものにして、後其の一部は南下して印度河の領域地に入り來り、他の一部は

波斯に入り、一部は遠く西方歐羅巴に行きて歐羅巴人の祖先となれり。アールヤ人の印度河領域地に入りしは、大凡紀元前二千年頃のことにして、其の初めは今のブンジブ地方に住し、波斯人は此の地方を呼びてヒンドースターンと言へり、これもと印度人の祖先が、印度河附近に居りしより、之をシンドー(シンドーは海の義)といひ、シンドーの住地の意にてシンドースターンと言ふべかりしを、轉じてヒンドースターンと呼びしが、此の語希臘人に傳はり、ヒンドーは再び轉訛してインドイとなりしもの、これ印度の國名の起原なり。(支那に支那の音を書せしものなり)されば印度には元來一定の國名ありしにあらざ、古書には往々バーラタ、グルヤ(バーラタは種族の名後に明)又はアールヤ、ブルタ(ブルタは住地の意)の名あれども、固より一定の國名にはあらず。(アールヤ人の最初の住地につきては、寧ろ歐洲にありて、漸次東進して亞細亞に來り印度に入れるものなりとの一説もあり)

アールヤ人の印度に來りし以前に、印度中央平原に住せしものはドラウダ人にして、この種族の前に別にユラリア人あり、これ印度最初の土人なりしことは前に述べたり。さればアールヤ人は、此等の原住種族を征服驅逐して、漸次其の文化を全印度に波及せしむるに至りたるものにして、所謂アールヤ、ブルタは、次第に其の範圍を擴張し、西より東に、北より南に及び、チカン地方の廣くヒンドー化したるは、紀元前十世紀以後のことなるべしといふ。印度アールヤ人のブンジブ地方に居住せし間の状態は、古典『リグ吠陀』に存する傳説によりて之を推測することを得べく、其の間は凡そ紀元前二千年より千四百年の頃に至る、所謂一般に吠陀時代と稱するもの是なり。之を印度歴史の第一期とし、アールヤ人の足跡は未だ多くストレージ河以東の地に及ばず。

第二期は名けて一般に之を叙事詩時代といふ。蓋し此の時代の事は著名なる摩訶婆羅多(マハタグ)及び羅摩衍那(ラマナ)の二大叙事詩によりて知ることを得べければなり、其の間凡そ四百年にして紀元前千四百年より一千年に達す。此の期に至りてアールヤ人はストレヅ河を越えて、恒河領域に其の國を建つるもの多く、此の末期にはベナレス、テルフートの地に、種々の王國を見るに及べり。就中有名なるものは、紀元前千四百年頃より凡そ二百年間隆盛を極めし拘留般遮羅の二種族にして、拘留は一名婆羅多(バタ)といひ、其の首都は今のデルヒの附近(ハムラ)にあり、般遮羅はカノージ附近(ピルヤ)にあり、此の二國の戰爭に關する事蹟は、即ち大叙事詩摩訶婆羅多の主題となりしものなり。今のテルフート附近にありし毘提訶(デヒ)は、紀元前千二百年頃より漸次盛大を致し、其の王闍那駒(ヤジ)

カ)は、婆羅門の權力に反抗して鳩波尼殺曇(ウパニシ)の端をなしたる人なりと傳へらる。蓋し婆羅門族の漸く自己の權力を擴張するに及び、刹帝利の武族は之と拮抗するに至りしのみならず、婆羅門族の專有せる宗教に關しても、刹帝利は別に思索的の新方面を開拓せんと企てたり、これ即ち鳩波尼殺曇の起源なり。毘提訶の西南グンダク河を隔て、ユッラ國あり、其の王、羅摩(ラ)は毘提訶王闍那駒の女私陀(タリ)を娶れり、これ大叙事詩羅摩衍那の主人なり。第三期は、紀元前一千年より三百年頃に至る凡そ七百年間にして印度に於ける哲學思想の最も發達したる時なれば、假りに呼びて之を哲學時代といふべし。蓋し『吠陀經』は既に第二期に於て編輯せられしが、第二期の末に至りて鳩波尼殺曇の端を開き、第三期に及び、鳩波尼殺曇の哲學思想は益發展し、終に進んで數論、勝論等の哲

學的諸宗派を起し、其の極佛教の勃興を見るに至りたり。其の他此等諸宗教の外に於ても、有名なる文典學者波爾尼(Pāṇini)の出世はまた此の期間にあり。(波爾尼は紀元前四世紀頃の人、一説九世紀或は十世紀)從來アーリヤ人の文明は、印度河、恒河二大流域の地を出でざりしが、其の影響漸く遠く南方に及び、南部に隆盛の王國興起を見るに至りたるは、また此の第三期に始まるものとす。此等諸王國の中最も著名なるものは、珠利耶(Ujjayini)、バンドヤ、チェラの三國にして、珠利耶は始めアルコト附近に興り、クンチー(即ちクン)を其の都とし、バンドヤは其の南に位し、最初の都はクルキーなりしといふ。チェラは、其の西部にあり、今のマイソル地方は其の中心なりしが如し。珠利耶とバンドヤとは、紀元前四世紀の頃、合して一國となりしも、紀元三世紀に至り、再び分離して珠利耶の都はタンジールとなり、バンドヤ

の都はマドッラとなれり。

第四期は、紀元前三百年代より、紀元後五百年に至る凡そ八百年間を包括し、中天竺に摩揭陀國興起して、佛教に厚き保護を加へてより、佛教漸く從來の婆羅門教に代りて思想界を支配する大勢力となりしが故、假りに此の間を佛教時代と呼ぶべし。

摩揭陀國の起原は、之を詳にすること能はずと雖、叙事詩時代、即ち拘留般遮羅戰爭の頃、アーリヤ人は、既に此の南部ベハル地方に來りて、建國し居たりしは事實なりしが如く、ブリハドラタ(紀元十三世紀より八世紀まで)、ブラヂョタ朝(同八世紀より七世紀まで)を経て、シスナーガの創めたるシスナーガ朝(紀元前七世紀より四世紀の終りまで)に至る。佛在世の時代に於て、佛教を保護したる頻婆娑羅王及び阿闍世王等は、皆此の王朝に屬す。(頻婆娑羅王はシスナーガ朝五代の王にして、阿闍世王は其の子なり)此の朝、難陀王に至り、八子あり、其の位を相續す、

故にまた此の間を難陀王朝といふ。難陀王朝の衰ふるに乘じ、終に摩揭陀の王位を篡ひて自立したるものは、即ち摩裕羅朝(マウルヤ、譯して孔雀)の戰荼羅笈多(ヂャンドラ)となす

笈多王は、恰もマケドニヤの亞歷山王と同時の人にして、亞歷山王が亞細亞に入り來り、波斯を滅ぼし、大夏に轉じ、更に南下して印度河領に侵入するや、笈多一たび亞歷山王の下に屬せんとしたりしが、亞歷山王のバビロンに死し、セリ、ユーコス、ニカトルのシリヤ王となり、亞歷山の亞細亞に於ける領土の大部を領するに及び、笈多は兵を擧げて希臘の守兵を印度より驅逐し、其の勢殆んと摩揭陀を壓せんとする者ありしが、終に難陀朝を滅して自ら摩揭陀王の位を踐めり。シリヤ王セリ、ユーコスは、後笈多王と和を講じ、メガステテス(メガステス)を大使として摩揭陀の王都、波吒利弗多(パトタリ)に駐在せしめ、

こゝに於て始めて印度の事情詳に歐羅巴人に傳はるに至りたり、笈多王は、希臘史家の呼びてサンドロコッタスとなす所のものなり。蓋し王の領地は、東はベハルより、西ブンジャブに達し、所謂恒河領域より印度河領域を合して、殆んと中天竺及び北西天竺の大部を統一し得たるものにして、これ實にアールヤ人の印度に來りてより、最初の政治的大統一なりといふことを得べし。

笈多王の即位は凡そ紀元前三百年代の終りにして、王の死後其の子頻頭婆羅王位を嗣ぎ、次に有名なる阿輸迦王の時代となれり。王の死後摩揭陀は一たび衰微に傾きしが、將軍弗沙密多羅(フシトヤ)其の位を篡へり、之をスンガ朝となす。スンガ王朝の繼續は一百餘年にして、大臣グースデヴ、カンヴ代りて新王朝を建つ、之をカンヴ朝と名づく。カンヴ朝は僅に四十餘年にしてこゝに案達羅(アン)朝起

れり。案達羅朝は早く南方に興起したる王國にして、其の王都はゴ  
ダヴリー河の南、瓶者羅(ウインガラ、又  
ブランガラ)にありしが、此の時代に及び、勢  
力北方に延びて摩揭陀を併呑し、以て前のカンヅ朝に代はれり。案  
達羅朝は紀元前一世紀より、凡そ四百五十年(紀元四百三  
十年まで)にして其の  
勢力を失へり。

案達羅朝の興起後は幾もなくして中央亞細亞地方より月氏王の  
印度侵入あり、有名なる佛教の保護者迦賦色迦王は、即ち此の種族  
に屬するものとす。之より前、紀元前二世紀頃より、大夏の希臘人北  
より印度に入り來り、一時勢力を得たりしが、彼の彌蘭王(ミリンダ、又  
はメナング)は即ち此の希臘大夏の王なりしといふ。此等希臘人の進入は、希臘  
文化の影響を印度に與へたること蓋し疑なかるべし。今、月氏の王  
は即ち此の希臘人を破りて、更に印度西北の地を占領したるもの

にして、迦賦色迦王の時は、其の支配せし所、印度にありては東アグ  
ラに達し、南グゼルトに及びたりき。

迦賦色迦王の死後、迦濕彌羅王朝の勢力一時微弱なりしかば、西印  
度グゼルトの地には、別にサハ王朝の獨立を見るに至る。此の朝は  
もと月氏族にして、迦賦色迦のために此の地方を鎮撫したるもの  
なりしといひ、或は波斯人の、海路此の地に侵入して獨立したるも  
のなるべしともいふ。其の國祖はナハバーナにして、此の朝は凡そ  
紀元一世紀より、同四世紀に至りて滅亡したり。

迦濕彌羅の勢力萎縮して振はず、其の後紀元五世紀の頃までは外  
人の交互侵入殆んど絶えざりしが、摩揭陀の案達羅朝の衰微する  
に當り、釋迦(月)耶槃那(夏)の希臘人(大)を始めとし、諸種の異人族交るゝ  
東進せしが、代りて印度の中央平原を統一したるものを、笈多王朝

となす。笈多大王の此の朝を起したるは、凡そ紀元三百年頃にして、勢力の盛なりし時に當りては、其の領土東北は今のベンガル、フッサム、ニポールに及び、西はサハ朝を滅ぼし、尙ほ遠く其の威南方印度に加はれりと稱せらる。笈多朝の衰亡は、笈多大王より凡そ二百年にして、紀元五百年の頃にあるが如し。但し笈多朝滅亡の事情につきては、種々の説ありて明ならざるが如しと雖、要するに新に蒙古人の侵入によるものとなすべきが如し。トラマーナ、其の子ミヒラクラの如きは此の蒙古族の王なり。

以上は第四期に於て摩揭陀を中心とせる諸強王朝興亡の大要にして、此の時代は婆羅門教に對して敢て迫害を加へたるにあらず、多くは佛婆兩教相並んで行はれ居たりしが如しと雖、特に佛教の盛なりし時代に屬す。然るに紀元五百年代に至り毘訖羅摩阿逸多

(ウイクラマ)、即ち超日王の出づるに及び、印度の舊思想勃然として起り、所謂婆羅門教の變形、印度教興起の端をなしたる時にして、之より以後を稱して印度教時代と名つくべし。此の朝は即ち鄒闍衍那(ウヰジャ)の超日王朝と稱するものにして、印度文化の其の極に達したる時となす。其の學者の盛なりしことは、所謂超日王朝の九寶珠と稱せらるゝ名稱の後世に存するにて知らるべし。(九寶珠とは、クシヤバナカ、アマラシンハ、サンク、ヴェターラ、バクタガタ、カルバラ、カトリ、グーサ、ヴラーハミヒラ、ヴラルチ)就中カリーダーサは有名なるサクンターラを始めとし、幾多の戯曲及びクマール、サムバヴ等幾多の叙事詩、叙情詩等製作最も多く、當代文學の巨擘と稱せられ、アマラシンハは、言語學者として特に有名なり。超日王の後、新日王(婆羅阿迭多)位に即きしが、これ恰も特に深く佛教の世親菩薩に保護を加へし時代に當るといふ。其の後ブラバールカラ、ヴルダナ、及

び、邏闐伐彈那(ラゲダヤ)を経て、戒日王に至る。蓋し邏闐伐彈那、隣國羯羅拏蘇伐刺那(カルナ、スゾガルナ)の王設賞迦(サカ)と戦つて敗死す、こゝに於て王弟曷利沙伐彈那(ハルシヤ)位に即き、羯若鞠闐(カヌジャ、曲女城、今ノカノイジ)に居る、之を戒日王となす。王の時代は、支那の玄宗の印度に遊學せし時に當り、王は自ら佛教戯曲ナーガナンダを著はし、ラトナーゴリーと稱する戯曲をも著はしたりと稱せらる。(實はラトナ當時の文豪バインナベツタの作なるべしともいふ)其他超日王以後此の王朝の衰亡に至るまで、諸種の學者前後輩出して一々枚擧すべからず。超日王が北方迦濕彌羅を征し、其の臣マートリダグタを封じて迦濕彌羅王とせしが、マートリダグタは、また當代の大詩人なりしといふ。此の王朝は超日王より以後凡そ三百年にして、紀元八百年頃衰亡したるが如し。之より二百年間の状況は、殆んど詳ならずと雖、此の間に於て、印

度は終に一轉して新種族の興起を促し、印度の形勢はこゝに全く一變したるが如し。其の所謂新種族とは、ラジプト族と稱するものはなり。

ラジプト族の起原に就いては、種々の傳説ありて明ならずと雖、最初はネルキヤ(グゼラツトの地に據る)、バリハラ(マルワ地方)、ブラマラ(西部マ)、香ハン(デルヒ及ビア)の四より次第に繁殖擴張したるものにして、蓋しスキジャンの後なるべしといふ。然れども更に一方には回教徒の新に印度に進撃し來るありて、ラジプト族は、また漸く回教徒のために滅亡せらるゝに至りたり。ラジプト族は最も熱心なる印度教徒なりしも、こゝに於て回教徒の大打撃を蒙ることゝなりしなり。超日王が其の朝を興してより、回教徒の侵入まで凡そ五百年間を印度教時代とすべし。



第六期、回教時代は、紀元一千年代より、英國人の印度に來りて其の勢力を得し十七世紀までを包括す。蓋し回教徒の始めて印度に入りしは、紀元七百年代に、ムハムド、カーシムのシンド地方征服を始めてすべしと雖、其の勢力は、永續せず、紀元一千年代前後に至り、ガズニ朝のマフムードの印度征略は、實に回教徒の印度に於ける活動の端緒とすべし。マフムード嘗てグゼルトに至り、其の地の印度教の聖堂を破壊するや、國人黄金を以て之を贖はんことを請ふ、マフムード答へて曰く、我は偶像破壊者なり、偶像商人にあらずと、其の宗教的反感の盛なりしを想像すべし。ガズニ朝に次いでゴトル朝興り、此の朝の祖ムハムド、ゴリは、東進してベナレスに達し、印度河領以東、ブラマプトラ河域の地に至るまで、之より全く回教徒の據有する所となる。其の後、奴隸王朝、キルジ朝、トグルク朝、サイド朝

ペロリ、ロデーのアフガン朝を経て、回教徒の勢力は、遠く南部デッカに達したりしが、十六世紀に至りて、彼のバーベルのモーガル帝國こゝに起れり。

モーガル帝國以後、葡萄牙人の喜望峰回航より、英國人が終に殆んど全印度を領するに至るまでの近代の事跡は、人の多く知悉する所なるを以て、今敢て詳述せず。

- 第一期—吠陀時代(紀元前二千年より同 千四百年まで)
- 第二期—叙事詩時代(紀元前千四百年より同 千年まで)
- 第三期—哲學時代(紀元前千年より同 三百年まで)
- 第四期—佛教時代(紀元前三百年より紀元五百年まで)

此の期の勢力の中心は、摩揭陀王國なり、摩揭陀王國は、ジャラーザンダ朝(紀元前一二八〇)、ブラヂマタ朝(紀元前七七五)、シヌターガ朝(紀元前三七〇)

を経て此の期に入る。

- (一) 摩裕羅朝(紀元前三百七十年より同百三十八年まで)
- (二) スンガ朝(紀元前百八十年より同七十年まで)
- (三) カンワ朝(紀元前七十年より同二十六年まで)
- (四) 案達羅朝(紀元前二百三十六年より同四百年まで)

此の期の初めに月氏迦賦色迦王の西北地方侵入あり、迦賦色迦王殂後、諸種の外族西北に交互來侵すること五世紀に達す。

- (五) 笈多朝(凡そ紀元三百年頃より同五百年頃まで)

### 第五期—印度教時代(紀元五百年より同千年頃まで)

- (一) 鄧闍衍那朝(王朝)
- (二) 羯若鞠闍朝(王朝)
- (三) ラジプト族興起

### 第六期—回教時代(紀元前千年より同千六百年まで)

### 第七期—英國服屬時代(紀元千六百年より現今まで)

## 第二章 印度の宗教

印度は世界に於ける宗教國なり、印度人の如く宗教的なる人種は他に其の類を見ること尠く、印度の如く宗教の種類に富める土地また他にあることなし。最も深遠高遠なる哲學的宗教より、最も野卑賤劣なる迷信的宗教に至るまで、有らゆる階級の宗教は、殆んど悉く印度に存せざることなしといふも過言にあらず。佛教はまた實に此等宗教の中に發生したるものにして、佛教の印度宗教史上の位置並びに相互の關係を知悉せんとするには、先づ印度宗教の大躰の變遷に通じ、然る後佛教と佛教以前の諸宗派と如何なる發達上の關係を有するやを明にすることを要す。蓋し印度の宗教は、斯くの如く其の種類多岐に分るといへども、總括して之を婆羅門

教と呼ぶ。佛教と婆羅門教とは、印度宗教の二大系統なり、然れども此の二者、亦實は其の初め、畢竟一根元より出てたるものに過ぎざるなり。

### (一) 印度宗教の變遷

前章に述べたりし印度歴史の變遷により、印度の宗教は、如何なる歴史を有するやの概要をも知るに難からざるべし。初めは『吠陀經』によりて説かれたる、自然崇拜を主とする神話時代に其の端を發し、鳩波尼殺曇、并びに之より發展したる哲學的諸派、及び佛教となり、超日王朝以後印度教の興起を見、ラジプト族によりて益印度教の隆盛を致すこととなりしが、終に回教徒の侵入となり、歐羅巴人の來るに及びて、新に基督教の輸入を來すに至りたるものとす。

回教以後のことに至りては、今こゝに之を述ぶるの必要を見ず、唯印度の地に開展せし所謂印度思想の變遷に就いて、今其の概要をこゝに畧述すべし。

婆羅門教の起原に就いては、到底今日より之を確知すること能はず、蓋しアールヤ人は未だ印度の地に來らざりし以前に於て、既に一種の自然崇拜の宗教を有し居たりしものにして、印度に來るに及び、四圍の境遇に應じて益變化發達したるものなることは疑なかるべし。『吠陀經』に記する所のものは、則ち印度人古代の宗教を傳ふるものにして、就中『リグ吠陀』は其の最も古きものなりといふ。

『吠陀』は婆羅門教根本の經典にして、凡そ佛教以外の印度宗教は、皆之より其の源を發せざるものなし。獨り舊婆羅門教のみならず、

哲學的婆羅門教も、亦此の『吠陀』を研究し、之に哲學的思索を加へて起りたるものにして、印度教の諸神も、『吠陀』中に説かれたる諸神の中より發達變化したるものに外ならず。佛教と雖、思想上に於ては、『吠陀經』と發達上の關係を有するは明なりと雖、婆羅門教徒の如く、之を以て最上依憑となさざるが故、全く其の立脚地を異にするにあり。（佛教以外にありては、耆那教徒は、『吠陀』を最上依憑とせざるものなり）『吠陀』は蓋し智慧の意なり、婆羅門教の説く所に隨へば、此の書の起源は全く神授にして、人爲に成りしものにあらず、宗教的解脱の最上智慧は、獨り此の中に存するものなりと信ぜらる。然るに釋尊は、此等の印度人間の傳説を取らずして、『吠陀經』以外に最上智慧を求むべきことを説き給へり、これ佛教が婆羅門教の諸派に對して、別に一大系統を爲すものとして見らるべき所以なり。

古代印度人の崇拜せし神は、其の數甚だ多しと雖、大別して天上の神、空中の神、地上の神となすを最も便利なりとす。此の區別は、印度最古の『吠陀經』解釋者たるヤースカといへる人の説によるものなりといふ。天上の神の中に於て、單に天を神とし崇拜せしことあり、所謂ドヤウスと稱するは是なり。（ドヤウスは、此のドヤウスより出てたる語なり）然れども後に至りて最も盛に崇拜せられたるものは日神にして、之を蘇利耶（ルヤ）といふ。蘇利耶は其の光明耀々として下界を照破し、其の威力慈悲の洪大なること之に及ぶものあることなし、其の恩德によりて萬物の蘇息し孳育せらるゝより、之を或は大醫神としてダスラスと呼ぶことあり。蘇利耶の此の世界に顯はるゝや、東天紅色を呈して曉雲を破り來るところ、之を女神ウシヤスと云ふ故にウシヤスは曉神にして、ウシヤスの前驅として阿濕波（アシブ）と稱する二神

先づ現はる、阿濕波は雙生兒にして蘇利耶の子なり。蘇利耶は黄金の車に乗じ、七頭ある馬をして之を曳かしめ、毎日世界を監視する者なりとす。蘇利耶に十二人の子あり、蓋し一年十二ヶ月の大陽を指して、之を十二子に配したるものゝ如し、アーデトヤス是なり。地上の神も亦其の數極めて多しと雖、太古にありては單に地を神として之をブリチヅと呼びたり、然るに此の神また長く盛に崇拜せられざりしが如く、地上の神の中に於て、最も著しきものを阿祁尼(ニアグ)となす、阿祁尼は即ち火神なり。火神は地上の光明の神なること、天上の日神と相似たり。古代の印度人は天神を祭るに、山上に祭壇を設け、火を焚きて之に注ぐに蘇摩(ソム)を以てし、諸神は其の蘇摩の氣を受くるものと信ぜられたりしが、此の信仰は一轉して蘇摩も火も共に神聖なることの、やがて神力あるものとして考へら

るゝに至りしなり。阿祁尼は其の身軀赤色にして光明を放ち、二面三足七手あり、常に羯羊に乗じ、口よりは火燄を吐くものと信せられたり。一説によれば、此の神はドヤウスとブリチヅの子なりともいひ、または之をブラマの子なりともなし、種々の説を傳へたり。空中の神は因陀羅(インドラ)を以て其の主とす。因陀羅は暴風雨の神にして、四手を有し、二手に槍を携へ、他の一手は電光を持ち、他の一は空手なり、或は二手にして満身に眼を有するものとして畫かれたるもあり、名けてサハステラクシヤ(千眼)といひ、アイラヴァと名くる大象に乗れり。一説には此の神を阿祁尼の兄弟として、ドヤウスとブリチヅの子なりとなせども、一説には之に反してドヤウスとブリチヅは、因陀羅によりて出でたるものともなせり。一般に山谷の間黒雲叢がり出で、電光四射するときは、これ即ち因陀羅が

悪魔ヴリトラを征伏する時なりとせり。其の他ルドラの如き、マルツの如き、皆空中の神として特に著しきものゝ一とす。ヴリユとマルツとルードラとは、共に風神なり。蓋し『リグ吠陀』の上に於ては、此の類の神總べて一百八十の多きに達し、彼等は皆其の手より電光を發射し、以て共に其の敵ヴリトラを征服することに従事するものなりといへり。

婆羅門教の哲學的諸宗派は、自然崇拜の舊婆羅門教の一變したるものにして、祭神の儀式に關する密語を解釋せんとして出でたる鳩波尼殺曇に基きたるものなり。鳩波尼殺曇の始めて出でし年代は之を確知すること能はずと雖、刹帝利の王族が僧侶の跋扈に忍ぶ能はず、之に拮抗して、僧侶の専有せし『吠陀』經典に關して、別に思索的方面を開發せしもの其の端緒なりとの説あることは前章

に述べたり。鳩波尼殺曇中最も著名なるものを擧ぐれば、『リグ吠陀』に屬するアイタレヤ、『白ヤジュール』に屬するイーシヤ、『黒ヤジュール』に屬するタイトリヤ、『サーマ吠陀』に屬するケナ、『アタルヴ吠陀』に屬するカタ、ブラシナ等の諸鳩波尼殺曇なりとす。

鳩波尼殺曇を根源として出でたる哲學諸派は、其の數甚だ多きが如しと雖、就中著名なるものは數論及び勝論の二大派にして、佛教の興起も亦此等諸派に後るゝこと久しからざる時代にありしものゝ如し。之より婆羅門教諸派と佛教とは互に相拮抗して進み來り、特に佛教の勢力の盛なる次第に婆羅門教を壓するの勢ありしが如しと雖、紀元五世紀以後、特に七八世紀の交よりは、再び其の勢力を婆羅門教に奪はるゝに至りたるなり。

印度教時代は、紀元七世紀の終りヴエダンタ派のシンカラの婆羅門

教再興によりて、最も大なる打撃を佛教に加ふると共に、一方に超日王以後の『吠陀』的舊思想の復活は『吠陀』の多神的傾向を有する自然崇拜の信仰と、哲學的汎神教と結合して、こゝに交替神教的の印度教を産出するに至りしなり。印度教の主要なる神三あり、一を創造神なる波羅賀麼(ブラフマー、即ち梵天)とし、二を保護神なる毘紐(ウイシ)とし、三を破壊神なる溼伐(シヴァ、又摩醯溼伐羅、天、即ち大自在天)となす。蓋し此の三神は、其の本原皆『吠陀經』に出てたるものなることは論なく、其の發達の次第を考ふるに、全く神話時代の阿祁尼は、轉じて、波羅賀麼となり、蘇利耶の子アーデヤスの一なる毘紐は、一躍して三位の一を占め、溼伐は因陀羅、ヴァユ、マルツ等と共に一體の神たる、ルドラの變化して人格を與へられたるものなり。就中此の三神の中に於て毘紐と溼伐とは、後代最も盛に印度人の崇拜を受くるに至りしものなり。

して、印度教は、實に大別して毘紐派(ヴァイジ)、溼伐派(シャイ)の二となすことを得るなり。

毘紐及び溼伐を崇拜する印度教は、やがて種々の人格崇拜教に變じたり。其の一は即ち英雄崇拜にして、大叙事詩摩訶婆羅多、及び羅摩衍那中に説くところの英雄訖里瑟拏(ユナシ)及び羅摩を以て毘紐の化身として之を崇拜するもの是なり。摩訶婆羅多と羅摩衍那とは、前に述べし如く、其の製作の年時詳ならずと雖とも、歴史的事實によりて組織せられたるものなるべく、後代漸次に附加精練せられて今日の状態に至りしものなるべし。此の歴史的古傳説に基きたる叙事詩は、後に至りて終に人格崇拜教を成立せしむるに至りたるなり。其の二は即ち富蘭那(バラ)にして、富蘭那は古傳説の意なり。蓋し古傳と稱すと雖、實に假托して世に出てたるものにして、

實は其の古きものと雖、紀元六世紀頃、に世に現はれたるものなるべし。富蘭那は其の數甚だ多く、天地開闢をはじめ、種々の問題を解説し、三位の諸神について、廣く之を述べたりと雖、主として明す所は、實に毘紐及び其の化身の崇拜にあり。其の三は女神崇拜にして、女神は波羅賀摩の妻、薩羅娑縛底(サラスワティ、即ち辨才天)の如き、毘紐の妻ラクシミの如き、皆各女性神ありと雖、就中女神派の神は淫伐及び其の化身の女性なり。淫伐は男性女性の二面を具するのみならず、其の女性神にも亦アシタ即ち白性神(柔シタ)即ち黒性神(剛)の區別あり。黒性神は最も猛烈にして、突迦(ドル)或は訶利(カトリ)の如きは殊に有名なるものとす。女神崇拜は印度教の極めて賤劣なる信仰を表するものにして、其の宗教的行爲は、淫靡言ふに忍びざることなすに至る。一般に富蘭那を以て其の依憑とする一派は、名けて之を

ダクシナ、キーリン、即ち右手崇拜派といひ、女神派、所謂タントリカーをば、名けて之をブーマー、キーリン、即ち左手崇拜派と呼べり。

## (二) 佛教の興起と婆羅門教の教義

神話時代の婆羅門教が、鳩波尼殺曇となり、終に哲學諸派となりしとは、一般歐洲の印度學者の説く所なりと雖、支那に傳ふるところの説に隨ふ時は、哲學的諸派の所論實に多岐多端にして、異議百出、殆んど其の適歸する所を知らず、而して其の所説の單純なるものに至りては、頗る早く唱出せられたるものにして、所謂鳩波尼殺曇の思索時代に入る初期に於て存したりしことと推定せざるを得ず。例へば地を以て萬有の本原と説く地論師、水を以て萬有の本原と説く服水論師、火を以て萬有の本原となす火論師、風を以て萬有



の本原となす風仙論師の如き、其の他、方論師、空論師等、皆若し眞に一派の説として現はれしことありし者とすれば、則ち此の類に攝せざるを得ず。然れども、此等の事實は今日よりは殆んど其の眞相を詳にすることを得ず。

一切の萬有は皆極微の所成にして、所謂地水火風の四大を根本とすとの極微論は、自ら上述の單純なる諸宗の説と、發達上の關係を有するものにして、極微論として最も有名なるものは路伽耶陀(ロヤカ)即ち順世論なり。其の祖をキールヴァーカスといふ。足目の因明論は、認識の正確を根本とする論理派なりと雖、世界の説明にはまた極微論を取れりといふ。彼の衛世師派、即ち塞拏陀(カナダ)の勝論の極微説は、蓋し其の系統を此等の諸派に有するなり。

以上の諸派は、現象の本原を、客觀的に定めたるものなれども、之に

反して主觀的に現象の本原を説明せんとする所の諸派あり、即ち我生論是にして、所謂眞我を以て一切萬有の本原と説くもの是なり。此の我論にまた種々の區別あり、我は身體と其の大小を等うすと説くものあり、我體は極めて微小にして、豆の如く、芥子の如しと説くものあり、或は我體は宇宙に遍滿すと説くものあり。また我は外界を覺知するものなりとなし、或は我は反省内知の體なりとなす。斯くの如き種々の實我論は、皆數論、勝論、其の他の大宗派の先驅をなしたるものなるべく、佛教に於て、外道を目して彼等は無我の理を知らずとなすもの蓋しこゝに基く。

勝論は塞拏陀の開くところにして、(塞拏陀譯すれば)塞拏陀の生活、鷓鴣の如しとて、鷓鴣仙と呼びたりといふ。勝論の説は客觀世界の極微所成なること、及び此等の客觀世界に對して實我の體あり、實我

と客観との關係によりて種々の迷惑を生じ、生死に沈淪するが故、涅槃に趣かんとするには、此の關係を脱却せざるべからずとなすなり。

勝論は、客観に於て常住不滅の極微を説き、主観に於て常住不滅の我を説くが故、之を二元論と見做さざるべからず。然れどもなほ詳に言へば、極微は地水火風の四にして、此の極微の集合離散には、空時方位の三先づ存することを要す、以上の七を客観として、我と意との二を主観とす、これ所謂九實なり。但し通常の心、即ち意は、勝論派にては同じく之を極微所成となすなり、これ因明派、順世派等と同一なる點にして、又我體は宇宙に遍滿するものなりと主張せり。故に勝論派は、純然たる極微論と、一派の我論に加ふるに、空、時、方の三を以てし、之を大成し、世界の全組織を説明せんとしたるものなり。

ることを見るべし。勝論は以上の九實の外に、萬有の性質と作用とを説き、以て其の相關係し、種々の現象を呈する所以を明にす、今其の萬有分類の表を出して之を示すべし。

- (一) 實 — (地、水、火、風、空、時、方、我、意)……………九實
- (二) 德 — (色、聲、香、味、觸、數、量、別性、合性、離性、彼性、此性、重性、液性、潤性、行性、覺、樂、苦、欲、噴、勤法、非法)……………廿四德
- (三) 業 — (取、捨、屈、伸、行)……………五業
- (四) 大有性
- (五) 同異性
- (六) 和合性

但し後世の勝論は、實德業三句の外に、同、異、和合、有能、無能、俱分、無説の七句を説き、總べて十句となせり。要するに、勝論は實に德を具し、

業をなして、集合離散し、以て現實の世界をなすものにして、しかも實徳業は、永久不變(有)の性を有し、諸實諸徳、歴然淆亂せず(性同異)、しかも能く相調和(合和)して、以て斯くの如き世界を現するものなりとなすなり。

勝論は、斯く横に宇宙を分類して、之を説明したるが故、時間的に其の起原を説かざるが如しと雖、主観客観相互の關係により、種々の業をなし、其の善惡の業、因となり、生死に輪轉すとなすものなれば、差別世界を現するものは、其の原因、業にありとなすことは、數論も、佛教も、異なることなし。唯勝論は業のみを説きて、別に現象の實牒を説かざれば、純然たる無神論なれども、數論は之に反して、萬有開發の本原たる自性を説けり。自性は固より人格を有するものにはあらずして、物質的原牒たり、之に對して、精神的原牒を神我といふ、

萬有は此の自性と神我との和合により、自性の勇、塵、闇の三性平均を攪亂するより出づるものにして、此に於て始めて主観、客観、彼我の區別を生じ、以て善惡の行業を造り、生死に輪轉すとなすなり。故に涅槃に赴かんとするには、此の差別彼我の想を脱し、神我をして自性と分離し、獨立せしめざるべからずとなせり。(後世の印度教に於て女神派の思想は、

此の數論の自性を開發的の女性とし、神我を男性とし、男女二性の和合は、事物の本原なりといふの義に基きたるものなりといひ、また波羅賀、塵、毘紐、溼伐の三神の思想も、自性の三性、即ち勇は波羅賀、塵となり、塵は毘紐となり、闇は溼伐となりしものなるべしとの説あり、)

勝論と數論との二派は、佛教と其の關係最も密接なるものにして、其の數論との關係は、釋尊が多く道を數論派に質したりとの事實あるを以て推想せらるべく、勝論派との關係は、小乗佛教の教義が、勝論と須要の點に於て相一致する所多きを以て之を知ることを得べし。今小乗佛教と勝論の教義との類似點二三を擧ぐれば、

(一)勝論は自業自得の理を以て本とし、現在の苦界は、過去の行業の結果なりとして無神論を説きしが、小乗佛教も亦之と同一なり。

(二)勝論は、世界を説明するには、重に分拆的方式を用ひしが、小乗佛教の五位の如きは、亦同一の方式によりしものなり。

(三)勝論は三世實有の説を立てしが、小乗佛教に於ても、之と同じく原始の佛教に最も近しと稱せられたる有部宗の教義は、亦三世實有と説きたり。

(四)勝論は、物質の組織を以て總べて極微より成るとなせしが、小乗佛教に於ても、亦極微所成と説けり。

勝論は我論にして、佛教は無我論なるが故、根本に於て大なる相違ありと雖、其の他の須要の點に於て、斯くの如く一致する所あるを

見れば、勝論と佛教との間には、發達上の關係なしといふこと能はざるべし。數論との關係に至りては別に後章に至りて之を説くこととすべし。

又宿作外道と稱せらるゝ者那派(イナ)即ち尼犍子の説あり、佛教にて裸行外道と稱するもの是なり、若提子によりて開かる。若提子は國王の子にして、行跡は釋尊の生涯と甚だ相類似し、且つ『吠陀』の教權に反對したる點も、亦相同じ。此の派の教義は、寧ろ數論派に似たる所あり、苦行を以て最も其の必要なるものと認め、苦行によらずんば現在世界の束縛を脱して、精神の自由、即ち涅槃に至ることを得べからずとなせり。但し其の佛教の無我論に反對にして、有我説なることは、數論、勝論と同一教系に屬す。

以上の外、大自在天を説く有神の諸派あり。また哲學的諸派の中に

於て、特に『吠陀』の正統を承くと稱する聲論吠陀論、或は因明派等枚舉に違あらずと雖、直接佛教の興起に關係なきが故總べて之を畧すべし。

### 第三章 佛陀の生涯

#### (一) 成道以前

佛陀降誕の年代につきては、異説紛々として、其の數四五十の多きに及び、最も古きものは紀元前二千四百餘年、今より四千三百餘年前にありといひ、最も新しきものは、紀元前三百餘年、全より二千二百餘年前にありと稱す、古來支那日本に於て一般に信ぜられたる所によれば、今より二千九百餘年前(紀元前十世紀)(支那周昭王三十六年甲寅日本紀元前三百六十八年)にありといふ。其の是非の判定は容易にあらずといへども、

現存する確實の材料によりて推算するに、大凡紀元前六世紀より五世紀の間に、中天竺の地を教化したる人なるべしといふは妥當に近き説ならん。

古來傳ふる所の佛陀傳は、歴史的事實に雜ゆるに、種々の想像、或は附會の説を以てしたるが故、嚴密に言へば能く之を區別し淘汰することを要す。思ふに此等の佛陀傳には、大凡三種の方面あり、一は歴史的事實にして、二は想像的附加なり、三は哲學的解釋にして佛身論の發達は則ち此の哲學的部分に屬するもの多し。想像的附加にも細に之を研究する時は、種々の分子を含めることを發見すべし。例へば佛陀の傳記中には、印度古來の神話と結合したる部分ありとの説、西洋の學者によりて説かるゝが如き、其の一例なり。また年代の經過が、其の佛陀の性格を理想化して附會したる點もある

べく、或は全く詩人が其の洪大の徳を嘆美せんがために作爲したる形容寓話もなきにあらざるべし。されば以上の三方面を判明して、歴史的佛陀を描出せんとは極めて必要のことに屬すと雖、想像的方面も其の傳來既に數百千年の久しきにわたり、事實と想像との區劃を明瞭にせんこと殆んど困難なり。故に今は從來の傳説に基き、こゝに釋尊一代の經歷の大躰を叙述するこゝとすべし。

釋尊の祖先は懿摩王なり、故に印度に於ける四姓中の所謂刹帝利種に屬す、刹帝利(刹)は蓋し武人なり、懿摩王は即ち甘蔗王なり、傳説によるに、褒多那城(ラボタ)の王大茅草(茅草原語クンチャマ)子なし、國を大臣に附し出家して修道す、年漸く老ひて歩行すること能はず、弟子等出て、食を聚落に乞はんとし、王を籠裏に安置し、之を樹枝上に懸けて去る、時に一獵師誤て白鳥となし、射て之を殺す、流血二條をなして地

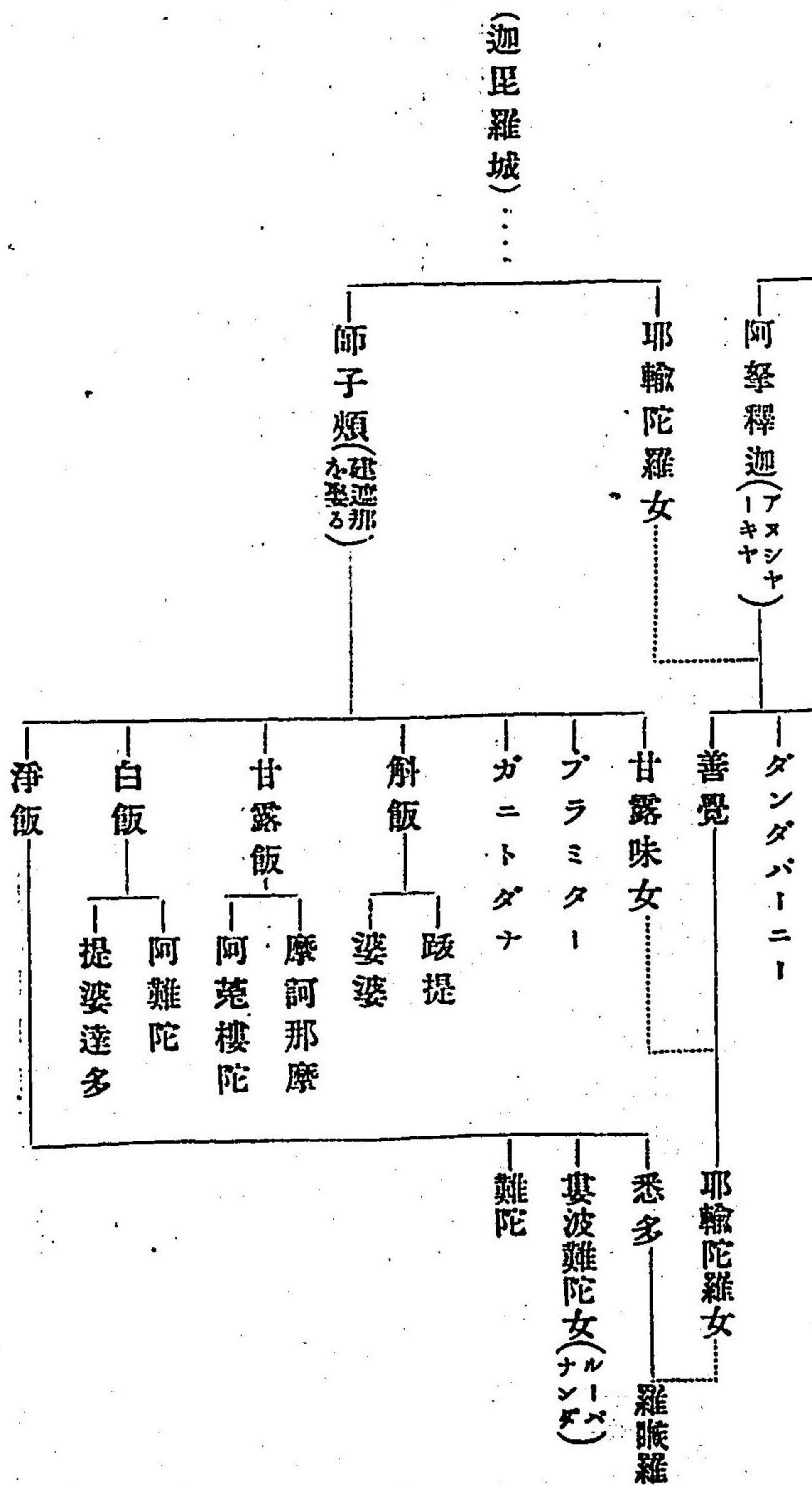
に滴り、二莖の甘蔗を生じ、蔗熟し、太陽の熱により開いて一童子、一童女を出す、童子は即ち善生といひ、これ大茅草の後を嗣ぎ、褒多那を治せしものにして、甘蔗王是なり、童女は善賢といひ、即ち甘蔗王の妃なり、これ甘蔗姓の起原にしてまた日種の稱ある所以なりと説けり。一説によれば、昔時王子瞿曇(ゴトマ)出家して道を修す、偶ま殺人の疑を受けて罪に處せらる、時に二滴精を地に墮す、滴精結んで二卵をなす、二卵日のために照され、自ら破れて二童子を生ず、これ即ち甘蔗王にして、世褒多那城に居る、其の日種といひ、瞿曇姓といふもの皆之より始まるとなせり。

甘蔗王に四子あり、王、後妃の所生を立て、位を嗣がしめんと欲し、四子を斥けて褒多那を去らしむ、四子即ち恒河の流に沿うて、東に下り、雪山の麓、婆儼羅河の邊に達す、時に河側に一仙人あり、迦毘羅

(ラカビ)といふ、四子其の弟子となり、後迦毘羅の言により、城市を建て、居る。これ釋迦種迦毘羅城の起原なり。時に賢人指引、また別に一を城造る、これ釋迦種指城(拘利)の起原とす。迦毘羅城と指城との二國は、ロヒニ河を隔てて相隣りし、ロヒニの河水を引きて米穀を作り、専ら農業を以て其國を建つるの基とし、時に或は多少二國の間に紛争を生じたることなきにあらざりしも、概して能く親和し、累代姻戚の關係を維持し來りしが如し。釋尊の生母摩耶、並びに姨母波闍波提は即ち指城王善覺の女なりといへり。釋尊の系譜に就いては、諸書の説くところ一定せずと雖、今一説によりて、左の圖を示す、また以て指城と迦毘羅との關係を見るべし。(リス、デウ、ツの「佛教」による)

(指城)……………  
— 建遮那女(カヌチ)

波闍波提女  
— 摩耶女



『五分律』には、摩訶男と阿菴樓陀とを解飯の子とし、跋提と婆婆(跋提を二子とし、)を甘露飯の子とす、『大智度論』には跋提提沙(婆々)を白飯の子、提婆阿難を解飯の子、摩訶男、阿泥麻豆を甘露飯の子とし、『十二遊經』には、提婆阿難を甘露淨の子、釋摩納、阿那律

を殺淨の子、釋迦王、釋少王を設淨王の子とせり。此「十二遊經」の説は、他の諸説と異にして、淨飯王の諸弟は、甘露淨飯(甘露)、殺淨飯(殺淨)、設淨飯(設淨)の順序なり。なほ此の書に、釋迦王は蓋し跋提なるべく、釋少王とは婆婆のことなるか。又「衆許摩訶帝經」には、摩賀毘摩阿爾樓陀を斛飯の子となすこと、「五分律」に同じく、婆帝疎嚙(婆帝)と、婆捺哩賀を白飯の子となすこと、「大智度論」に同じく、阿難陀提婆達多を甘露飯の子となすこと、「十二遊經」に同じ、其の他「衆許摩訶帝經」は、淨飯以下兄弟四人に各一女あり、淨飯の女を蘇鉢羅白飯の女を鉢但囉摩黎斛飯の女を跋捺黎甘露飯の女を細躡羅と名つくといへり。異説紛々一定し難きこと、之を以て知るべし。

釋尊出世の當時にありては、迦毘羅、指城の二國は共に釋種に屬し、其の西に憍薩羅あり、舍衛城を首都とし、南に摩揭陀あり、王舍城を首都とし、東に吠舍離あり、吠舍離城を首都とし、共に勢力ある大國なりしが如し。釋種は此等の諸國に比すれば、土地狹隘の弱國なりしなるべきも、其の血統は尊貴なるものとして敬重せられたりし

ものに似たり。「佛本行集經」に、淨飯王の家系に六十種の功德あることを擧げたり、其の一二の例を數ふれば、血統の無雜純粹にして嫡々相承し、他の血統を雜えざること、其の家に生るゝもの、知慧聰明にして、婦女子は容貌秀麗なりしこと、其の家系に屬するものは、多く技工に達し、性溫順にして、しかも勇氣ありしこと等なり。且つ釋種が一般に武藝に精しく、就中射術に巧なりしことは古くより傳へられたるところにして、思ふに釋種は印度人中に於て、特に貴種として尊敬せられし種族なりしは疑なきが如し。佛陀は、即ち此の種族中に生を享け給ひしなり。

釋尊神を聖母摩耶(幻)の胎内に托し、四月八日を以て藍毗尼園に降生し給ふ時に、園中の阿輸迦樹花方さに開きて、芬芳茂盛す、聖母右手を擧げて、樹枝を折らんとす、太子乃ち聖母の右脇より生る、降生



以後七日にして聖母終に殂す、仙人阿私陀(無比)といふものあり、淨飯王のために太子を相して、成長の後出家して聖道を證し、衆生の苦を救ふべきことを言ふ、之より父王太子をして厭世の志を生ぜざらしめんと欲し、三時殿を建て、殿中多くの婦女を娶め、飲食衣服意欲するに任せ、以て他を思念するの間を得ざらしむ、三時殿とは冬殿、夏殿、及び春秋殿是なり、然れども太子人生の意義に疑を抱き、之を解かんと欲するの情轉だ切なり、時に太子妃あり、耶輸陀羅(持嬰)と稱し、愛子羅睺羅(障月)を得たり、然れども妻子の愛情尙ほ以て太子の意を止むること能はず、所謂四門出遊のことありしより、終に其の出家の志を決するの機に會したりといふ、所傳によれば、太子一日城外に出て、遊觀せんと欲し、迦毘羅の東門を出づ、忽ち一老人を見る、白髮皺面、偃僂低頭、杖に倚りて戰慄して行く、太子即ち馭者

阿諛多に問うて曰く、何者ぞ、阿諛多答へて曰く、これ年老衰弊の人なりと、由て人の終に此の老者羸瘦の境に至るを免るべからざることを説く、太子之を聞き愁然として城に還る、次いで太子また阿諛多を促し、城外に遊觀せんと欲し、城の南門を出て、途に一病者の氣息奄々として糞穢の中に臥すを見、再び世態の悲むべきを感じ、嘆息して城に還る、次ぎにまた西門を出て、死者の道傍に横はるを見、阿諛多の死者の説を聞き、三たび城中に還歸し、最後に北門を出て、沙門の赤衣を着け、剃髮剪鬚、鉢を持して徐歩するに遇ふ、阿諛多、太子のために出家沙門の何者なるかを説く、太子馭者をして沙門の所に至らしめ、車を下りて之を禮し、終に自ら沙門となり、道を求め、涅槃を證せんとを誓ふ、此に於て、一夜密に宮人媛女の熟睡するを窺ひ、獨り一奴闍鉢迦(チャンダカ、樂欲と譯す、車匿同人なり)をして馬を引き來ら

む馬其の名を乾陟(カントカ)といふ、太子即ち乾陟に乘じ、城門を出て、東方羅摩(ラマ、戯と譯す)に向ふ。羅摩を距る遠からざる樹林の中に、修行せる一婆羅門教の高僧あり、跋伽婆と名づく太子其の教を受けんと欲し、聞轍迦及び乾陟をして還りて情を父王に報せしめ、寶冠繡衣を脱して一沙門となる。跋伽婆は苦行仙にして、其の他羅摩林中、多くの行者あり、種々の苦行を修するを見たり。太子諸仙に問ふに苦行を修する所以を以てす、答ふる所、唯生天の果を求むといふに過ぎず、此に於て太子之を淺しとなし、阿羅邏仙の所に赴く。太子の迦毘羅を去るや、明朝父王等始めて之を知り、追ふて太子を求めしむ。時に太子既に羅摩林を去り、更に東吠舍離に向ひて進む。使者追躡、阿羅邏の居に到らんとし、遂にして太子に會し、備さに父王悲傷の狀を説き、切に其の迦毘羅に還らんことを勸む。太子之に

應ぜず、使者をして深く之を父王に謝せしめ、終に一人阿羅邏の住所に達して其の道を問ふ、使者相議して、阿若憍陳如等五人をして太子に隨從せしむ。阿羅邏は數論の大仙なり、阿羅邏太子に授くるに數論の義を以てす。太子以爲らくこれなほ未だ以て三界超脱の教となすこと能はずと、また轉じて南方摩揭陀に赴く。蓋し王舍城に近く、當時名聲高き大仙あり、優陀羅羅摩といふ、時に羅摩死して其の子其の衆を領して之を教ふ、太子即ち道を此の羅摩子に問はんとするなり。然るに羅摩子の説くところ、また太子の意を滿たすに足らず、太子更に羅摩子の下を辞して般荼婆山(パンダグッ、譯して黄赤色とす)の林中に去れり、獨り自ら斷惑證理の道を求めんとするなり。太子の般荼婆林にあるや、一日出て、食を王舍城市に乞ふ、時に摩揭陀の王、姓は施尼、名を頻婆婆羅(影勝)といふ、太子の來るを見、其の常人

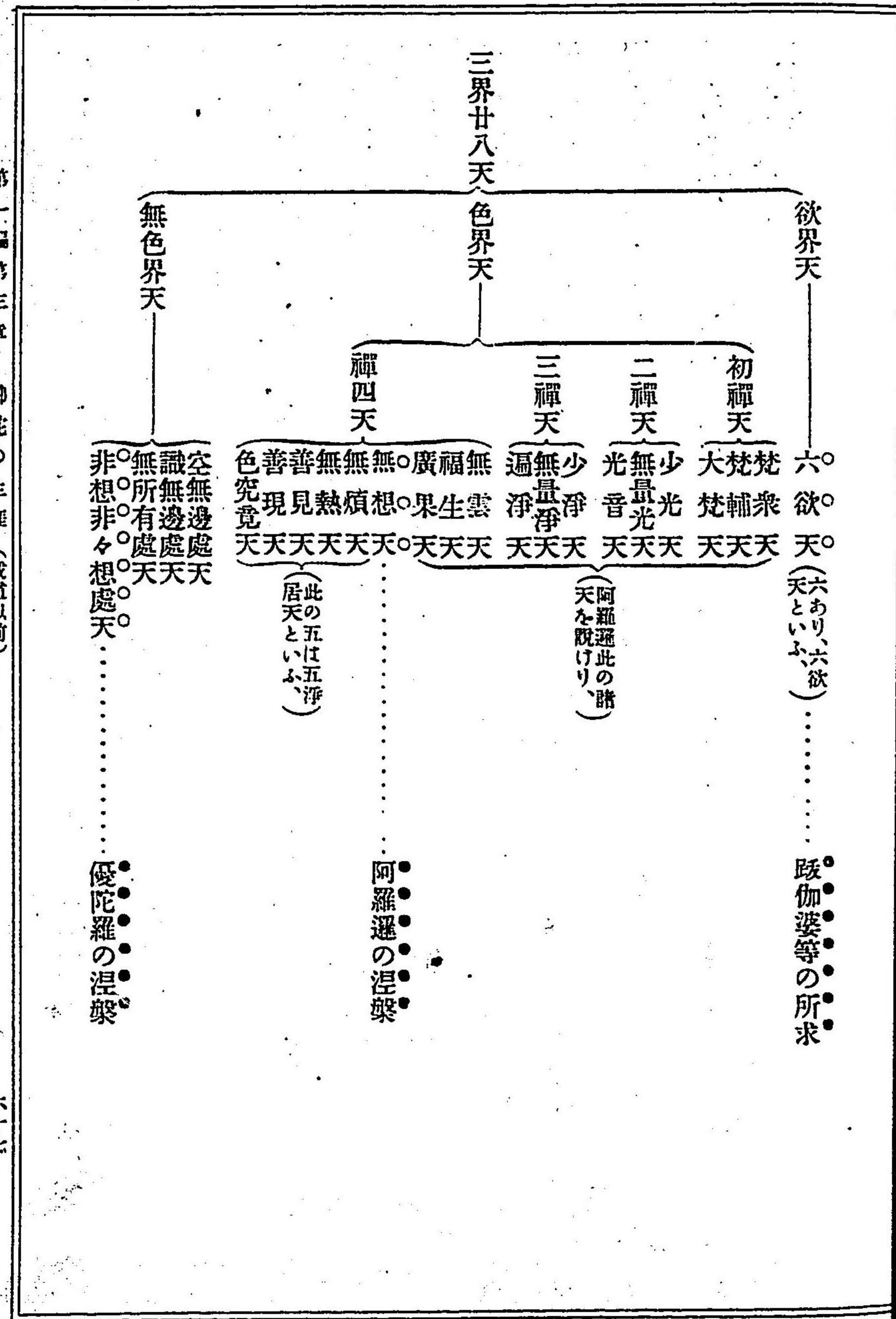
にあらざるを知り、自ら太子を般荼婆に訪ひ、其の教を受け、太子若し道を得ば必ず王舎城に來りて王の供養を受くべきとを約し、太子は般荼婆を出て、また伽耶尸梨沙山(ガヤシール山)に入る。(一説によれば、太子の出家の後直ちに摩揭陀に赴き、頻婆娑羅に會し、王舎城に近く鷲峯山に入りて苦行の諸仙に其の説を聞き之に満足すること能はずして優陀羅の下に至ると。)蓋し當時苦行の修道者、其の状、種々區々にして千態萬様なり。『佛本行集經』には、羅摩林中苦行者の状を聞き、或は菜食し、或は種々樹木の枝を食ひ、或は僅に水を飲みて生活し、其衣服の如きも、麻衣あり、獸皮衣あり、草衣あり、毛髮を以て作れるあり、死人の幡を以て作れるあり、或は糞掃衣を着くるあり、或は全く裸體にして棘刺の上に臥すあり、株上に臥すあり、蟻蛭に住するものあり、露地に坐するものあり、また水に入りて修行するものあり、火に事ふるものあり、太陽を睨んで、之と共に轉ずるものあり、兩手を舉げて立つものあり、頭



魔降陀佛畫壁窟一第クンヤシヤ

髪を抜くものあり、鬚髯を抜くものあり、斯くの如く種々の苦行者ありと雖、要は天上に生れんとするに外ならず。其の説に曰く、是の如く苦行を修する時は、自ら諸天の報を享くべし、故に樂を得んと欲する者は、唯苦行を修するにありと。太子素より三界の苦を脱せんと期す、生天の樂も亦終に苦界に沈淪するの時あるべし、苦樂に昇沈するは解脱にあらず、これ太子の之に満足すると能はざりし所以なり。阿羅邏の説くところは、初めに禪定を修して初禪を得、大梵宮に受生し、次に二禪を得て光音天に受生し、次に第三禪を得て遍淨天に受生し、次に第四禪を得て廣果天に受生し、以上の色界諸天を經、終りて一切萬法皆是れ無邊の虚空に等しと證す、之を名けて涅槃といふとなせり。太子は之に對して、阿羅邏所説の涅槃は、例へば種子の地中にあるも、水雨なければ芽を生ぜざるが如し、潤澤

調適し、諸縁具足すれば忽ち發芽すべし、阿羅邏所説の涅槃も唯著  
 我の妄念を捨て、諸業を離るゝが故に、無相の理を證したるに似た  
 るのみ、故に我已に我を捨つと思へり、我已に我を捨つといふも、眞  
 に我を捨てたるにあらず、因縁事情相會すれば、我は再び迷界に墮  
 すべし、故にこれ未だ眞處に至らずと評し給へり。優陀羅子の説は、  
 阿羅邏より更に一步を進めて、眞の涅槃は非想非々想處を證知す  
 る所にありといひ、太子の未だ之に満足すること能はず、非想非々  
 想處もなほ眞の無我にあらず、報盡くればまた生死に廻入すべし  
 と難じ給ふや、優陀羅子は、唯我が父斯くの如く説けりと反覆する  
 に止まれりといふ。今以上釋尊受教の諸師の説を見るに、大凡左の  
 如しといふべし。



伽耶尸梨沙山は佛陀苦行の地なり、佛の此の地に苦行を修するや、父王淨飯は釋種の國師、婆羅門の子優陀夷(ウダヤ)を遣はして其の状を見せしむ、『佛本行集經』には、當時の太子の狀態を説いて、菩薩臥於地上、從頭至足皆被塵土、無有威光、與地同色、身體瘦削、無復肌膚、唯有骨皮裹身而已、眼深却陷、如井底星、遍體屈折、節々離解、といへり、蓋し實狀之に近きものありしや疑なし。然れども太子は苦行を以て聖道を證することの難きを知り、終に軍將斯那耶那婆羅門の女難陀(ナン)、婆羅(ラバ)二人の供養を受け、身力を回復し、尼連禪河の邊菩提樹の下に坐し、十二月を以て成道し給ひたり。太子の苦行は、凡そ六年を經、其の成道の時、年正さに卅五歳なりしといへり。(苦行の歲月、成道の年齢、異説あり)

(二) 成道以後

佛入滅の年齢につきては、種々の異説あり、八十歳といふもの一般に行はるといへども、或は七十九歳ともいひ、或は八十二歳、また八十五歳ともいふ。而して若し成道を三十五歳(一説には三十)とすれば、説法度生四十五年にして八十歳、五十年にして八十五歳となるべき理なり。但し其の是非の如きは、今日容易に斷定を下すべきにあらず。

佛菩提樹下にて坐し、思惟し給ふこと一七日、成道の後七々日に至り、思へらく此の微妙の法門先づ誰に向つてか之を説かんと、時に其の受教の師優陀羅、阿羅邏の二人は既に死して在らず、佛、此に於て、隨從の五比丘今去りて婆羅捺斯の鹿野苑にあるものに説き、教

へて之を導かんと欲し、恒河を渡りて遙に歩を西に進む。時に五人の比丘、佛が其の苦行を捨てたるを以て、志既に屈し、道を求むるに堪へざるものとなし、心頗る之を輕賤す。是の故に今佛の來るを望見し、互に相誡めて曰く、彼の沙門瞿曇釋種はこれ懈怠の人なり、我等須らく彼を敬禮すべからずと。然るに佛の漸く相近くに及び、五人各自ら安ぜず、知らず識らず皆起ちて之を迎ふ。佛此に於て、五人のために四諦、十二因縁の理を説き、八正聖道を以て二邊を離れたる中路なりと説き給ひたり。蓋し苦行と受欲樂とは共に一邊に偏して、獨り八正聖道のみ甘露の正眞道たることをいふなり。此に於て、阿若憍陳如(火器)、摩訶那摩(大名)、阿奢踰時(調馬)、婆提唎迦(小賢)、婆沙波(起名)の五人皆共に初果を證す、之を佛の初轉法輪となす。

尊在世の際は、此の三ヶ月間僧衆相聚なり、一處に停住して外出せず、僧衆の非行を正し、或は懺悔せしめ、其の他種々の教誡戒法を説示せられたり、所謂安居と稱するものにして、佛敎以前の婆羅門敎にても一般に行ひたる所のものなり。蓋し安居は雨中外出に不便なると、一は植物の發芽し、小蟲の多く生ずる時なるが故、此等生物を踏殺するを避けんがために創せられしものなるべし。佛既に鹿野苑に於て初轉法輪を終り、第一の安居を此の婆羅捺斯に費したりしが、此の間佛敎に歸依したるもの少からず、特に城中の一大富豪善覺の子耶輸陀(大上傘)の出家して佛陀の下に歸するや、波羅捺斯の有力者、之を聞いてまた佛敎に入り、其の他富樓那彌多羅尼子(ブールナマイトラ)も其の所奉の波離婆闍迦(バリウラ)、(行と譯す、其の鬚髮を剃除し、唯頂に少髮を存す、蓋し大自在天の教徒なり、といへり)の法を捨て、婆羅捺斯に來る。富樓那彌多羅尼

子は釋尊の聖父淨飯王の師たりしものゝ子にして、此の時迦毘羅を去りて雪山にあり、苦行修道し居たりしものなりといふ、釋尊が許して以つて說法第一富樓那と呼びしものは是なり。南天竺阿槃提國の一巨富婆羅門大迦旃延(マハ、カ、チヤ、ヤ、ナ、大好肩と譯す)、其の名は那羅陀(ラ、ナ、ダ、ツ、タ)と稱するものも亦婆羅捺斯に來れり。婆羅捺斯の第一解夏の時に於て、凡そ九十一人の阿羅漢出てしといへり。

第一安居終りて、佛、摩揭陀王の約を果さんがために王舍城に赴く、途に、事火婆羅門三迦葉及び其の甥優波斯那(最上)を服す。三迦葉兄弟は、當時摩揭陀附近に於て、名聲極めて高かりしものにして、佛陀が迦葉を伴ひて王舍城に入るや、城中の人皆佛陀を以て迦葉の師と目するものなかりしといへり。然れども迦葉兄弟が、其の徒千人と共に佛に歸したることを知るや、佛陀の高徳益城中に喧傳せら

れ、頻婆娑羅王の優遇を受け、竹林精舎に於て、第二安居を送り、此の間に於て摩揭陀の地より出て、新に佛弟子となりしもの、其の最も著名なるものを擧ぐれば、大迦葉(迦葉、飲光或は龜と譯す)及び舍利弗(鶖鷲子)目犍連(探)の如き皆是なり。迦葉は王舍城附近摩訶娑陀羅(大澤田)聚落に於ける一富豪の子なり、父を尼拘盧陀羯波(樹用)といひ、其の富始んと國王を凌げり、迦葉は其の姓にして、其の子畢鉢羅耶那(ビツ、バラヤ)は後の大迦葉尊者なり、畢鉢羅耶那、少より世事を厭ひ、出家の志ありしも、父母之を許さず、強ひて妻を娶りて共棲せしむ、妻名を跋陀羅迦卑梨耶(バ、ド、ラ、カ、ビ)といひ、吠舍離國迦羅毗迦(赤黄)村の一巨富婆羅門の女なり、跋陀羅迦卑梨耶また早く修道の念あり、他に嫁すること欲せず、父母の命によりて、已むなく畢鉢羅耶那と婚するや、互に其の志を告げて相犯觸せず、畢鉢羅耶那の父母死し、其の後を嗣



ぐに及び、夫婦終に其の産を捨て、共に出家し、畢鉢羅耶那は王舍城に於て釋尊に邂逅し、其の弟子となり、跋陀羅迦卑梨耶は、其の夫に分れて良師を求めんとし、外道波離婆闍迦によりて其の教を學びしも、後、佛の姨母波闍波提比丘尼によりて受戒し、佛教に入れり。佛は大迦葉を呼びて頭陀第一といひ、跋陀羅迦卑梨耶比丘尼は之を識宿命第一といへり。舍利弗、目犍連の二人は、王舍城の外道波離闍婆刪闍耶(サンジャヤ等勝)の徒なり。舍利弗名を優婆低沙(ウパサ)といひ、目犍連其の名を拘離多(コタ)といふ、共に王舍城附近の長者婆羅門の子にして、二人少より相親み、共に強ひて父母に請ひ、出家して婆羅門教に入る。二人聰明多智、終に教授師となり、其の師に代りて五百の徒衆を領す。時に、佛陀竹林精舍にあり、長老優婆斯那(大衆部の説なり、一説には阿輸波羅祇多といふ、優婆斯那はウパセー)會ま晨朝鉢を持して食を城中に

乞ふ、其の威儀齊整、大に人を感じしむ。優波低沙、拘離多の二人を見て、優波斯那によりて佛に謁し、其の教を受け、終に外道を脱して佛教に入り、其の徒亦共に之に隨ふ。優波低沙の母名を舍利といふ、故に母の名によりて之を舍利子といひ、拘離多は其の姓によりて之を目犍連と呼ぶなり。

佛成道の後、其の降誕の地を訪ひ給ひし時に關しては種々の説あり。一説には佛の子羅睺羅十五歳(佛苦行六年にて成道し、成道七年に迦毘羅に還る、故に佛生國に還るの)の時といひ、或は佛成道十二年にして、迦毘羅に還るといひ、或は佛成道の年、迦毘羅に還るといふ。蓋し父王淨飯其の子に遇はんことを願ひ、優陀夷及び闍嶮迦をして之を婆羅捺斯に迎へたりといひ、或は王舍城に迎へたりともいふ。蓋し優陀夷等の婆羅捺斯に至るや、佛之をして出家せしめ、容易に迦毘羅に還

らず、轉じて摩揭陀に赴き、迦葉、舍利弗、目犍連以下の諸弟子を伴ひ、始めて父王を迦毘羅に省し給ひしものに似たり。父母佛の左右に侍する諸弟子等の、皆婆羅門種姓なるを見て、釋種の刹帝利をして之に奉侍せしめんと欲し、命じて多くの釋種をして出家せしむ。時に阿菟樓陀(隨順)其の兄摩訶那摩をして家事を理せしめ、自ら出家せんことを欲すれども、父母容易に之を許さず、唯言ふ釋王跋提唎迦若し出家せば、汝と共に之と出家することを許すべしと。跋提唎迦は佛の世を遜れし後、淨飯王の讓を承けて王位にありしもの、如し。阿菟樓陀素より跋提唎迦と交り深し、即ち跋提唎迦を勸めて王冠を捨てしめ、終に跋提婆(多眉と譯す、蓋し婆婆同人か)宮毘羅(ラクムビ)難提迦(デカン喜)阿難提婆達多(天熱)等と共に悉く剃髮して佛教に入る。時に鄒波離(近取)剃除髮師たり、諸釋の出家せんとするや、其の纓絡を脱して皆之

を鄒波離に與ふ、鄒波離之を見て以爲へらく、諸釋皆其の位高く、其の富大なり、今悉く捨て、出家す、我獨り其の所脱の纓絡を受くべけんやと、また佛所に至りて出家す、持律第一鄒波離尊者即ち是なり。其の他難陀及び羅睺羅も亦此の時に佛道に入る。佛の王舍城にあるや、舍衛の長者須達多(給孤獨)來りて王舍城の一長者の家に宿し、其の佛に供養せんがために、盛に飲食を調ふを見て、始めて佛の名を聞き、後佛に謁して其の本國舍衛に來り給はんことを請ふ。佛由て須達多をして、還りて舍衛に一精舍を建てしむ、目犍連先づ行いて其の工を監す、所謂祇洹精舍是なり。舍衛國の南方に拘藍尼國(カウツシヤンビ、憍賞彌に同じ)あり、其の國の長者瞿師羅(ゴラ)舍衛の須達多により、佛に謁して其の教を蒙り、佛を拘藍尼に請はんがために、其の別宅を以て精舍となす、所謂美音精舍是なり。拘藍尼の王を

優陀延(ウジャヤナ、鄒陀、衍那王と同じ)といふ、摩揭陀の頻婆娑羅、舍衛の波斯匿と共に佛法外護の王として最も著名なり。

今『佛般泥洹經』によりて見るに、佛は摩揭陀國にあり、王舍城より東巴隣(即ち波吒利弗多、城摩揭陀の新都)に赴き、漸次東行吠舍離城附近の竹芳聚(ツヅ)に至る。然るに當時此の附近の地飢饉のために穀價騰貴し、分衛するも食を得ること難し、此に於て佛諸弟子をして去りて五穀豐熟の羅祇(ツヅ)等の諸地方に赴かしめ、佛は唯阿難と共に竹芳聚(ツヅ)に(一説は衛沙聚といふ)に止まる、佛の病を得給ひしは實に此の地に於てせしなり。時に佛、通身皆病みて殆んど般泥洹せんと欲す、阿難哀痛の情に堪へず、衆僧の集會するを俟ち給はんことを乞ふ。佛、阿難に告げて曰く、我已に經戒を説く、今より後、汝等唯當さに經戒を案じて之を奉行すべし、若し説の如く行ふ時は、我また永く比丘僧の中に存

すといふべし」と。又曰く、我年八十、なほ故車の如し、身軀また堅強なし、我般泥洹の後、是の經戒を棄つることを得る勿れ」と。既にして佛吠舍離の大林重閣講堂に入り、衆僧を此處に會し、告ぐるに佛滅後の用意を以てし、重ねて「今より後三月にして、我般泥洹すべし、佛去らば亦當さに經戒を持すべし」と説けり。之より佛は吠舍離を出て、漸次北方に進み、波旬國に於て華氏の子淳陀の供養を受け、鳩尸那揭羅に向ふ。途、拘遺河(一に鳩對とす、又、迦屈婆河に作る)の邊に至り、頻りに渴を感じ、阿難をして水を汲み來らしむ、水濁りて飲むべからず、則ち面と足とを洗ふ、『大般涅槃經』には、佛こゝにて下血し給へりといへり。瀬連河(蓋し阿特多伐底、即ちアジタグテ、或は尸羅擊伐底、即ちヒラニヤグテ、一なり、照述は訛なりといへり、世に器して跋提河といふものは是なり)に至りて佛自ら衣を解き、澡浴し終りて、河側沙羅林の下に入り、告げて曰く、我今夜半般泥洹すべしと、乃ち北首面西右脇にして、雙樹の下

に臥し、最後の教誡をなし給ふ。鳩尸那の王、王子、人民皆來りて佛の疾を問ふ。佛、王の悲哀に沈めるを慰めて告げて曰く、「古より已來生きとし生けるもの、終に死滅に歸せざるはなし。泥洹は至樂なり、何ぞ悲しむに足らん。王唯常に善を念じ、往を改め、來を修め、政を以て國を治むるに卒暴を加ふる勿れ。厚く賢良を待ち、小過を赦宥し、務めて四恩を行ふべし」(四恩とは一、貧者を愍み、二、民を視ること子の如くし、三、民を化すに善を以てし、四、民と利を同うし其の樂しみを共にす)と、王謝して去る。最後に國の耆年、年一百廿歳の老婆羅門須跋陀羅を度し、重ねて「吾泥洹の後、佛去るを以ての故に、復怙む所なしと嘆すること勿れ、當さに唯經戒を怙むべし。吾泥洹の後、經戒を敬奉して、猶ほ親に孝事するが如くすべし。耆年の比丘、後嗣に教ふるも、吾が在時の如くなるべし」と宣ひ、且つ曰く、「吾正さに般泥洹すべし、汝等疑ふ所あらば、佛在時に於て宜しく疑ふ所を決すべし」

と、時に阿難佛後にあり、稽首して佛に白さく、「諸弟子佛の教を受け、てより今既に疑を存するところなし」(遺教經には阿難、佛に答ふとあり)と、こゝに於て佛弟子等に命じ、「夜已に半ばならんとす、復言ふこと勿れ」と宣ひ、人天の導師、我等の大聖釋迦牟尼如來は、こゝに其の最後の眠に落ち給ひぬ。弟子等涕泣、迦葉尊者の至るを俟ちて之を茶毘に附し、遺骨を八國の王に分ち、塔を建て、之を供養す。初め佛の入滅し給ふと聞き、佛の生地迦毘羅を初めとし、摩揭陀、吠舍離、等邊境の八國(鳩尸那、波多、遮博羅、阿摩羅、吠舍離、吠舍離、吠舍離、吠舍離)各鳩尸那に至りて佛舍利を得んとを求む。鳩尸那應ぜず、爭端將さに開かれんとす。鳩尸那城の一婆羅門、徒盧那なるもの、其の間に周旋し、舍利を八國に平分して事平ぐを得たりとす。

(一) 西洋の學者中には、佛陀を以て實存の人にあらずして、詩的架空的の人たるに過

ぎずとなすものあり、佛蘭西のセナールの説の如きは其の最も著名なるものなり、其の説によれば、釋尊一代の傳記は、太陽の東天に輝きてより、日没に至るまでの事實によりて構架せられたるものにして、佛陀は即ち太陽神話より出てたるものなりとなすなり、これ固より取るに足らざる説なりといへども、古來傳ふる所の佛陀の傳記に、太陽神話の混入せられたる點あるは疑ふべからざるが如し。

(二)佛陀に關する傳説は、早く西部亞細亞に傳はりて、終に之を基督教中の聖者として崇拜せられたることあり、これ紀元八世紀の頃、ダマスカスの聖ジーンと稱する人が「バルラム及びヨリアサーフ傳」と題する書を著はし、此の中に印度より傳はりたる聖者佛陀の説話を掲げたるに起因すといふ。ヨリアサーフは即ち佛陀にしてヨリアサーフの師バルラムが、ヨリアサーフに對し加へたる訓誡を述べたるもの、これ全く其の根源を佛陀の本生譚に發したるものなり、ジーンの此の著述ありしより以後、此の聖者を以て基督教中の聖者中に加へ、聖ヨサフハトの名を以て、古へより基督教徒のために拜せられ居たりしは奇なりといふべし。

#### 第四章 五百集法

佛在世の時にありては、多くの諸弟子中、舍利弗、目犍連、及び迦葉の三人、實に其の首位にあり、特に舍利弗と目犍連とは、其の最たるものなりしが如し、然るに佛の從弟提婆達多是、此等の諸高足を凌ぎて、自ら佛に代りて其の大衆を領せんとし、其の目的を達すると能はざるがため、終に其の意平なる能はず、佛陀の下を去りて、摩揭陀の太子によりて別に一派を成さんとし、大衆を誘導して其の和合を破壊す、所謂提婆の破僧と稱するもの是なり、律本に説くところによれば、提婆一日佛前に至り請うて曰く、世尊年已に老ひ、壽頗る高し、宜しく閑靜に居り自ら守るべし、願はくは僧を以て我に付囑せよ、我世尊に代り衆を護らんと、時に佛之に告げ給ひて曰く、我尙ほ僧を以て舍利弗、目犍連にすら付囑することなし、況んや汝痴人涕唾の身をやと、提婆之を聞いて大に怒り、之より摩揭陀の太子阿

闍世を勸めて其の父王頻婆娑羅を弑せしめ、心を一にして佛教を破滅することに力を盡すに至れりといふ、蓋し頻婆娑羅王は、當時佛教外護者として唯一の國君たりしなり。傳ふる所によれば、頻婆娑羅王初め子なし、相者をして其の宮中の夫人、子を産むべきものを相せしむ、相者多くの夫人を相し、一人を指して曰く、此の女蓋し子あらん、然れども其の子必ず王に怨みあるべしと。夫人子を産む、相者の言により、其の名を立て、阿闍世(未生)といふ、長じて後深く提婆に歸し、果して相者の言の如く、提婆の勸めにより、頻婆娑羅王を弑して自ら摩揭陀の王位に即くといふ。(提婆の死後、阿闍世終に深く佛教に歸するに至りたり)其の後提婆は僧衆の和合を破らんとし、其の弟子提婆の教を受くるものに三聞達多、鷲荼達婆、拘婆離、迦留羅提舍等と共に、特に異義を以て佛弟子を誘ひ、之を分離せしめて自ら之を領せんことを企

つ。一布薩會の時、提婆衆中に於て其の自己主張の異議を説き、若し此の五法(異議五條あり、故にいふ)に服するものは、此の箴を取るべしと。時に會中にあるもの、阿難及び他の一比丘の外、五百の大衆皆箴を取りて提婆の説に歸す。此に於て提婆此等の諸徳を隨へて、伽耶山中に退く。舍利弗、目犍連之を見て、陽に提婆に従ふものゝ如くし、五百の僧衆を説きて、終に再び佛所に還らしむ。提婆之を見て憤りに堪へず、此の時終に熱血鼻孔より出て、生身大地獄に墮せりと傳へらる。其の他提婆が、人をして佛を殺さしめんとして目的を達すること能はず、自ら佛の居所者闍崛山(鷲頭)に至り、大石を佛に擲ちしも、僅に佛の足指を傷けたるに過ぎざりしといふの傳説あり、五逆罪の一に佛身出血を數ふるは實にこゝに起因す。

佛の生前、提婆の企圖其の効を奏せず、而して佛は常に舍利弗、目犍

連を以て衆中の首として許し給ひしこと、以上の事實にて之を見ることを得べし。然るに此の二人は、不幸にして佛に先ちて入寂せり、其の事實は詳ならざれども、目犍連のみは全く當時佛教に反対なりし六師の婆羅門教徒のために殺されたりしものゝ如し。『根本有部毘奈耶雜事』に記する所下の如し。舍利弗、目犍連の二人、遂に執杖外道（波離婆闍迦の徒、常に三杖の杖を執りて行くことあり）に遭ふ、執杖、舍利弗に問うて曰く、正命衆中に沙門ありやと、正命とは彼の徒自ら稱する所なり。時に舍利弗能く彼等が其の答を要むる所以は、言質を得て危害を加へんとするものなることを知り、特に頌を以て正命衆中に沙門なく、沙門は唯釋迦衆中に存すと説く。然るに彼等頌義を解せず、却て自己の徳を嘆美せるものと誤解し、事なく通過し去らしむ。稍少時にして、目犍連後れ至る、露形の徒また同じく目犍連に問ふ、目犍連答へて

曰く、汝等の衆中何ぞ沙門なるものあらんや、沙門は我佛陀の説き給ふ所是のみ、若し獨り自ら沙門と稱するものあるも、これ但空名ありて其の實なきものなりと、且つ彼等の教祖哺刺拏（六師外道の一、葉に同じ、ブハラナ、カシヤ、ハラ）の生前邪法を説きて人を誑惑せることを述ぶ。彼の徒之を聞いて大に怒り、杖を擧げて之を乱打し、殆んと死に瀕せしむ。舍利弗顧みて目犍連の來らざるを怪しみ、還りて目犍連の地上に仆るゝを見、驚いて七條の衣を以て其の身を裹み、抱持して迦蘭陀の精舎に至る。蓋し目犍連は之がために遂に死に至りしなり。後舍利弗、また幾くもなくして病を以て死せりといふ。斯くの如く、此の二人は佛の入滅以前に寂したりといへども、其の教を受けたる弟子も少からず、随つて佛弟子中に於て、其の教系の後に傳はりしもの實に此の二人を以て主とすべきが如し。所謂『舍利弗阿毘曇』

の如き、或は『法蘊足論』(目連作)『集異門足論』(舍利弗作)の如き、後世舍利弗、目犍連を宗とするもの、多かりしは、全く此の消息を傳ふるものなること疑なければなり。

舍利弗、目犍連、佛に先ちて世を去りしかば、佛滅後にありては、大迦葉尊者最も大衆の推すところとなりしが如し。〔四分律〕には、陀羅尼迦葉第一上座、婆羅門第二上座、大迦葉第三上座、大周那第四上座たり、而して大迦葉僧事を知すとあり、〔五分律〕には、阿若憍陳如第一上座、富蘭那第二上座、曇彌第三上座、陀婆迦葉第四上座、跋陀迦葉第五上座、大迦葉第六上座、優婆離第七上座、阿那律第八上座とあり、〔十誦律〕には、阿若憍陳如第一上座、均陀第二上座、十力迦葉及ひ阿難第三上座、大迦葉第四上座、而して大迦葉多知廣識にして、四部の衆皆恭敬して其の語を信受すとあり、〔摩訶僧祇律〕には、大迦葉第一上座、那頭盧第二上座、優波那頭盧第三上座とあり、佛入滅、茶毘既に終りて、諸弟子皆吠舍離に向ふ。大迦葉乃ち衆に告げて曰く、前きに佛の入滅し給はんとするを、我途にして之を聽き、衆と共に皆慟哭して世の闇に明炬を失ふの感に堪へざりき、獨り跋難陀比丘あり、衆に告げて曰く、彼の長老世にあるに當りてや、此の事は

爲すべからず、此の事は爲すべしと、今彼れ既に世を去りぬ、各意の欲する所に任ずべしと、世尊入滅日を去る久しからずして此の言を聞く、願はくは跋難陀の徒をして、大法を滅せしむる勿れ、須らく速に佛の遺教を結集すべしと、大衆皆之を賛す。此に於て當時外護の大勢力たりし阿闍世王の王舍城を以て此の遺教結集の地と定め、其の衣食臥具等總べて阿闍世の供給を受けて此の事業を成就することゝなれり、これ即ち第一結集と稱するものなり。

第一結集の時、王舍城に集まりしもの總べて五百人〔大智度論〕に、故は千人とあり、故に之を五百集法といふ。諸律の傳ふるところによれば、五百人中、阿難一人、迦葉之を衆中に加ふることを欲せず、蓋し阿難は未だ諸結を斷ぜざりしによるといふ。一説に隨へば、阿難は佛の諸弟子中、佛の常に推して多聞第一となすところ、智慧餘りありて定力足ら



九十一  
ず、故に初め吠舍離にありて専ら衆のために説法す、吠舍離の人阿難を見ること佛在時の如し、一跋闍の比丘あり、告ぐるに阿難の徒らに多説を事とし、靜閑に退きて自ら修することを知らざるを見て、阿難のために之を諭し、大迦葉集法のこと、并びに阿難の此の衆中に加はらざることを以てす、阿難こゝに於て始めて自ら顧みるどころあり、經行思惟して専ら解脱を求む、後夜將さに過ぎんとし、身體疲極、少しく偃臥せんと欲し、頭、枕に觸れざるに豁然として諸漏盡く、阿難之によりて始めて始めて集法に加はるを得、集法の比丘五百に滿つるを得たりといふ。

また諸律の傳ふるところによるに、阿難の衆中に入るや、大迦葉其の六罪を數へて之を責む、其の六罪なるものも律本によりて多少の異同ありと雖、今しはらく『五分律』によりて之を示さんに、阿難迦葉に告げて曰く、我親しく佛の言を聞くに佛入滅の後は、小小戒は之を除くことを許し給ふと。迦葉乃ち阿難に問うて曰く、小小戒とは如何なる戒ぞ、阿難答へて曰く、佛を惱亂せんことを恐れて問ひ奉らざりきと、迦葉由て、定めて之を第一罪とす。阿難また嘗て佛の僧伽梨を縫はんとする時、脚指を以て之を押へたり、これ二なり。次に阿難嘗て佛に請ひ、佛の姨母摩訶波闍提をして出家せしめたり、是れ佛教に女人得度あるの初めにて、法を汚すといふべし三なり。佛入涅槃の際に當り、佛、阿難に告げ宣はく、四神足を得たるものは壽命を留むること一年以上に達することを得べしと、然るに阿難敢て佛の此の世に留住し給ふことを請はざりき、是れ四。また佛の入涅槃の際、漸次吠舍離より鳩尸那に向ひ給ふや、途、鳩夷河の邊に於て、佛こゝに横臥して休息し、阿難をして飲水を取り來らし

む阿難去て河水を汲まんとするに、水濁りて飲むに堪へずと稱し、其の濁水を取り來る、佛に對して情なしといふべし、是れ五。佛入滅茶毘の後、阿難先づ女人をして其の舍利を禮せしむ、是れ第六罪なり。迦葉此の六罪を數へて之を突吉罪と決し、大衆の前に於て、懺悔せしめたり。(一説には、結集以前に六罪を責めて、僧中より阿難を排斥すと、いひ、一説には、結集以後六罪を數へて懺悔せしむともいふ、)

第一結集に於ては、未だ文字によりて書冊に記されたるものにあらず、唯暗誦相傳なりしが故、其の言また簡約を旨としたること疑を容れず、此の時結集したるもの、其の類三分あり、所謂經律論の三藏是なり。(近時の學者、多く論藏を以て後代のものとし、第一結集には唯經律の二藏ありしのみなりといふ、今しばらく從來の傳説による、)經は阿難之を誦出し、律は鄒波離之を誦出し、論の誦出者は所傳一準ならず、(或は阿難といひ、或は迦葉といひ、或は迦旃延ともいふ、)律は四波羅夷罪より、漸次輕罪に及び、其の制戒の因縁事情を明にし、比丘戒、比丘尼戒并びに受戒躡度、布薩

躡度以下の諸躡度を總べて、集めて之を律藏となす。經は帶數的にして一より二三乃至十一等次第に増上するを『增一阿含』といひ、其の言の不長不短なるを『中阿含』といひ、長きを『長阿含』といひ、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、諸天梵王等のために雜說するものを集めて之を『雜阿含』といひ、外に必ずしも佛說にあらず、弟子の所說、諸天の讚誦、若しくは法句、說義の雜說は別の一部となして之を雜藏といふ。一説によれば、阿難既に結集終りて後、誦習記憶に使せんがため、十經毎に録して一偈となせりといふも、其の眞僞は知るべからず。

結集の事跡は、所傳區々にして之を判明すること極めて難しといへども、要するに佛滅後其の異說の紛出を防ぎ、信仰箇條を確定したる最初の事業にして、恰も基督教のニケーアの會議に比較すべき

ものといふべし。  
 蓋し三藏の名稱は、原始の時代より存したりしや否やは明ならずといへども、佛教の要旨は戒定慧の三學を出でざるものにして、三藏の分類は實に能く之に應ずるものといふべし。而して小乗教にありては、此の三藏の區別現に部帙の上に存すと雖、大乘教に至りては、此の區別を部帙の上に見ること能はず。然るに此の三種の分類法の外、早くよりまた別に十二部教の名稱の存するあり、思ふに十二部經は、主として説法叙述の形式に關する分類にして、三藏の區別は専ら叙述せられたる内容性質によれるものと言はざるべからず。其の所謂十二部經の名稱を擧ぐれば左の如し。

- 一、契經(長行)
- 二、應頌(重頌)

- 三、記別(授別)
- 四、諷頌(弧起) (一説によれば、十二部經中、記別と自説と方廣との三は、獨り大乘教にのみ存して小乗教に存せず、故に大乘にては十二部經といひ小乘にては九部經といふと、然れども小乘經律中、十二部經の名の既に存するを以て見るに、此の説必ずしも隨ふべからず)
- 五、自説
- 六、緣起(因緣)
- 七、譬喻
- 八、本事
- 九、本生
- 十、方廣
- 十一、希法(未曾有)
- 十二、論議

釋尊の王位を棄て、出家し給ひし後、迦毘羅の變遷の如何なる狀況なりしかに就きては、大要下の如き所傳あり。釋尊の父淨飯王は、年九十七歳にして歿す。佛時に迦毘羅に還り、其の遺骸を葬る。「淨飯王般涅槃經」は、之に關する所傳を録せり。諸律の説くところによれば、佛の從弟跋提唎迦は、早く一たび摩揭陀の王位に登りしが如しと雖、阿菟樓陀の勸めにより、終に出家して佛弟子となりしこと前に述べしが如

し其の後摩揭陀王の位に即きしは、阿菟樓陀の兄摩訶那摩なりといふ。然れども佛在世の時に於て、迦毘羅の釋種は、全く憍薩羅の琉璃王(ウール、ガカ即ち毘羅)のため滅亡せられたり。蓋し此の兩國争端を開きし原因につきては、種々の説あるが如し。と雖、今一説によりて其の要を示さん。憍薩羅は佛敎の保護者として、頻婆娑羅王と並稱せらるゝ。波斯匿王(勝光王)の領土なり。王の第一の夫人を勝鬘(即ち摩利室羅、未利といひ、勝鬘は其の女なりと)といふ。もと迦毘羅の一長者の婢なり。王遊獵の際、誤て長者所有の一園に至る。時に勝鬘主命によりて園を守る。王勝鬘の舉作容姿を見て、終に誘ひて還り、立てゝ夫人となす。琉璃王は其の産む所とす。こゝを以て迦毘羅の人、常に琉璃王を見て、婢子として之を輕賤す。王太子たりし時より深く之を憤る。會々父王波斯匿の城を出て、佛を省するや、太子終に群臣と謀り、自ら王位に即きて父王を逐ふ。波斯匿去りて、摩揭陀に赴き、阿闍世王の助けを藉らんと欲し、途に急病によりて歿す。琉璃王既に憍薩羅の王位を奪ひ、昔日の怨恨を報ぜんを欲し、兵を率ひて迦毘羅に至り、悉く釋種を屠り、大虐殺を行ふ。釋種の殘存するもの皆四方に分散し、迦毘羅城終に廢滅に歸すといふ。これ佛在世間の事に屬す。

### 第五章 五百集法以後四百年間の變遷

佛滅後凡そ四百年間、即ち西曆紀元一世紀に至るまでの間の變遷の事實は、之を明確に知り得べき材料極めて乏しきを免れず。雖、中に於て特に重要なるは阿輸迦王の事實なり。然るに此の阿輸迦王の出世年代に就きて、北方所傳と南方所傳と全く其の説を異にするは甚だ遺憾なりといふべし。支那に傳へられたる諸經論によれば、阿輸迦王の出世を以て皆佛滅後一百年といふに於て一致せり。然るに南方所傳に隨へば、王の出世は佛滅後二百餘年なりと言へり。但し南傳に隨へば、阿輸迦と稱する王二人あり。佛滅後一百年出世の阿輸迦は之を迦羅阿輸迦といひ、二百年出世の阿輸迦は之を達磨阿輸迦といひ、全く別人として傳へたれば、北方所傳は此の

二者を混雜したる者なるべしといふものあり、又印度に二人の阿  
輸迦王ありしといふこと、容易に信ずべからずといふものありて、  
此の南北の兩傳は殆んど調和すべからざるものに似たりと雖、達  
磨阿輸迦王出世の年代が、凡そ紀元前三百年代にあることは殆ん  
と疑ふべからざることにして、王が自ら命じて刻せしめ、現今に存  
する所謂阿輸迦王の碑文中には、西洋の歴史に見ゆるアンチオ  
カス(シリ)、プトレミー(埃及)、アンチゴヌス(マケド)、マガス(キレ)、アレキ  
サンドル(エビ)等の名の存するによりて之を推定することを得  
べし、此等の人々の世に出でたるは、皆紀元前二百五十年前後のこ  
となりとす。

(一) 五師傳持

五百集法以後、阿輸迦王に至るまでの間を五師傳持の世とす、五師  
とは大迦葉は之を阿難に傳へ、阿難は之を商那和修(シヤハナ)、摩田  
地(マヂヤ)に傳へ、商那和修は之を優婆鞠多(ウツバク)に傳ふ、優婆鞠  
多は即ち阿輸迦王時代の人とす、但しこれ所謂北傳にして、北傳は  
經の誦出者阿難の系統に屬するが故、北方佛教は自ら經に重きを  
置きて、律を次位にするの傾きあり、然るに南方所傳に従へば、律の  
誦出者鄒波離を第一とし、鄒波離は之を駄寫迦(ダカシ)に傳へ、駄寫  
迦は之を須那拘(ソナ)に傳へ、須那拘は之を悉迦婆(シツバ)に傳へ、悉迦  
婆は之を帝須(テツ)に傳ふといふ、帝須は即ち阿輸迦王時代の人と  
す、此の系統を主とする南方佛教は、重きを律に置きて、經を次位に  
するの傾きあり、以て南北佛教の差異を見るべし、而して南傳にて  
は鄒波離より帝須に至るまで二百餘年(鄒波離持法三十年、駄寫迦五十年、須  
那拘四十四年、悉迦婆五十五年、帝須

六十年)とし、北方所傳にて、五師持法の年代明ならずと雖、其の間凡百年なりといへり。但し北方所傳の中に於ても、上座大衆二部の中、大衆部の一所傳には、『摩訶僧祇律』に、優婆離(離波)、陀沙婆羅(バラシヤ)、樹提陀婆(ツトボ)以下次第傳承したることを載せたり。初め第一回の集法終るや、幾もなくして大迦葉、摩揭陀の鷄足山に入滅し、阿難代りて教團を指導し、深く阿闍世王の歸向を受けたり。傳ふる所によれば、當時阿闍世王、吠舍離の人と相善からず、しかも吠舍離亦佛教を崇奉し、阿難を尊ぶ、此に於て阿難は自ら滅後の争を防止せんがため、兩國の境界をなせる恒河の中流に於て、船中に滅を取れり、是の故に、阿難の舍利は兩國之を分ちて、塔を兩處に建てたりといふ。

阿難の弟子多しと雖、其の法を嗣げるもの二人あり、一を商那和修(紇)といひ、二を摩田地(有部毘奈耶雜事に末田鐸迦、末田は是れ中鐸迦は水故に水中と譯すとあり)といふ。商那は麻の如きものにして、其の樹皮を取りて布を織る、商那和修生れながらにして商那の衣を着くるが故に、商那和修と名くと傳へたり。商那和修はもと摩偷羅國(マトラー、今)の一商人なり、阿難之をして出家せしめ、終に付するに法を以てす。摩田地は阿難入滅の際、其の徒と共に來りて教を受けたり、故に佛最後の弟子須跋陀羅に比せらる。摩田地の名は、所謂恒河の中流に於て、入滅せんとするに當り、來歸せしより得たるところなりとも傳へたり。斯くて商那和修は摩偷羅にありて、其の教を弘め、摩田地は北方罽賓(キビン、今)に其の法を布けり、これ罽賓佛教の起原なるべし。(五師傳持といふも、商那和修關係あるにあらず、一説に摩田地法を商那和修に付すといふも、摩田地は阿難最後の弟子なりとの説あるより考ふれば信じ難きが如し)優婆鞠多も亦摩偷羅の人にして、賣香商主鞠多の子なり。(鞠多三子あり、長を阿波

百二  
麴多不正護といひ、次を阿那麴多（寶護といへり）法を商那和修に嗣ぎ、摩偷羅優流  
ふ、優婆麴多（大護は其の末子なりといへり）漫陀山（大醜）の那哆婆哆寺（無罪）にあり、蓋し那哆婆哆寺は商那和修の  
建つるところにして、歸佛の長者那哆婆哆兄弟の力によりて成る  
が故に此の名を得たり。時に摩偷羅の國王を眞多柯といひ、佛教を  
喜ばずして往々之に迫害を加へたり。優婆麴多乃ち之を阿輸迦王  
に訴へ、王の力によりて、眞多柯をして佛教を保護せしめたり。優婆  
麴多の化導の盛なりしことは、其の弟子得道のものあれば、四寸の  
簪を取りて之を一石室に投ぜしめ、終に石室を満たすに至れりと  
の傳説あるを以て想像するを得べし。優婆麴多の法を繼承した  
るものは即ち提多迦なり。（フリタカ、有姉と譯す）阿育王經（には）古來優婆  
麴多の下に於て、諸部分裂せりとの傳ある所以のものは、全く其の  
傳法の徒の多かりしといふに基くものならん。

南傳の五師は其の傳詳ならず、最後の帝須は目犍連婆羅門の家に  
生れ、年十六にして大德和伽婆之を度して沙彌となし、後梅陀跋闍  
によりて深く佛教を學び、終に第五の律の法燈を繼ぎ、大に阿輸迦  
王の尊信を受け、法を弟子摩晒陀に付して入滅すといふ、摩晒陀は  
阿輸迦王の子なり。

### (二) 七百集法

佛滅後一百歳の時、第二結集、即ち七百集法と稱すること起れり、こ  
れ南北兩傳の一致する所なり。其の起原は、全く吠舍離跋闍（跋闍、著）  
の比丘、佛の遺教に違ひ、非法を行ひてなほ非法にあらずと主張し  
たるによれり。  
吠舍離の住民は、之を離車子族といふ、『善見律』に吠舍離の起原を

百四  
説いて下の如く言へり。昔時波羅捺斯國王の夫人、懷妊して一段肉を産す、王之を惡み、器中に藏して之を河水に放流す。一道士あり、河邊に住して牧牛者の供養を受く、會ま此の器を拾得し、家に藏す、段肉化して一童一女となる、これ吠舍離の祖先にして、離車(リツチャツ皮は同)の名の由來する所とす。後二子漸く長じ、他の牧牛者の兒子と相遊戯し、他子を苦しめて涕泣せしむ、父母却て彼等に告げて曰く、汝等各自ら避け去るべしと、故に其の遊戯の處を名けて跋闍(ワツジ、避)といふ。

吠舍離の佛徒の非法を見て、之を糾正せんことを企てたるものは耶舍尊者なり。此の時耶舍の請に應じ、吠舍離に聚まり來りしもの七百、就中上座の諸比丘は、多くは阿難若くは阿菟樓陀の弟子なりしといひ、『僧祇律』には陀沙婆羅尊者、衆のために推されて其の上首となれりといふ。陀沙婆羅は鄒波離の弟子なり、之を以て見るに、此の第二結集は、佛滅を去ること遠からず、之を一百年といふも唯大數を擧げたるものにして、蓋し百年以内なりしならん。七百集法の結果は、終に能く吠舍離跋闍子比丘の非法を制し、以て一時佛敎内部に起りし紛争を解くことを得たり。此の紛争は若し北傳によれば、佛滅後百年にして、商那和修、或は優婆鞠多の時に當り、南傳によれば、第三祖須那拘の頃に當らざるべからず、然れども此の兩統の諸師は、共に此の七百集法に關係ありしといふの傳説なきが如し。但し南傳にては、此の結集を以て迦羅阿輸迦王の力によりて成れるものとなせり。

### (三) 阿輸迦王

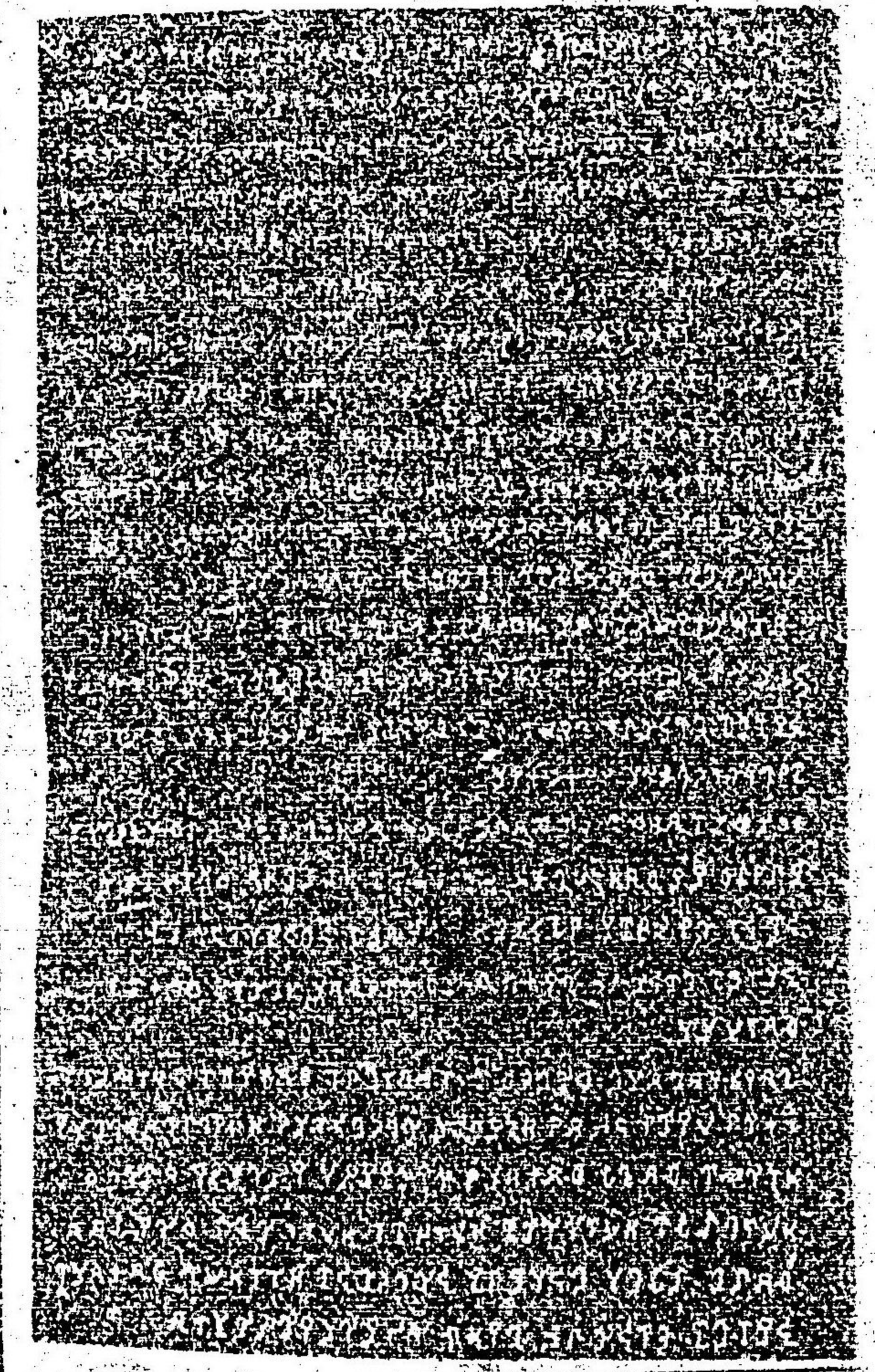


阿輸迦(愛無)は前既に述べたりしが如く、摩揭陀國の王にして、頻頭婆羅王(實適)の子戰荼羅笈多王の孫なり。阿輸迦王の事跡につきては、南傳北傳全く其の言ふ所を異にし、是非を判定すること容易ならず。南傳によれば、頻頭沙羅王、兒一百人あり、阿輸迦、父王殂後四年の間に、弟帝須一人を除きて餘は悉く之を殺し、自ら王位に即き、帝須を以て太子とせり。然るに兄修摩那(善結スリマナ)の遺子泥瞿陀(ダニグロ)の行爲に感ずる所あり、終に深く佛教に歸し、太子帝須も亦王の感化を受けて出家せしかば、王子僧伽蜜多(ミンガ)の婿、阿嗜(グアツ)亦之を慕うて共に出家す。時に目犍連子帝須(モツガツツ)特に佛教衆僧中の首なり、阿輸迦王頗る之を崇信す、終に其の勸めによりて王子摩晒陀(マヒンダ)、則ち帝須和尚となり、摩訶提婆(モツガツツ)及び王女僧伽密多(アムバ)、阿(アムバ)、波羅和尙(アムバ)、二人をして出家せしむ、こゝに於て王族盛に僧となり、益佛教の興隆を致せり。

阿輸迦王の佛教を保護すること斯くの如くなりしかば、婆羅門教の徒は漸く衰歿、供養の利を失ひ、已むなく、外、佛僧の態を裝ひ、しかも内、本法を執りて衆を化導せしにより、布薩其の他の法事に於て和合すること能はず、説戒をなさざること七年の久しきに及べり。王則ち其の一臣を阿輸迦王寺に遣はして其の争を止め、和合説戒せしむ。衆僧答へず、使者怒て王命に隨はざるものとなし、悉く之を殺さんとす。王弟帝須比丘以て王命にあらずとなし之を遮る、使者還りて王に告ぐ。王始めて使者の衆僧を殺せることを知り、深く悔えて懊惱の情に堪へず。時に目犍連子帝須、諍法の盛ならんとするを察し、避けて阿然河山(アランカ)中に隠る、王使者を阿然河山に遣はして之を波吒利弗多に迎へ、之をして諍法を斷じ、佛法を豎立せしめん

とす此に於て帝須上首となり、一千の比丘を聚めて三藏を結集す、之を第三集法となすなり。王また目犍連子帝須の勸めによりて、佛教を邊地に弘布せしめんがために傳道師を派遣す、今其の派遣の土地と傳道師とを擧ぐれば左の如し。

- 罽賓(カシニ) 健陀羅國(カンダ)…………… 末闍提(マツチカ)
- 摩醯娑末陀羅國(マヒサマタラ)即ちゴダワリ河、南、ニグー…………… 摩訶提婆(マハ)
- 婆那婆私國(バナバシ)即ちシ、これ荒蕪地の(蓋)…………… 勒棄多(ラツ)
- 阿波蘭多迦(アバランタカ)以四の地、(蓋)…………… 曇無德(トモトク)大史にはタリ
- 摩訶勒訶國(マハラクハ)此れホムベ…………… 摩訶曇無德(マハトモトク)
- 史那世界國(シナセカイ)即ち大夏、ヨナは耶槃那…………… 摩訶勒棄多(マハラクハ)
- 雪山邊國(セツサンベ)即ち中部…………… 末示摩(シマ)
- 金地國(キツノ)即ち東の海岸地を指す(蓋)…………… 須那迦(ソナ) 爵多羅(タラ)



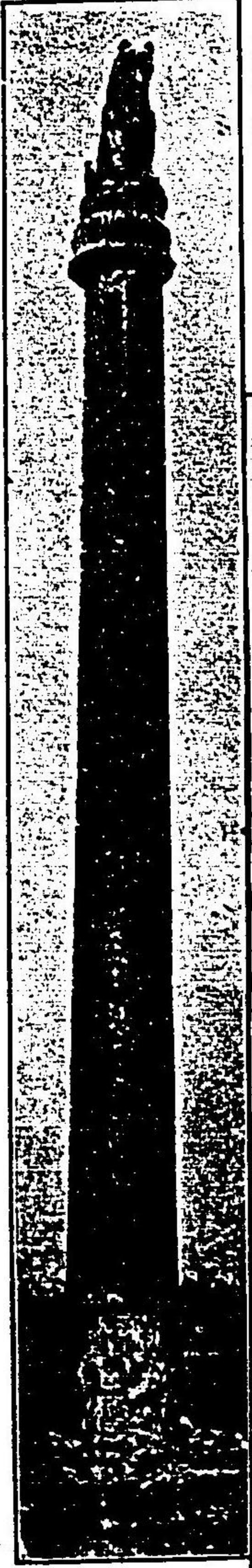
阿輸迦王の柱



(字文地檢阿)文 剌 の 柱

とす此に於て帝須土首となり、千の比丘を聚めて三藏を講釋す  
 之を第三集法となすなり。  
 王また目犍連子帝須の勸めによりて、佛敎を邊地に弘布せしめん  
 がために、傳道師を派遣す、今其の派遣の土地と傳道師とを擧ぐれ  
 其左の如し。

- |                                      |                 |
|--------------------------------------|-----------------|
| 摩訶多末陀羅國 (今之チベット地方、即チチベット國南境に在り)…………… | 木剛果 (木)……………    |
| 婆那婆羅國 (今之チベット地方、即チチベット國南境に在り)……………   | 摩訶提婆 (摩訶)……………  |
| 阿波諸多國 (今之チベット地方、即チチベット國南境に在り)……………   | 勸婆多 (摩訶)……………   |
| 摩訶勒訶國 (今之チベット地方、即チチベット國南境に在り)……………   | 無德 (無德)……………    |
| 摩訶勒訶國 (今之チベット地方、即チチベット國南境に在り)……………   | 摩訶無德 (摩訶)……………  |
| 摩訶勒訶國 (今之チベット地方、即チチベット國南境に在り)……………   | 摩訶勒婆多 (摩訶)…………… |
| 摩訶勒訶國 (今之チベット地方、即チチベット國南境に在り)……………   | 未示摩 (摩訶)……………   |



阿輸迦王之柱

(Transcription of the inscriptions on the pillar, including the names of countries and monks mentioned in the adjacent text.)

(字文迦輸阿) 文刻の柱

師子國(ラシカ)……

摩晒陀(モサタ)……

爵地(クシ)……

跋陀多(バツダ)……

摩晒陀等の師子國布教は、實に錫崙佛教の端緒なりと説かれたり。阿輸迦王は廣く佛教の眞理を崇奉せしめんがため、其の勅令を石柱若しくは石壁等に刻して之を天下に示したり、其の勅令は一々等しからざるが如しと雖、今其の主要の點を擧ぐれば、

- 一、宗教の目的は虚儀形式にあらずして、道義の實踐にありとし、之を策勵したること。
- 二、道義の根底は慈悲にありとし、特に殺生を禁じ、生物を憐み、慈善の行爲を勸奨したること。
- 三、一切の宗教は皆作善誠惡を目的とするものなるが故、相排擠

することなく、互に寛容すべきを示したること。

四、此等の目的を達せんがため、政府は特に吏員(ダルトマ、ラヌ)を設けて之を都督し、人民を訓戒せしめ、地方には五年功德大會(阿輸迦王碑文)

にはアヌサムヤナと、ふ蓋し般遮于悉と同じ、を開くことゝなせしこと。

等なり、此の阿輸迦王の碑文は今現に印度に存するものあり。

以上阿輸迦王の事跡は皆南傳によりしものとす。南傳にては、全く北傳の優婆耨多のことを言はず、北傳にては、また言、一も目犍子帝須の事跡、第三集法、傳道師派遣、摩晒陀、僧伽密多等のことに及ばざるなり。

北傳にては、阿輸迦王の太子となりし一弟は名を毘多阿輸迦(ピタカ)といひ(一説には宿大侈といふ)去て邊地にあり、時に外道尼犍子の徒、佛徒に濫して其の道を弘む、阿輸迦怒りて外道を殺戮し、賞を以て尼犍子の

頭を募る、毘多阿輸迦終に其の徒と誤認せられて人のために殺さる、王大に悲しみ、令して尼犍を殺すことを止めしむ。其の他北傳にては、太子鳩那羅(クラ)に關する悲惨の説話を語れども、南傳にては多く、鳩那羅のことを言はず、阿輸迦王が盛に佛の聖跡、迦葉、目連、阿難の塔婆を供養し、また八萬四千の舍利塔を建設したりといふが如きは、皆優婆耨多の勧めによりしものとして、獨り北傳に存する所の説なり。

#### (四) 諸部の分裂

諸部分裂に關しても、南北兩傳各其の諸説を異にせり。蓋し北方所傳によれば、此の分裂は佛滅後百餘年の後、即ち阿輸迦王の時代に起りしものにして、其の原因は大天と(摩訶提婆)稱するものあり、學徳一

世に卓越し、素と婆羅門教の徒なりしも轉じて佛教に入り、深く阿輸迦王の歸依を受け、終に從來の上座所傳の說に反對して、五種の異義を立てたるもの、これ即ち爭論の發端となりしものにして、大天の說に與みするものを大衆部といひ、之に反して從來の傳説を固守するものを上座部、若しくは上座弟子部といへり。上座部は佛滅後、教團の上座嫡々相傳の教義を守るところの法統に屬するの意にして、大衆部は大天の說に隨ふも、僧衆の上座部に比して多かりしにより出でたる稱呼なるに似たり。

上座大衆二部分裂してより以後、漸く議論の風盛にして、大衆部十餘派となり、上座部また十餘派となる、其の名稱の如きは、諸書多少の異同あるが如し。蓋し此等の諸部の分裂は、阿輸迦王の時より佛滅後四百年の頃にわたり、前後二百年間の事實となす。而して此等

諸部の中に於て、特に著しきもの五部を擧げ、此の五部皆律を主とするによりて五大律と名づく。諸律の傳ふるところによれば、唯此の五大部のみ其の長ずる所に基きて、服色の區別を立つ、大衆部は理論を主とするの風を表して、黃衣を着け、其の他は、法藏部は赤纒（舍利弗問經と大比丘三千威儀とは法藏と有部）、迦葉維（舍利弗問經）は皂衣（舍利弗問經と大比丘三千威儀とは法藏と有部）、迦葉維部は木蘭衣、彌沙塞部は青衣なりといへり。また諸律に佛在世の時、比丘の衣服純直にして、弊衣及び死人の衣を用ひ、素より斯くの如き色衣を許さず、唯故ありて、羅旬踰比丘の五色の法衣を交々着すること（舍利弗問經）を許し給へるもの、これ此の諸部服色の起原をなせりと説けり。蓋し後代其の據を佛在世に求めんとしたる附會の談ならん。また北傳にては、前に述べたる大天の外に、佛滅後二百年の時にも更に大天なるものありて、初め外道に出家し、後佛教に轉じて異説

を唱へ、大衆部の中に於て、制多山、西山住、北山住の三部分裂の端を開けりとなせり。思ふに此の二人の大天は、悉くは一人の大天に關する傳説の誤られたるものなるべし。南方所傳にては、阿輪迦王の時摩訶提婆ありて王の派遣傳道師中にも其の名を列ねたれども、終に提婆の異義者たることを説くものあることなし。

南方所傳にても、分裂諸部の名稱は區々一にあらざるものゝ如く、其の分裂の年代の如きも、明かならざるもの多し。但し『錫崙嶋史』(デーンサバ)等には、其の分裂の端緒を佛滅後一百年頃とすること大凡北傳に等し。唯南北二傳阿輪迦王の年代に就いて、各其の説を異にするが故、南傳は之を以て迦羅阿輪迦の時代のことゝし、而して其の分裂の原因を以て、前に述べたる吠舍離跋耆の十非事にあるものとせり。所謂七百集法會議の衆僧は、之によりて其の異端を防遏することを得たるも、此の時上座のために斥けられて結集に加ふることを得ざりし徒一萬人は、別に相會して邪法を結集したり、これ所謂大衆なりといふ。然れども此の南方所傳は甚だ疑はしきものにして、容易に信じ難きものあるが如し。

#### (五) 迦濕彌羅集法

前に述べたりしが如く、印度の歴史に於て、常に中心となるべき勢力ありしものは、實に摩揭陀王國なり。摩揭陀王國は大古より種々の變遷を経たりと雖、南方デカンより興りて、終に中天摩揭陀を併呑したる案達羅王朝の建立は、印度史中の一大變化と言はざるべからず。斯くの如く中央地方に一大變化を來したりし時に當り、西北印度の地方は、絶えず中央亞細亞の方面より、印度の國境を越え

て印度河の附近に入りしもの甚だ多し、此等印度侵入の外敵中、最も有力にして且つ最も著名なるものは、即ち迦濕羅王朝の旃檀迦賦色迦王(チンダガナ)なりとす。

迦賦色迦は月氏の王なり、月氏はもと支那本部の西北、甘肅の西隅、所謂河西の地に據有せし一種族なりしも、北匈奴と衝突して、之がために其の地を奪はれ、漸次西して伊犁地方に入り、更に葱嶺を越えて中央亞細亞に轉じ、大夏の地を奪ひてこゝに國したり。漢の武帝が張騫を此の地に遣はし、月氏と結びて匈奴を狹撃せんと策したることあるは史上有名の事實なり。之より月氏の勢力は次第に擴大し、西、波斯を壓し、南印度の國境に臨み、迦賦色迦の祖父ハヅカカは既に進んで今のカプール及び迦濕彌羅の地方を畧し、フシカを経て迦賦色迦に至り、其の勢力は遙にゲゼルトに達し、東アグラ

に及びたりといふ。所謂乾駄羅王國と稱するものは是なり。迦賦色迦王出世の年代に就いても、多少の異説なきにあらずと雖、西曆紀元一世紀となすこと、今日にありては最も多くの學者の認むる所の説なりとす。

月氏族なるものは元來スキジャン人種に屬するものにして、古くは此の種族を呼びて釋迦種といへり。(近來釋迦佛受生の迦里羅の釋迦種といへども自ら別種族なりと、)されば迦賦色迦王はまた此の釋迦種の王なるが故、王が佛教を保護してより、印度に於ける佛教徒の間に、最も廣く行はれたるサカーブダ、即ち釋迦紀元と稱する紀年法は、全く迦賦色迦王の即位を以て、其の紀元元年となすものなりといへり。(釋迦紀元によれば西紀七十八年を以て其の紀元第一年となせり)蓋し印度に侵入せる外敵、其の數渺からずと雖、印度に定住するに



及びて、佛教の感化を受けたるもの多く、迦賦色迦王の如きも其の父祖の時代には、恐くは拜火教徒なりしならんも、印度に入るに及びて終に佛教に改宗したるもの、如し。傳ふる所によれば、王の西北印度を平定するや、更に東方摩揭陀に赴き、中天の盟主を撃破し、終に償金九萬を摩揭陀王に要求したり。時に摩揭陀王は、九萬金に代ふるに、馬鳴菩薩と、佛鉢と一慈心鷄とを以てし、其の一、各三萬金に當るべしと言ひしに、喜んで之を承諾したりと言へり。事實の全く疑ふべからざるや否やは知るべからずと雖、また何等かの消息を漏らすものなしといふべからず。

玄奘(西域記)の傳ふるところによれば、王は當時教義解釋の異說紛々たるを疾み、脅尊者(ジャユル)を上首とし、世友尊者(トラスミ)以下五百人を聚め、迦濕彌羅に於て第四回の集法をなせり。蓋し此の集法は、有

部宗の集法と名づくべきものにして、分裂諸部の中に於て、特に有部宗を正統とする一派の僧侶により、其の傳承の法を集成したるものなり。故に其の結集するところ、凡そ三十萬頌、九十六萬言といふも、要は有部上座の傳承せる六足論に基きし迦多衍尼子の『發智論』等に其の根底を有するものなり。此の迦賦色迦の集法は、全く北方所傳にのみ存する所にして、南方佛徒には知られざるものとす。此の時迦賦色迦、此の集むる所を赤銅鑠に鏤刻し、石函に藏めて外に出さしめざることに注意したりといふ、思ふに上座所傳の説を乱さざらんとしたるものならん。之より後、迦濕彌羅は永く小乗有部の根據地となり、北方諸國に傳はりし小乗教は、皆この迦濕彌羅を起源地としたりと言ふも不可なし。支那所傳の小乗教の、獨り迦濕彌羅の有部宗に限りし所以は全く之による、これ大に注目

すべき點なりといふべし。

(六) 佛滅後佛教の迫害

阿輸迦王以後、摩揭陀歴代の諸王皆能く佛教を保護したりしことは前に既に述べたる所なり。然るに、北方所傳によれば、阿輸迦王の後に位に即きしは、王の孫三波地(サンバ)にして三波地より毗梨訶鉢底(パテ、太白)毗梨沙斯那(ウリシヤセ)弗沙跋摩(フシヤダル)王を經、弗沙密多羅に至る。(以上は「阿育王經」による。「阿育王傳」には阿輸迦の後に「貳摩」密多羅に至る。留位に即き者、阿提弗舍摩を經て弗舍密摩に至るとせり。)弗沙密多羅其の名聲を後代に垂るゝこと、阿輸迦王の如くならんことを欲し、阿輸迦王の興隆するところの佛教、悉く之を滅し、阿輸迦建立の鷄頭僧伽藍(屈屈吒阿藍摩ク)を初めとし、凡そ寺塔の類皆之を破却し、且つ佛教僧侶を殺さしめしが、終に南海に至り、惡鬼のために

歴殺せられ、摩裕羅大姓こゝに至りて滅亡すといへり。

南傳によるに、弗沙蜜多羅は摩裕羅朝の將軍にして、其の摩裕羅朝の勢力の衰ふるに當り、摩揭陀の王位を篡ひ立ちしもの、所謂スンガ王朝の祖なりといひ、(第一章の二印度の歴史を述べたる下を見よ)且つ王の事跡につきては、別に破佛の傳説なきのみならず、却て佛教を信じたりじもの、如く見ゆ。然るに北方迦濕彌羅の王に、弗沙蜜多羅あり、此の王は佛教を破斥したるものとして傳へらる。然れども迦濕彌羅の弗沙蜜多羅も、スンガ朝の初祖弗沙蜜多羅も、共に紀元前二世紀頃の人にして、摩裕羅の弗沙蜜多羅も、始んと同時頃の人なるが如きを以て見れば、此の三人の弗沙蜜多羅には、何等かの誤謬ありて、淆乱して傳へられたるものなるや疑なし。迦濕彌羅にありても、摩揭陀のスンガにありても、弗沙蜜多羅の後に即位せし王は、同じくアグニ

ミトラなり、これまた其の事實の混同を證すべし。

迦濕彌羅のアグニミトラは、大夏の希臘王と恒河々邊に戦ひて敗北したることあり、此の大夏王は、即ち有名なる彌蘭なるべし。彌蘭は紀元前百五十年頃の人にして、當時大夏は、全く其の舊領地を失ひ、南下して印度に入り來りし時なりしなり。彌蘭王と那先比丘(ガセーナ、即ち龍軍)との問答は、即ち『那先比丘經』として今日に存するものなり。

此の後摩揭陀には、カンヅ、案達羅の二朝を経て、紀元五世紀の頃に至り、此の時、迦賦色迦王以後の迦濕彌羅の勢力また頗る衰微し、中央亞細亞より印度の西北境に交互侵入し來りしもの甚だ多し。例へばアービラ、ガルダビラ、釋迦、耶槃那、兜沙羅(トラス)、ムンダ、マウナ等の如き皆是なり。此等の諸種族は、今其の詳細を知ること困難な

りと雖、要するに耶槃那を除くの外は、蓋しスキジャン或は波斯種に屬するものなるべし。耶槃那は大夏の希臘人を指したるものにして、希臘語の所謂イオニヤ(アイオ)を指すものなりといふ(ホメロスにイオニヤといふ、ヘブライにてヤブリンといふ)。此等の諸種族の印度に侵入せし時は、即ち内、中央印度を統一すべき大勢力なく、累代摩揭陀王の保護に浴せし佛敎も、非常に外人の爲めに蹂躪せらるゝの運命を免るゝこと能はざりき。所謂西方鉢羅婆(此の種族、明ならず)、北方耶槃那、東方兜沙羅、南方釋迦の四悪王、塔寺を破壊し、比丘を殺害したりと傳へらるゝものは、是にして、此の時拘藍尼(憍賞彌、又拘藍彌)の王子難當、此の四王と戦つて終に之を撃破し、厚く保護を佛敎に加へたり。此に於て佛徒多く拘藍尼に聚まる、然るに聚まる所の僧衆、能く和合すること能はず、黨を結んで相殘害し、大法殆んど破滅の悲境に沈淪したり、これ即ち佛滅

後千年の法難にして、傳へて以て法滅盡の時となす所のものなり。

### 第六章 大乘佛教の勃興

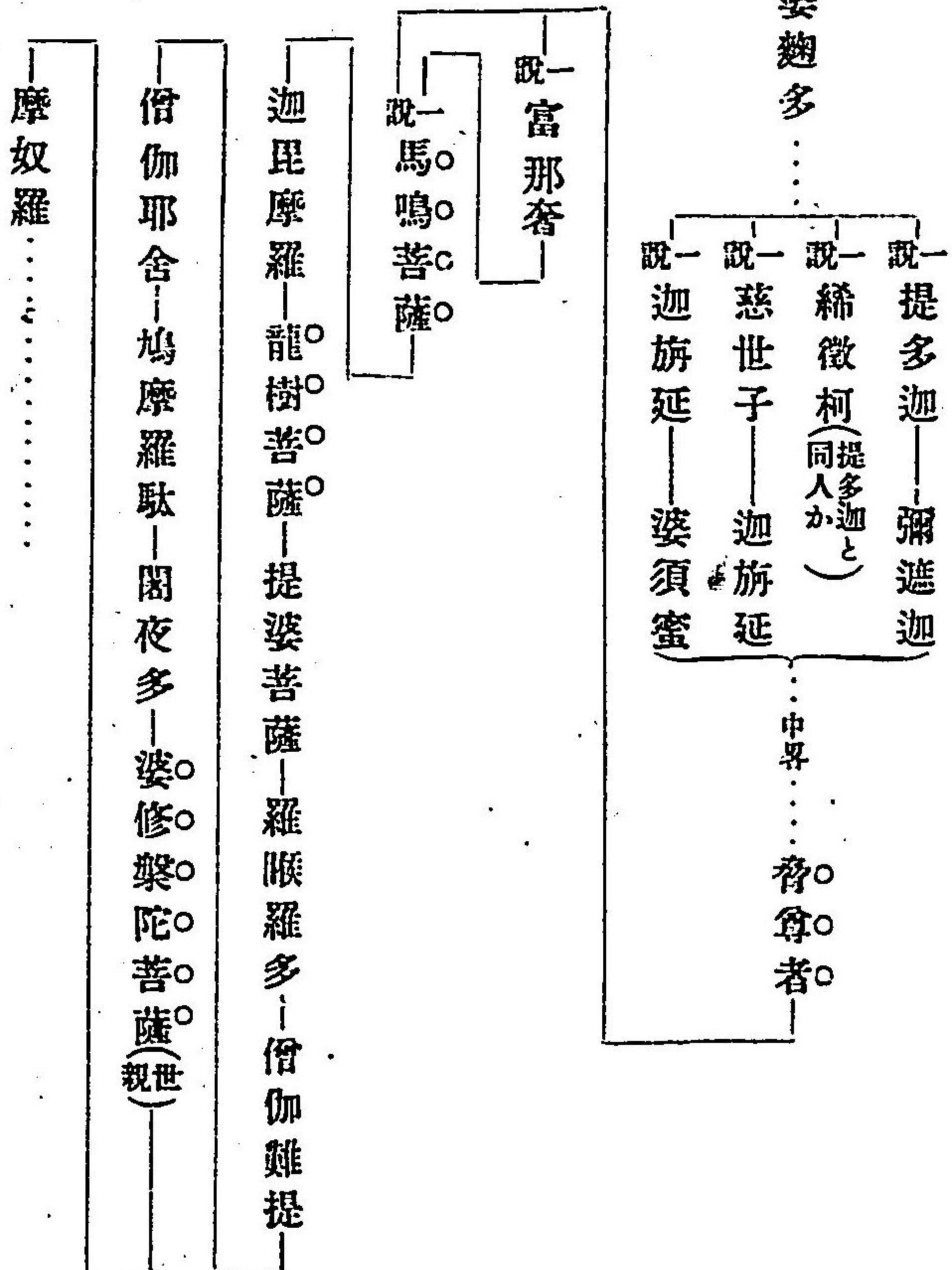
大乘佛教の勃興して、諸大論師が小乘諸教に破斥を加へ、之と同時にまた諸種の外道、所謂婆羅門教徒と盛に論議を闘はしたるは、大凡紀元一世紀以後のことにして、此の頃より小乘諸派は漸次衰頽に傾き、而かも婆羅門教は、却て再興の氣運を萌し來りしものなるべし。大乘佛教は、小乘佛教に比して、更に歴史的事實を傳ふること尠し。

#### (一) 傳統

古來傳ふところの北方佛教の傳統なるものは、佛滅後、迦葉より阿

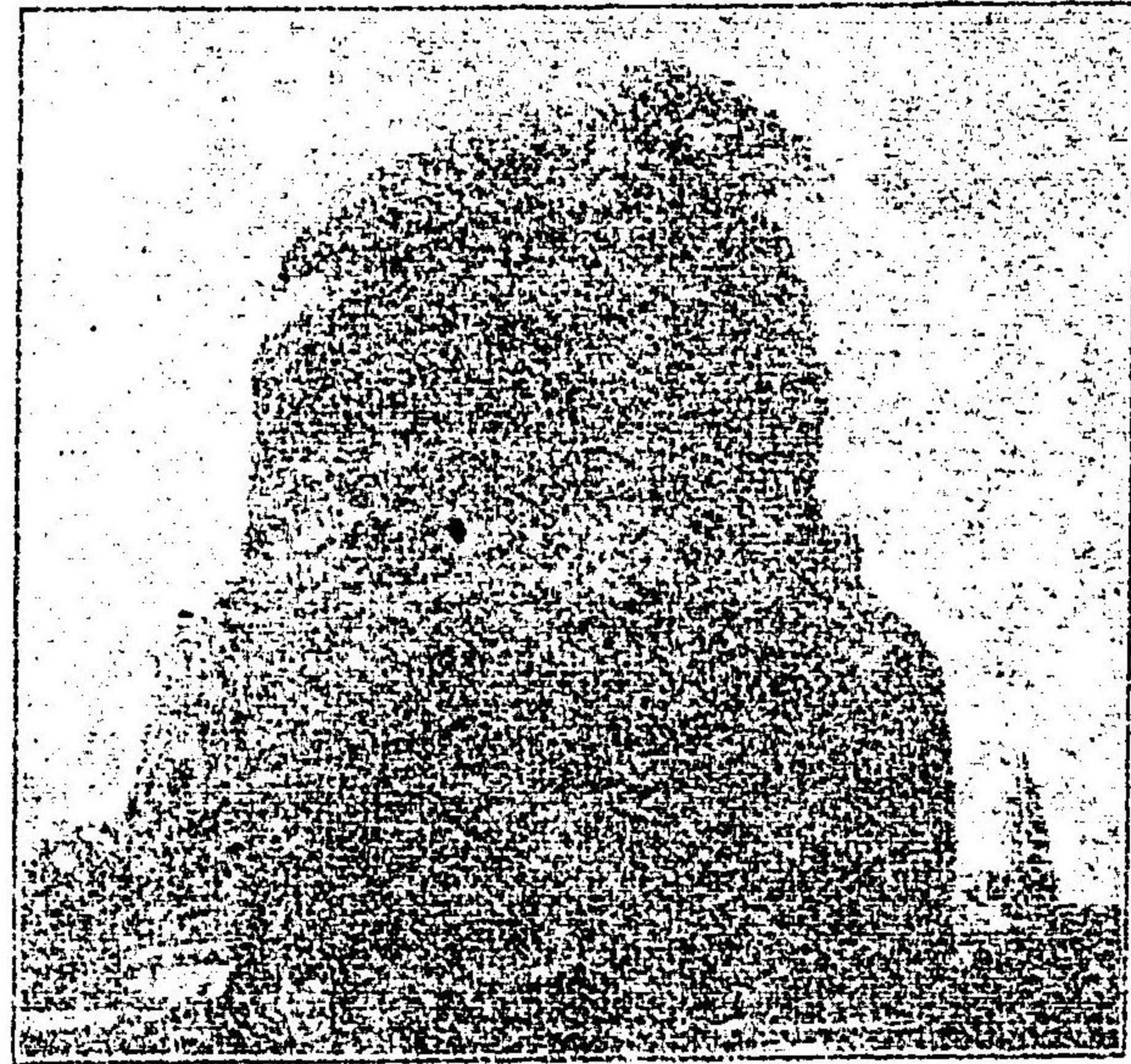
難に傳へ、優婆耄多に至るまでは、所謂五師傳持と稱して、大なる異論あるを見ず、然るに優婆耄多の下に於て、漸く諸師の分裂を見るに至りたりといふ、これ必ずしも信ずべからずと雖、優婆耄多より後馬鳴菩薩の頃までの傳統に、最も異説の一定し難きものあるを見るは事實なり、そは左の圖によりて之を知るべし。

馬鳴以後龍樹に至るまでの間にも、薩婆多有部等の所傳に異説なきにあらず、其の他別に禪宗所傳には自ら多少の相違なきにあら

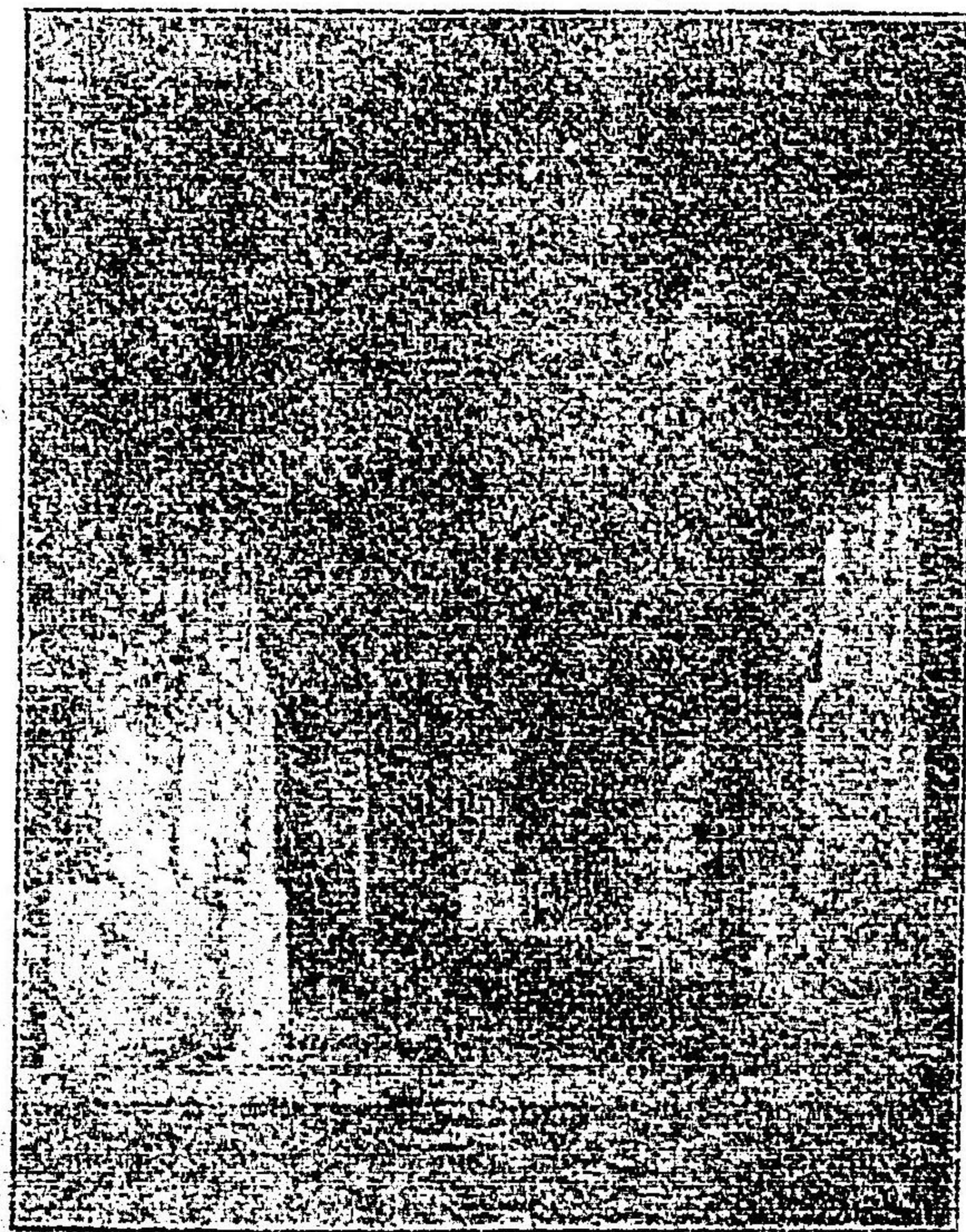


ずといへども、今は唯一般に行はるゝ『付法藏傳』の説によりて其の一端を示すのみ。(但し『付法藏傳』には、迦毘摩羅を比羅となせり) 龍樹以後の傳統にも、有部と『付法藏傳』等には甚だ相違あり、有部所傳にては、龍樹より世親に至るまでの間に九人を數へ、世親の前に訶梨跋摩(カリバダ)を加へ、世親の法を承けしものに達磨達帝(ダマタラ)ありとせり。

又『付法藏傳』にては、摩奴羅(マヌ)の後鶴勒那(ハク)を経て師子尊者(シン)に至り、罽賓の王彌羅掘なるもの、佛教を迫害し、塔寺を破壊し、衆僧を殺害せしが、師子尊者も亦此の法難にかゝりて死せり、されば付法藏の人は師子尊者に至りて斷絶せりといへり。若し之を以て眞實なりとすれば、師子尊者の時代は、世親菩薩より後大凡百年前後にして、紀元五百年代のことと屬し、中央印度にては、笈多王朝



野野の塔



内宮の塔

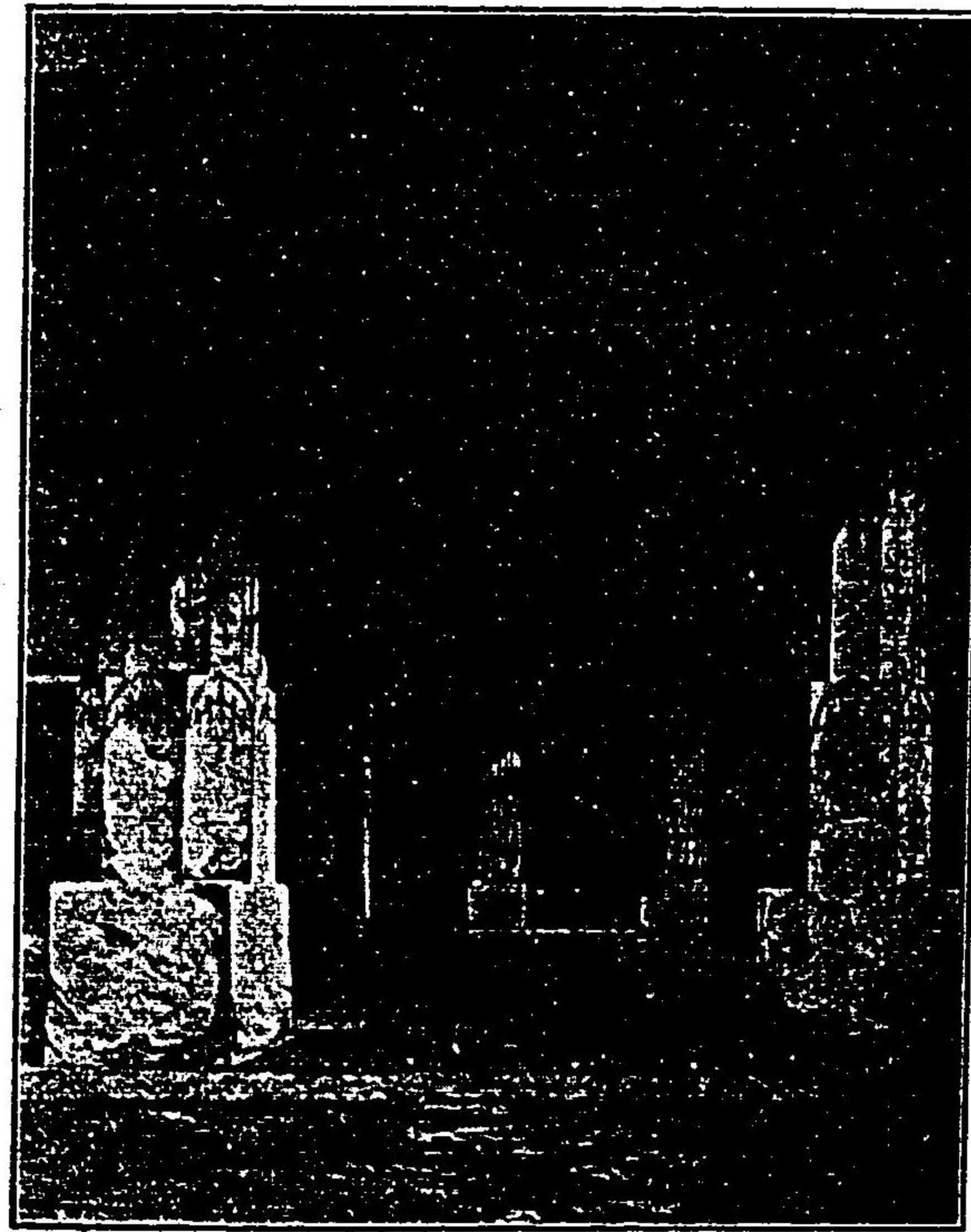
滅亡して、西北地方より外人侵入の時に當る、彌羅掘王は、或は蒙古のミヒラクラ王のことならん。但し禪宗所傳の傳統にては、師子以後法統斷絶せりとのことを拒み、師子の後に婆舍斯多、不如密多、般若多羅を経て、菩提達磨に傳へしものなりと説けり。

(二) 馬鳴菩薩

優婆塞多以後、傳統につきて異説の一致し難きものありしは前述の如し、然れども、迦賦色迦王の時、第四集法の上首たりし脅尊者に至りて諸説皆一致し、脅尊者は其の法を富那奢に傳へ、富那奢は之を馬鳴に傳へたりといふ。一説には、馬鳴直ちに之を脅尊者に承くともいへり。馬鳴は蓋し大乘佛教の勃興に關し、第一に其の名を數へらるべき人なり。



鹿野苑の塔婆



エロラ窟内

滅亡して、西北地方より外人侵入の時に當る彌羅王は或は蒙古のミヒラクラ王のことたりん、但し釋宗所傳の傳統にては、師子以後法統斷絶せりとのことを拒み、師子の後に婆舍斯多不如密多、般若多羅を経て、菩提達磨に傳へしものなりと説けり。

・(二) 馬鳴菩薩

優婆塞多以後、傳統につきて異説の一致し難きものありしは前述の如し、然れども、迦賦色迦王の時、第四集法の上首たりし脅尊者に至りて諸説皆一致し、脅尊者は其の法を富那舍に傳へ、富那舍は之を馬鳴に傳へたりといふ一説には、馬鳴直ちに之を脅尊者に承くともいへり。馬鳴は蓋し大乘佛教の勃興に關し、第一に其の名を數へらるる人なり。

馬鳴、梵語阿涇縛婆沙(アインジャ)なり。其の生國につきて、種々の説ありと雖、當時中天竺の勢力の中心たりし摩揭陀にありて、其の辯才を以て一世を動し居たりしは事實なりしが如し。初め馬鳴の佛教に歸せざるや、深く婆羅門教を信じて、其の世智聰辯を恃み、佛徒に向つて論議を上下せんことを求む、衆恐れて之に應ずるものなし。時に脅尊者巡遊、中天に至る、脅尊者は布路沙布羅(ブリンジャラ、即ち毘陀羅國の首都)の人、苦行を勤修して精進勇猛、未だ嘗て脅を以て地に着けて臥せず、是の故に時人稱して脅比丘といふと傳へられたる人なり。今外道の徒、佛徒と勝敗を決せんとするに、佛徒の之に應ずるものなしと聞き、自ら外道を服せんと欲し、即ち座に上り、先づ語を發して問うて曰く、當さに天下をして泰平に、大王をして長壽に、國土をして豊樂、諸の災患なからしめんと。外道其の言の唐突に驚き、能く答ふ



ること能はず、勝敗の決即ち定まる。初め論議せんとするや、先づ相約すらく、若し言敗るものは何を以て罪すべき、外道曰く、其の舌を断たんと、脅尊者曰く、舌を断つも何の効かあらん、若し敗るゝものは、其の法を捨て、他の門に入らんと、こゝに於て外道終に脅尊者に随ふ、これ所謂馬鳴なり。或は曰く、馬鳴を説伏したるものは、脅尊者にあらずして富那夜奢(フニヤヤ)なりと、其の傳に曰く、馬鳴、智慧淵鑿、超識絶倫、難問する所あれば、催伏せざるなし、深く實我の存することを計して、甚だ自ら貢高なり、富那夜奢尊者に至りて論戦を挑みて曰く、一切世間所有の言論、我能く毀壞すること、電の草を摧くが如くならん、此の語若し虚にして誠實ならずんば、當に舌を斬りて其の屈を謝すべしと。富那夜奢こゝに於て、佛教の無我、我不可得の理を示す、馬鳴頗る之に服し、約によりて舌を斬らんとす、富那

夜奢之を止めて曰く、我法仁慈、敢て汝をして舌を斬らしめず、宜しく剃髮して我弟子となるべしと、これ馬鳴歸佛の因縁なりと。

馬鳴歸佛の後、摩揭陀にあり、時に迦賦色迦王、摩揭陀を攻め、馬鳴を要め、擁して迦濕彌羅に歸りしことは前に既に述べし所なり。之より馬鳴、北天竺に住して大法を弘布し、四部敬重して、皆之を功德日と呼びたりと傳へたり。馬鳴が北天に赴きて後、迦賦色迦の王朝に於て、如何なる事跡を残したるか、其の詳細は知ること能はずと雖、其の屢王に教誡を加へしことは察すべきものあり。

馬鳴の著書として今日に存するもの、中、最も著名なるもの三あり、一は『大莊嚴論經』にして訓誡的の隨筆なり、二は『佛所行讚經』にして佛陀一代の傳記なり、三は『大乘起信論』にして、大乘佛教の深義を發揮す。前二者は馬鳴の文藻を見るべきものにして、馬鳴は

實に一大雄辯家たりしと共に、また一大詩人、一大文章家たりしなり。迦賦色迦王の第四集法の時に當り、馬鳴また其の集會に加はり、『毘婆沙』の文を着けしと傳ふるもの蓋し事實ならずんばあらず。或は曰く、初め自在天外道に使へ、後佛教に歸し、佛陀讚傳を作りし詩人摩陞里制吒尊者(チエト)は、即ち馬鳴と同人なりと。而して第三の『大乘起信論』に至りては、大乘佛教興起時代初頭の名著にして、大乘教時代諸論師の中に於て、先づ指を馬鳴菩薩に屈する所以のものは、實に此の著あるによるものとす。

### (三) 龍樹提婆の二菩薩

馬鳴菩薩は、大乘教時代の初頭に數へらるゝと雖、其の大乘教に關する著述は、唯一小篇の『大乘起信論』一部に過ぎずといふも可なり。

然るに馬鳴菩薩以後幾もなくして出世したる龍樹菩薩に至りては、其の浩漭の著述と、其の論旨の卓絶せるとは、後世より之を諸宗の祖と仰ぎ、第二の釋迦と呼ばしむるに至りたり。就中『大智度論』、『中論』、『十二門論』は最も有名なるものにして、龍樹の教義は、此の三部によりて之を窺知することを得べきなり。又『十住毘婆娑論』は、前三部の如き教義の説明にはあらず、菩薩の實際修行に關する階級を明したるものにして、彼の小乗教に於ける聲聞羅漢の階級に對し、別に此の五十二位の説をなしたるものは、實に大乘佛教の一大方面の發揮といふべし。宜なり、之より後『十地經』の研究、益大乘佛教徒の間に盛なるに至りしこと。

龍樹原語那伽闍刺樹那(ナリガ)、或は譯して龍猛ともいひ、また龍勝ともいふ。久しく南天竺の豪貴の家に生ると傳へらるゝも、南天

の何の地の人なるかを詳にせず。蓋し龍樹の出世は、紀元二世紀の頃にして、摩揭陀は案達羅王朝の時代にあり。傳説するところによれば、龍樹初め外道を學び、其の他の當時の學術、凡そ天文、地理、星緯、圖織、一切の道術に至るまで悉く綜練せざるなし。時に其の友三人と相議して曰く、學藝に於ては吾等既に其の秘奧を極む、之より後宜しく情を恣にし、欲を極め、以て快樂を追求すべしと、乃ち相共に身を潜めて王宮に入り、宮女を侵犯す、事覺はれて三友皆殺され、龍樹獨り免るゝを得たり、此に於て始めて深く道心を發し、佛教を學習す。三藏の經典悉く通達して更に異典を索む、偶々雪山に於て一比丘より大乘經典を受く、然れども未だ其の實義に通ずる能はず、なほ廣く餘の經典を得んと欲すれども、終に得ると能はず、龍樹こゝに於て以爲らく、佛經妙なりと難理を以て之を推すに未だ盡さ

ざる所あり、未盡の理は我自ら敷演して以て後學を開導すべしと、由て新戒を立て、新衣を着け、弟子を教誡せんと欲す、時に大龍菩薩之を見て深く惜むべしとなし、携へて龍宮に至り、龍宮所藏の深奧の經典を讀誦せしむ、龍樹始めて無生忍を悟り、南天竺に還りて盛に大乘の教化を施し、外道を摧破すといふ、又憍薩羅の國王婆多婆訶(サドグハ引正)大に龍樹を尊重し、龍樹此の地に止住して弘法したりしことを傳ふ。以上の所傳中には、怪誕にして素より悉く信ずべからざるものありと雖、また多少の消息を解すべきものあり。(龍樹龍宮に於て道を成ず、故に龍を以て名づく、龍樹の母龍樹を阿周陀那と稱する樹下に生む、故に樹を其名に加ふといふ、これ亦必ずしも信ずべきにあらず、)龍樹菩薩の法を嗣ぐものとして、後世に其の名を振ふものを提婆菩薩(ア)となす。提婆は南天執師子國(ランカ)の人なり。龍樹の憍薩羅にあるや、提婆遙に龍樹の名を聞き、來りて論難を求めんとす、

龍樹素より嘗て提婆の名を知る、乃ち弟子をして、滿鉢に水を盛りて之を提婆の前に致さしむ、提婆水を見、黙して之に針を投ず、蓋し龍樹の智の奥底を探らんとするに擬するなり。龍樹見て喜び、延いて俱に問難往復し、龍樹終に法を以て提婆に附囑すといふ。提婆其の後諸國を周遊して化を施せしが、時に南天竺の王(其の國詳ならず、蓋し其の生國なからん)専ら外道を信じて毫も佛教を用ひず、提婆以爲らく、樹は其の本を伐らざれば枝條傾かず、人主先づ化せずんば其の道行はれずと、由て自ら雇兵となりて王の前駟をなし、之によりて王に近くことを得、終に王を導いて佛教に歸せしむ。提婆此に於て、王都の中に高座を建て、揚言して曰く、一切諸聖中佛聖最第一なり、一切諸法中佛法正に第一なり、一切救世中佛僧第一なり、八方の諸論士若し此の意を破するものあらば、首を斬りて以て其の屈を謝すべしと、

衆能く終に之を屈するものなし。時に一婆羅門教の徒あり、其の師の提婆のために屈せらるゝを恨み、提婆の閑林に退き、禪より起ちて經行するを見、刀を執りて之を刺す、提婆之に告げて曰く、我が弟子中、未だ法忍を得ざるものあり、我が汝のために殺さるゝを見るや、必ず急追して汝を捕へん、汝宜しく山上に逃るべし、平地に下ること莫れと、刺客去りて、提婆の徒始めて之を發見し、叫呼して敵を索む、提婆靜に之に説くに、一切諸法空にして、受者なく、害者なきの道を以てし、脱然として逝けり。提婆一目眇なり、故にまた迦那提婆(カナダ)といふ、迦那は眇の意なり。提婆の著書として最も著名なるものは『百論』にして、其の他『外道小乘四宗論』、『外道小乘涅槃論』等の如き、皆婆羅門教と小乗教の破斥を以て目的とせざるはなし、また其の化風を想見すべきなり。

(四) 無着、世親の二菩薩

提婆菩薩以後、無着、世親の頃に至るまでの状況は、之を詳にするこ  
 と能はず、其の間の傳法者に就いても、種々の異説ありて一定せず、  
 或は訶梨跋摩(カリアバルマ)を以て世親の前に加ふるものあり、或は訶  
 梨跋摩を以て世親以後の出世となすものありて諸説區々たり、訶  
 梨跋摩は鳩摩羅多(クマラ)の弟子なりといふ。訶梨跋摩は即ち有名  
 なる『成實論』の著者にして、初め有部宗に出家し、其の説に満足する  
 こと能はず、波吒利弗多に於て大乘を學び、終に名聲を一世に擅に  
 し、擧げられて摩揭陀の國師となれり。蓋し提婆と世親との間には、  
 此等鳩摩羅多、訶梨跋摩等の外、なほ幾多の名匠ありしならんも、今  
 其の詳を知ること能はざるのみ。〔付法藏傳〕にては提婆の後、羅睺、僧伽、難提、  
 僧伽、耶舍、鳩摩羅多を経て世親に至

るものとなせり、果して然らば鳩摩羅多と世親の間に訶梨跋摩を加ふるも、年代に於  
 ては相當れるものありといふべし、但し世親につきて、古世親、新世親の二人ありとい  
 ふも、今は單に新世親につ  
 きて言ふものと知るべし。

無着、世親の時代は、印度歴史上に於て文化の最も燦然たりし紀元  
 五世紀、即ち超日王の鄔闍衍那朝の盛時にあり。此の二人は、もと犍  
 陀羅國布流沙布羅の人にして、父を憍尸迦(シカウ)といふ。初め憍尸迦  
 に三人の子あり、皆呼んで婆藪槃豆(ブスバン豆、譯して世親といふ)といふ、三  
 人共に皆佛教によりて出家す、第三子は別名を比鄰持跋婆(ピリンダ)  
 といひ、小乗有部宗に屬せしといふも、其の後を詳にせず。第一婆藪  
 槃豆は即ち無着(アサンガ)にして、第二婆藪槃豆のみ、獨り婆藪槃豆、  
 即ち世親を以て稱せらる。無着はもと同じく有部宗に於て出家し  
 たりしも、(一説に化他部)空觀を修し、欲を離れんとして入ると能はず、自ら  
 身を殺さんと欲するに至る。時に東方毘提訶の地に賓頭盧羅漢と

稱するものあり、之がために小乗の空觀を説いて、之に入るとを得せしむ。然れとも無着は之を以てなほ安ずること能はず、終に進んで大乘教に入り、大乘空觀を悟る、無着の名は之によりて起るといふ。無着の大乘教に入りしについては、一種の傳説あり、即ち無着が、其の大乘の教義を彌勒菩薩に受けたりといふもの是なり。初め無着の小乗空觀を以て安んずること能はざるや、其の神通力によりて兜率天に昇り、親しく彌勒によりて大乘の義を諮ひ、所得あれば下りて人のため此の義を説く、人多く之を信せず、此に至りて、無着人をして大乘を信ぜしめんと欲し、彌勒を其の講堂に請じて其の義を説かしむ、彌勒則ち夜間下りて衆のために大乘を説き、晝は無着、彌勒所説の深義を解すといふ。或は曰く、無着彌勒の教を受け、彌勒下りて乗のために説法せしは、阿踰闍即ち今のオ  
イドに於ての現に『瑜伽師地論』等の如き、大部の書の、彌勒の著とし

て今日に傳はらるものあり。第三婆藪槃豆、即ち世親菩薩も、亦初めは有部宗に於て出家す。迦濕彌羅に至りて有部の義を學ばんと欲す、時に迦濕彌羅にありては、餘部及び大乘の徒のために、其の有部の正義を乱されんとを恐れ、迦賦色迦王の集法以來、其の毘婆娑の法、一切其の國境の外に出すことを得ざらしむ、世親仍て狂人の態をなし、名を伴りて迦濕彌羅に入り、婆娑の義を學んで還ると。或は曰く、其の伴り狂して迦濕彌羅に入りしものは、實に阿踰闍の人婆娑須跋陀羅(バドシヤス)なり、世親にあらずと、此の説眞に近きが如し。蓋し婆娑須跋陀羅、始めて有部の義を迦濕彌羅以外に弘むるや、四方の學徒雲の如く集まる、婆娑須跋陀羅其の自ら年衰老して事の竟はらざらんことを憂ひ、急疾に之を取らしめ、隨て出せば隨て書し、僅に完きことを得たりといふ、世親は之によりて有部の義を學

ぶことを得たりしものならん。(これ「俱舍論」の傳來に關する通常の説と少しく異なる所あり「婆藪槃豆法師傳」による)  
 世親既に有部宗の義を學びて、衆人のために毗婆娑の義を講じ、一日講ずれば即ち一偈を造りて一日所説の義を攝す、總べて六百偈あり、之を赤銅鏤に刻し、香象の頭上に標置し、鼓を撃ちて宣令して曰く、誰人能く此の偈義を破せん(これ「俱舍論」なり)と。世親また偈に添ゆるに金五十斤を以てし、之を迦濕彌羅の毗婆娑師に贈る、毗婆娑師能く偈義を解する能はず、更に金百斤を以て世親に餉り、其の偈を解せんがために長行を造らしむ、世親乃ち之を釋して有部の義を立て、有部の僻處は、經部の義によりて之を破す、必ずしも有部の傳説に拘らず、これ所謂「阿毘達磨俱舍論」なり。  
 傳説によれば、當時一數論の學者あり、頻闍訶山に住す、故に頻闍訶婆娑(婆娑住と譯す)と名づく、佛教の行はるゝこと盛なるを見て、之を論破

せんと欲し、阿輸闍に至り國王超日に請うに佛徒と論議を角せんことを以てす、超日王仍て能く此の數論の學者と相抗するに足るべきものを求む、時に世親及び摩菟羅他(マヌラダ、或はマノルヒタ、如意と譯す、蓋し「付法藏傳」に世親の法を嗣げる摩奴羅と同人ならんか)等の諸師、皆去りて阿輸闍に在らず、唯世親の師、佛陀蜜多羅(ブツダミ)ありと雖、年已に老邁にして論議に堪へず、已むを得ずして起て之に應ず、果して數論の爲めに敗らる、世親後還りて之を聞き、憤懣して『七十眞實論』を造りて數論の説を破すといふ。(一説世親の師は覺親なりと云ふ、一説には如意なりと云ふ)  
 初め超日王の子新日王(バーラデーチ、ヤ婆羅阿迭多)及び其の王妃、其の未だ太子たりし時より皆世親を師とす、然るに新日王の妹夫、婆修羅多、『毘伽羅論』に精し、之によりて世親の『俱舍論』を難じて、却て世親のために『毘伽羅』を撃たる、『毘伽羅』は聲明論なり、此に於て婆修羅

多之を恨み、迦濕彌羅有部の大徳、悟入(索健地羅、ス)の弟子、衆賢論師(僧伽跋陀羅、ナ)を阿踰闍に請じて、『俱舍論』を駁せしむ、これ即ち『順正理論』なりといふ。

當時世親、獨り小乘を學んで未だ大乘に入らず、兄無着深く之を悲しむ、病と稱して急に世親を召す、世親到て病源を問ふ、無着答へて曰く、我が心重病あり、汝に由て起ると、世親其の所以を質す、無着曰く、汝常に大乘を信せず、却て之を毀謗す、此の惡業を以て汝必ず永く惡道に沈淪せん、我今愁苦命將さに全からざらんとすと、世親之を聞いて驚懼して爲めに大乘を解説せんことを請ふ、無着即ち大乘の要義を説く、世親大に之に服し、我が大乘を毀謗せしもの、此の舌あるによると、仍て舌を割いて其の罪を謝せんとす、無着之を諫めて曰く、蓋ぞ其の大乘を毀謗せる舌を以て、大に大乘を説かざる

やとこれ世親の大乘に歸入せし初めなりといへり、無着世親の著書甚だ多しと雖、就中著名のものは、無着の『攝大乘論』、『顯揚論』、世親の『俱舍論』、『唯識論』、『十地論』等なり、殊に世親は著書最も多く、世に千部の論師と稱す、世親年壽八十歳にして阿踰闍に捨命せり。

#### (五) 世親以後の状況

印度の大乘佛教は、凡そ二大教系に分る、一は龍樹より出てたる空宗にして、之を中觀宗といふべく、二は世親(實は無着に出づ)を祖とする有宗なり、之を瑜伽宗或は唯識宗と稱すべし、されば龍樹の著書中にありて、後の學者の註解の最も盛なるものは、『中論』(中觀論)にして、世親の著書中にて、研究の特に盛なりしものは、『唯識論』なりしといふを以て、其の大勢を察すべし、今龍樹中觀の教系として傳ふると



ころを見るに左の如し。

龍樹—提婆—羅睺羅—青目—清辨—智光

瑜伽宗の法系は學者の間に一定の確説なし、唯世親の滅後、十大論師ありて互に『唯識論』を注して論難したりといふに過ぎず。(前記に如く、『付法藏傳』にては、摩奴羅を世親の法嗣とす。)蓋し陳那論師は、特に因明を以て名ありと雖、世親の下に教を受けしもの、如く、護法は亦陳那の弟子なるべく、戒賢はまた護法の弟子なりといふ。護法と相對して世親教系中最も名あるものは安慧にして、安慧は德慧の下に出づといへば、德慧は蓋し世親の門に出てしものか。其の他此の教系に屬せし人、堅慧あり、難陀あり、商羯羅主(サンカラスグリーミン、骨鎖主、主は塞縛彌の譯、因明入正理論の著者)あり、龍軍ありて、蘭菊美を争ふの觀ありしと雖、歴史上の事跡は全く之を明にすると能はず、されば今假りに瑜伽宗の教系を左の如く定むることを

得べし、

無着—世親—陳那—護法—戒賢  
德慧—安慧

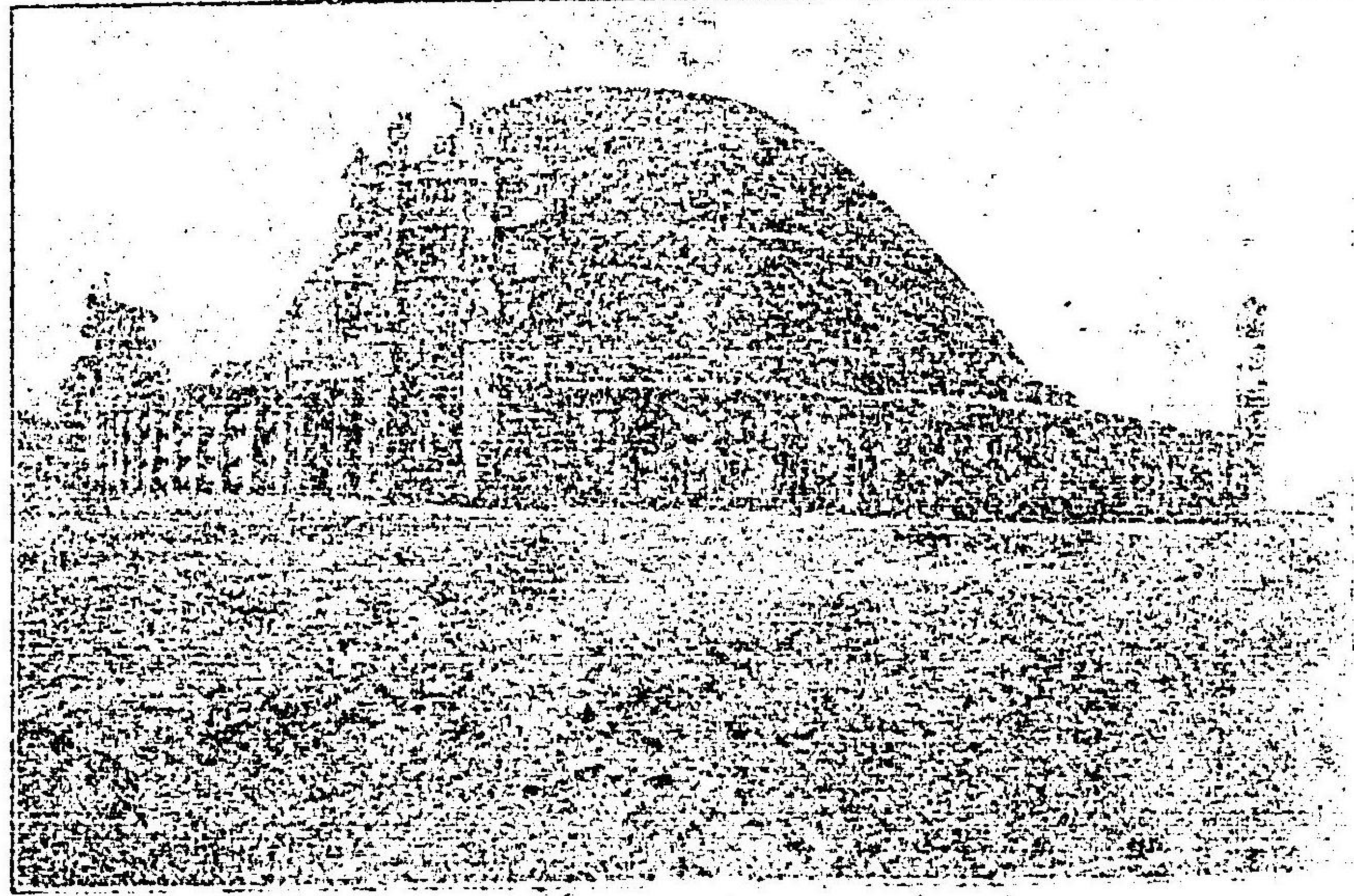
中觀、瑜伽二派の中に於て、護法、清辨と、戒賢、智光とは常に並稱せられ、互に空有の論を鬪はしたりしといふを以て見れば、其の同時の人なりしこと知るべし。中にも戒賢論師は、紀元七世紀の人にして、所謂那爛陀寺の隆盛時代に當り、戒日王が佛教を保護せし頃の人なるが、陳那は大凡紀元五世紀下半以後の人なれば、之によりて空有二派論争時代の年時を推察し得べし。清辨の著書として最も著名なるものは、『大乘掌珍論』にして、陳那は『因明正理門論』殊に知られ、護法は『唯識論』の註解者中特に卓拔せりとして傳へられ、安慧には『阿毘達磨雜集論』、『大乘中觀釋論』等あり。

小乗教は前に述べし如く、迦濕彌羅の有部宗一たび廣く外國に學習せらるゝに及び、世親の『俱舍論』出で、衆賢の『順正理論』等の著述あるに至る。『順正理論』はもと『俱舍論』と稱す、衆賢此の書を以て親しく世親に面し、其の是非を決せんと欲す、而かも未だ其の意を果さずして死す。世親後に之を見て深く嘆美し、其の思方實に毗婆娑の衆に減ぜずと雖、却て我が説に順ふ所多しとて、之に『順正理論』の名を與へたりと稱す。後、無垢稱論師(毘末羅蜜多羅、ツ)と稱する人あり、また迦濕彌羅有部の學者なり、諸方に遊學し、將さに本國に歸らんとし、遂に摩偷羅國に至る、此の地は衆賢論師示寂のところにして、其の跡に塔を建つ、無垢稱其の塔を拜し、衆賢の著述大に世に行はれざるを悲しみ、更に其の義を光顯し、大乘の説を破せんとを誓ひたりといふ、蓋し衆賢の説、有部の義を宣揚すと難、また多少從來

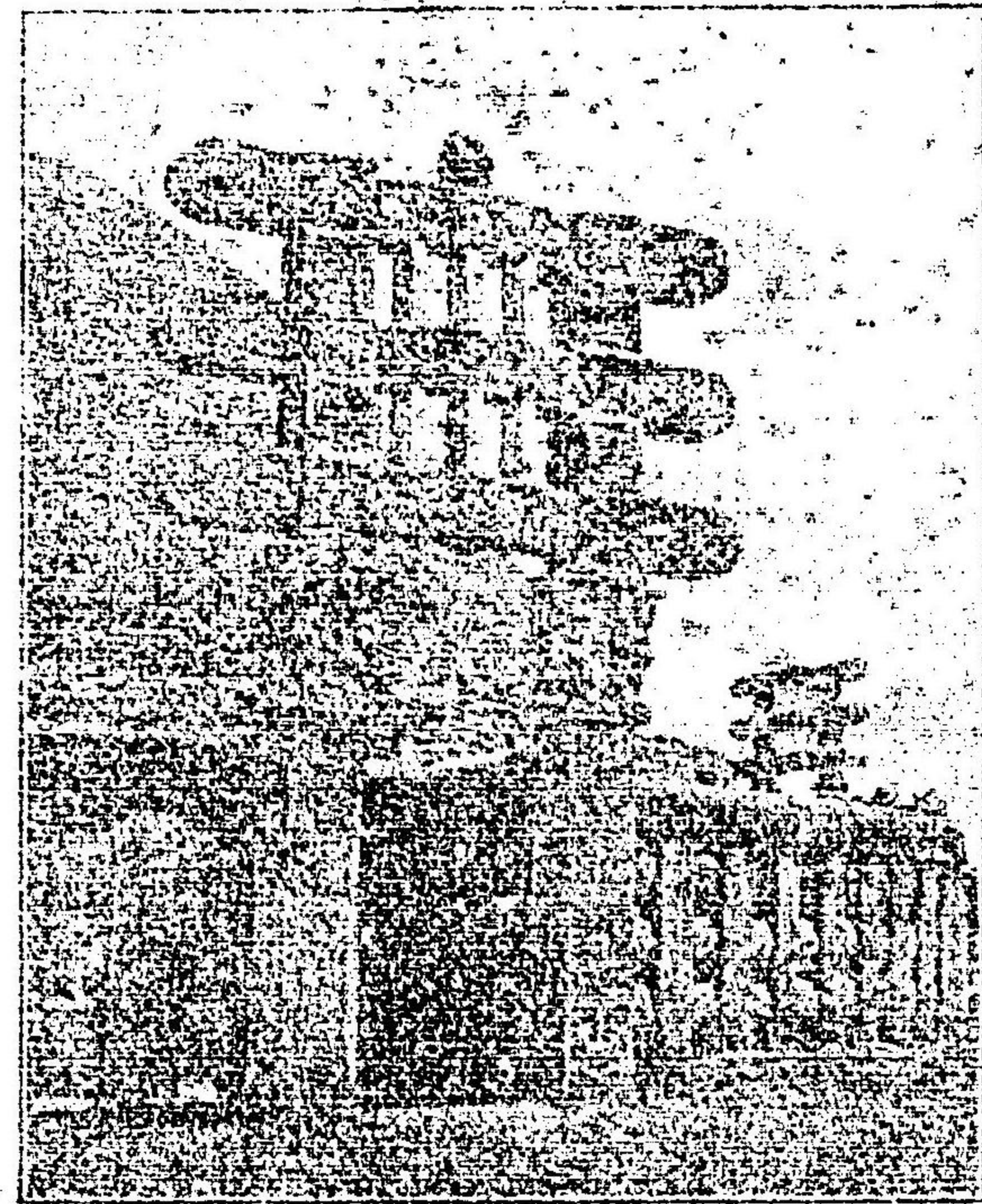
の有部宗に同じからざる所あり、故に後の學者之を區別するに舊薩婆多、新薩婆多の名稱を用ふ、其の他德光論師(グナプラバ)も初めは大乘を學びしも、後小乗に轉じ、德光の弟子蜜多斯那(セトラ)は、紀元七世紀頃の小乗學者中の耆宿たりしといふ。

#### (六) 佛教の衰滅

印度佛教の衰滅に歸したる外部の原因は、種々あるべしと雖、要するに鄔闍衍那朝以後、復古思想勃然として起り、之に伴ふに吠陀の古代思想の興隆を促したること、其の有力のものなりしに疑なし。就中佛教の攻撃者として有名なるものは、前にクマールラ、バッタあり、後に特に有力の大論師シンカラ、ルヤあり、共に皆佛教を排撃して其の力を極めたり。クマールラは紀元七世紀頃世に出てし



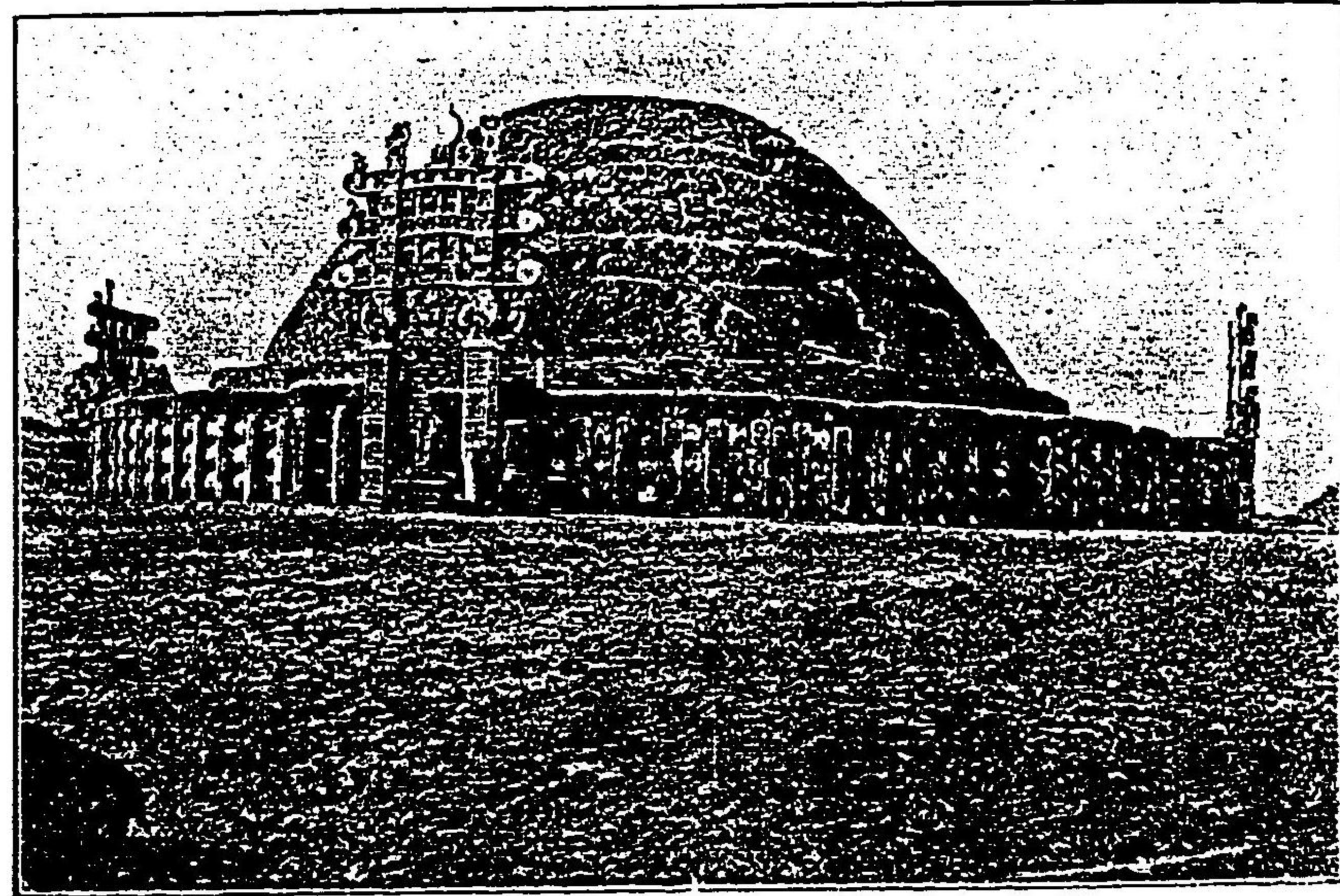
塔 塔



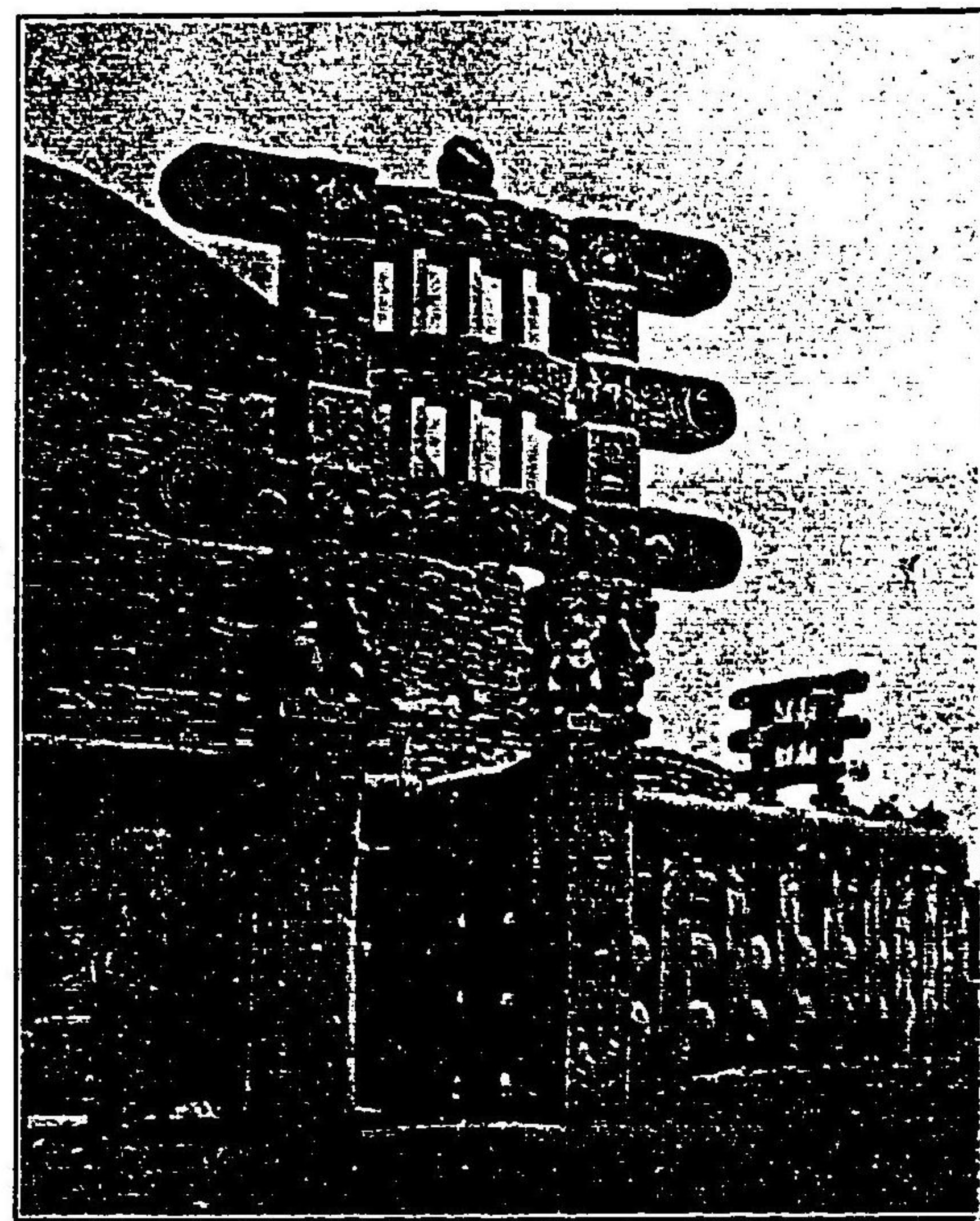
門西のアンサ

人にして、聲論派の宗師なり、『聲論經』(ブサルヴ、スミトラ)の註を著はせり。ヤンカラは、吠陀論派の人にして、紀元八世紀に世に出で、バーダラーヤナ、ヴァーサの『吠檀多經』(サリタ、スミトラ)を註したり。畢竟斯くの如き婆羅門教の大論師の出世するありて、復古思想を鼓吹し、佛教に大打撃を加ふるに至りしものは、また實に氣運の然らしめたるものといふべし。

復古思想の結果、印度教を興し、就中富蘭那思想は、全印度の人心を支配するに至り、之に加ふるに極力印度教の思想を傳播するに努めたるラジプト族の、印度全土に其の勢力を振ふあり、次いで異教マホムト宗の侵入によりて、在來の印度思想を破壊せんと企つるあり、斯くの如き數次の打撃を蒙りし佛教は、終に諸種の壓迫の下に、凡そ七八紀の頃より十二三世紀に至るまでの間に、殆んど全く



婆塔チンサ



門西のチンサ

人にして、辯論派の宗師なり。辯論經（*Paṭisambhāsaka Sūtra*）の註を著はす。カウツラは、吠陀論派の人にして、紀元八世紀に世に出て、グライヤトウヤリ等の吠陀多經（*Śukra Smṛiti*）を註したり。畢竟斯くの如き婆羅門教の大論經の出現するありて、復古思想を鼓吹し、佛敎に大打撃を加ふるに至る。然るに、この復古思想の然らしめたるものも、ふべし。

復古思想の結果、印度教を興し、就中富蘭那思想は、全印度の人心を支配するに至り、之に加ふるに、勢力印度教の思想を傳播するに努めたるマゴ、ゾロアスター族の印度全土に其の勢力を振ふるあり、次いで異教マホムト宗の侵入によりて、在來の印度思想を破壊せんと企つるあり、斯くの如き數次の打撃を蒙りし佛敎は、終に諸種の壓迫の下に見ても七八世紀の頃よりして、一世紀に至るまでの間に殆んど全く

跡を印度本土に絶つに至りたり。

## 第七章 南方佛教

### (一) 錫崙

錫崙は古の所謂師子國にして、楞迦山は此の島中にあり。本島に佛教の傳はりたるは、一般に阿輸迦王の時なりと信ぜらるゝことは前に述べたりしが如し。即ち阿輸迦王は、其の子摩晒陀をして、錫崙に佛教を弘めしめしが、此の時摩晒陀の錫崙に伴ひしものは、長老壹帝夜、長老鬱帝夜、長老參婆樓、長老跋陀沙等の五人と、摩晒陀の妹僧伽蜜多の子須摩那、及び徒弟盤頭迦等の人々なりき。

古代にありては、錫崙は勿論非アールヤ人によりて住せられ、其のアールヤ人に知らるゝに至りしは、恐くは紀元前四五世紀の頃、ア

ールヤ文明が漸次東海岸に沿うて南進し、所謂ユラス、バンヂヤ等の獨立國を見るに至りし前後ならん、前に述べたりし印度の二大叙事詩の一なる羅摩衍那に於て、憍薩羅王子羅摩が毘提訶の王女私多と婚し、錫崙楞迦の魔王羅婆那(色)のために私多を奪はれ、之を回復せんとして錫崙に向ふといへる有名なる記述あれども、歴史的事實としては茫乎として之を確むること能はず。

佛教の錫崙に弘傳せられしを以て、若し阿輸迦王の時代にありとすれば、即ち紀元三世の頃に當る。此の時の錫崙の王を帝須といひ、首府を阿菟羅陀補羅(アマラ)といへり。今現に阿菟羅陀補羅の舊趾を距る數里の地に、マヒンタレの丘陵ありて、こゝに摩訶陀精舎と稱する寺院あり、摩訶陀居住の遺跡と稱す。

錫崙史も其の古代のことは、奇怪にして信ずべからざる傳説に始

まり、其の錫崙王の最初は、印度南部の一國王の女と、師子との間に生まれたる毘闍耶王(勝難)なりと言へり。或は曰く、錫崙王の初めを師子童子といふ、師子童子の即位は佛の入涅槃と同年にありと。一説によれば、毘闍耶はもと摩訶陀の王子にして、罪を得て南方に逃れ來り、終に錫崙を征服したるものにして、これ實に紀元前五世紀のことに屬すと、希臘人は當時の錫崙を呼びてタプロバニーとして傳へたり、蓋し巴利語のタムバパンニーなるべしといふ。(タムバは、梵語のタムラバルニにして銅葉の義なりとす。)之より後錫崙王の系統は大凡左の如し。

毘闍耶(ウイジ)

半頭婆脩提婆(バンドウ)

阿婆耶(アバ)

波君茶迦婆耶(バンドカ)

錫崙の「大史」は、多少之と説を異にす、毘闍耶王死して大臣ウパテッサ位に即き、次いで毘闍耶王の弟の子半頭婆脩位に即き、阿婆耶王の後半頭婆脩の一女叔父デガの一子デガマーニと婚し、波君茶迦婆耶を産

聞茶私婆(シムツタ)

天愛帝須(デワチツサム)

み、波君茶迦婆耶王の後、阿婆耶の弟メナチツサ位に即き、以て聞茶私婆より、ビィチツサに至るといへり、

此の六王の中に於て、波君茶迦婆耶は兵を擧げて阿婆耶に反し、終に其の位を奪ひ、此の王の時より都を阿菟羅陀補羅に定めたりといふ。故に佛書に、或は之を阿菟羅陀國と呼べり。(阿菟羅陀補羅は、其の後殆んど一千年間の國都りた) 婆君茶迦婆耶王の時は、恰も摩迦陀の摩裕羅王朝の初め、戰茶羅笈多の頃に當り、阿輸迦は聞茶私婆王の末年より、天愛帝須在位の時に相當す。阿輸迦王が其の王子摩晒陀を錫崙に遣はしたるは、實に此の帝須王の時代なりとす。

天愛帝須王は大に佛教を尊信し、摩晒陀以下の諸僧を崇敬し、特に佛舍利を摩迦陀に迎へ、伽藍堂塔を建立して之を安置したり、此の處を名けて塔園といふ。且つ王の夫人摩菟羅は、其の宮女と共に出家し、王は外甥阿標又(ツタ)を摩迦陀の王都に遣はし、菩提樹枝と王女僧伽蜜多とを迎へ來らしむ。阿標又、錫崙に還りてまた出家せり。阿標又、後、塔園に於て律藏を説き、錫崙の佛教は阿標又より次第傳燈すと言へり。

帝須王の後、三世にして阿菟羅陀補羅はマラバル人の本半嶋より來侵するに遭ひ、一時其の制御を受けしが、帝須王の弟マハナガの四世の孫に、木叉伽摩尼阿婆那王(ドシユタガ)あり、十人の勇士を得、其の助けによりて終にマラバル王を滅し、阿菟羅陀補羅を回復することを得たり。此の王殊に佛教に歸すること深く、其の造寺建塔の盛なる前後に其の比なきを見る、これ實に紀元前一世紀のことなりといふ。大塔建立の豫言を摩晒陀に受けたりと傳へられしもの

は、即ち此の王にして、王の建てたる二大塔は、阿菟羅陀補羅に存すといへり。(此の豫言のことは『善見毘婆娑』に出てたり)  
 王の死後、ドラゴド族は、また本土より錫崙に侵入し來りしも、伽摩尼王の姪、ワッタ、ガミニ之を斥けて、また回復の効を完うし、此の王の時代に、始めて、五百の聖衆相集まりて、巴利語により三藏を筆録し、其の注疏は別にシンハリスによりて記されたり。蓋し摩晒陀の摩迦陀より來りて佛教を傳ふるや、既に筆録の經典を携へ來れりと説くものなきにあらずと雖、一般の信する所によれば、摩晒陀以後凡そ一百五十年の間は、全く暗記口誦によりて傳へられ、ガミニ王に至りて筆録のこと起れりとなせり。此の三藏筆録は、紀元前八十八年に行はれたりと信ぜらる。此のワッタ、ガミニ王は、またアバヤギリ塔と稱せる錫崙最高の塔を建造したりといふ。(アバヤギリ塔は、周圍一千一百英尺、高さ二百四十四英尺ありといへり)

之より後、錫崙の諸王中、排佛の人なきにあらざりしも、概して皆佛教を保護して今日に至りたり。中に於て特に此に注目すべきは、佛陀瞿沙(ゴッシダ)の事蹟なり。佛陀瞿沙は紀元五世紀の人にして、もと摩迦陀の地、佛陀迦耶附近に生れ、紀元四百三十年頃錫崙に來りたり。佛陀瞿沙のなせし事業の重なるものは、錫崙所傳のシンハリス三藏の註疏を、巴利語にて再録したるにあり。今日錫崙佛教の完璧を見るを得るものは、一に佛陀瞿沙の効に歸すべきなり。後佛陀瞿沙は、錫崙を去りて緬甸に赴き、また此の地方に佛教を傳へたり、これ紀元四百五十年頃のことと屬す。



## (二) 緬甸

緬甸の建國は古く、今より二千四五百年前にありて、緬甸王の祖先ハ印度恒河地方の印度人の一王系より出てたりと稱するも、其の説信ずるに足るもの少く、甚だ確實を缺くが如し。蓋し緬甸古王國の最盛時代は、紀元十一世紀より十三世紀に至る間にして、ベグ、アラカン等を併せ、國都は即ちバガンなりき。時に亞細亞の北方に蒙古の勃興するありて、威力殆んど亞細亞の全部を壓し、拔都の率ゆる一軍は、進んで今の露西亞より、更に西、歐羅巴を震撼したりしが、忽必烈位に即き、國號を元と稱し、支那本部の全軀を并吞するに及び、緬甸も亦其の兵を蒙りて、バガンは終に蒙古兵の爲めに破壊され、之より蒙古に朝貢して僅に餘喘を保ちしも、國力は益々衰微の運

に向ふに至れり。其の後十六世紀の頃に至り、ベグの北東トウングーより興起して、ベグ、アラカン、アヴ等を畧取し、全緬に勢を振ひしものあり、國都をベグに定めたりしが、此の王朝は十六世紀の終りに於て既に衰滅に歸したり。

アヴの新王朝は、十七世紀を通じ、十八世紀の半ばに至るまで隆盛を極め、其の後ベグ人の反乱によりて、一時國都アヴは攻陥せられ、緬甸は殆んどベグ人の手に歸するに至りたり。時に有名なるアロムブラ(セヤグ)なるものあり、アヴ王朝の再興を謀り、連戦連勝の勢を以てアヴを回復し、下緬甸に進みて全くベグを陥れ、ベグ人を服従せしめたり。此の戦に於て、英國人はアロムブラを助け、佛國人は、ベグ人を助けたりといふ、これ實に十八世紀の後半に屬することゝす。アロムブラは、其の後暹羅を征せんとし、東南行して、メルグイ及び

テナセリムを取り、終に暹羅の國都を圍みしも、病によりて國に還り、途にて死せり。長孫ナウングハウグイ嗣ぎ早く死し、弟トエンピ  
 ーエン(ミエグ)位に即く。此の王の時代には、其の領土最も擴大し、暹羅も全く緬甸の屬國となり、緬甸は終に其の國都アユチアを陥れたり。後暹羅はまた分離獨立したるが故、王は再び之を征せんとせしも、ベグ人の反乱ありて其の意を達するに及ばざりき。王は一千七百七十六年に死したり。

トシエンピ、ローエン王の子、トセンゲーメン十八歳にして位に即きしが、叔父ポドウブラ(又メンダラグユ)のために殺され、ポドウブラ自ら王位に即けり。西アラカンと併せ、又都をアブよりアマラプーラに移したるは此の王の時代なり。

暹羅の緬甸より分離獨立せし千七百七十一年以來、或は暹羅より

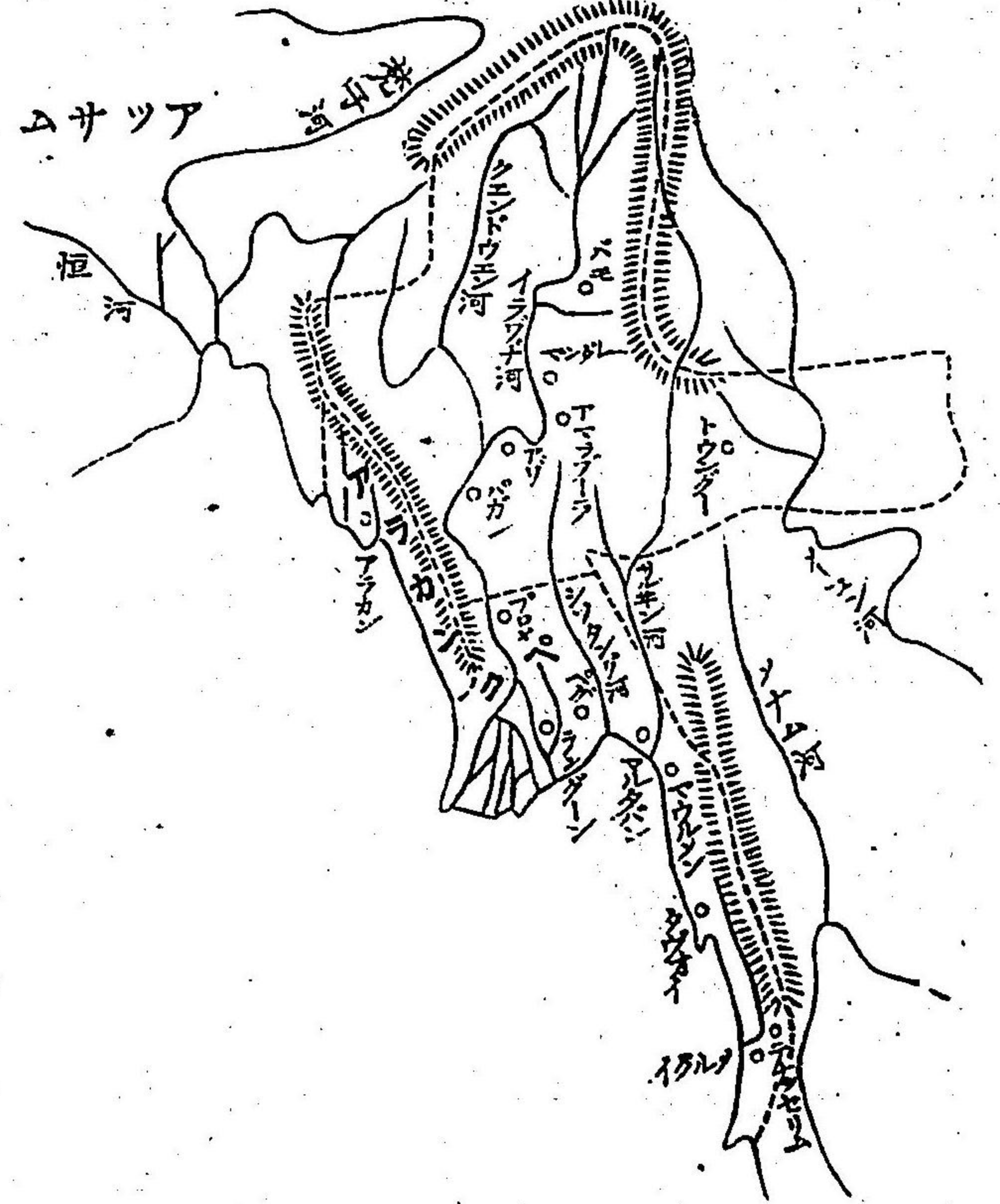
テナセリム、メルグイ、タヴイ等を分割して緬甸に與ふることゝなりて、二國の間全く平和に歸するに至りぬ。

然るに當時英國は既に其の勢力を印度に扶植し、アッサムに於て英緬兩國兵の衝突を來し、緬甸王ポドウブラは、下緬甸の地、アラカン、ベグ、テナセリムの三州と償金とを英國に與へて和を講ぜしが、之より英人と緬甸人とは互に反目して屢相争ふとを免れず、紀元千八百八十六年に於て、英國は緬甸國王チーホーを擒にして、其の全土悉く英の領土となれり。(千八百五十五年に於て、國都はアマラプーラよりマンダレーに移されたり。)

緬甸に始めて佛教の來りし時代に就きては、既に佛陀の在時、佛自ら此の地に降臨し、一弟子の請によりてタトンに至り、其の教を説き、自ら其の頭髮(本)をタトンの王に與へて、紀念としたりといふ説あれども、信ずるに足らず。唯佛教の緬甸に來りしは海上南方より

したるものにして、其の最初弘教の地は、イラヴヂとシタングとの  
 兩河口の間に位するタトンなりしことは疑なきが如し。  
 思ふに阿輸迦王の派遣したりし傳教師の中、所謂金地國に赴ける  
 ものとは、即ち此の地方に來りしものにして、緬甸の所傳によれば、  
 實に當時のラマグニア王國に於けるタトンに到着したるものな  
 りといふ。これ即ち紀元前四世紀のことにして、此の頃は、上緬甸は  
 なほ頗る未開の状態にありしも、下緬甸の地方は、遙に文明進歩の  
 程度之に比して數層の上に位し居たりしことを見る。(ラマグニア王國は當時イラ  
 ヴヂ河とアラカン山の間なるコウ、テイ、今のボウテイ地方と、イラヴヂとシタ  
 グ兩河間なるヘンタワチとシタング、サル、今の兩河間なるマルタパンとの三部よ  
 り成り、北はプロ、而して阿輸迦王の金地國に遣はしたるものは、セナ  
 カとウタラとの二人なりしが、(善見律には、大德須那迦傳多) 時のラマグニ  
 の王名をチリマタウカと言ひ、深く此の二僧を信じ、國民また次第

に佛陀の教に歸するに至れり、これベグの地方に佛教の弘傳せら  
 れし起原にして、タ  
 ンの古跡は今もなほ  
 現に存すといふ。  
 佛陀瞿沙の錫崙より  
 緬甸に來りしは、紀元  
 四百五十年の頃にし  
 て(佛陀瞿沙は、前に述べし  
 如く、摩揭陀の人なりと  
 いふも、緬甸の傳にては、タ  
 トンの人なりとなし、ダト  
 ンより錫崙に遊學し、) 緬  
 甸の傳によれば、佛陀



第一編第七章 南方佛教(緬甸)

瞿沙は其の錫崙に居りし時、シンハリースよりハリー語三藏を譯

出し更にバトリ語より緬甸語三藏を譯出し、之を携へて緬甸に還りたるものなりとなせり。

紀元十一世紀に當り、即ちバガンの古緬甸王國隆盛の際に於て、バガンの王アナウラタは、南ラマガニアを侵し、タトンに入り、佛陀瞿沙によりて將來せられたる聖典、並びにタトンの高僧を促してバガシに還り、之より上緬甸のバガン王は、下緬甸を領有すると同時に、獨り南方に盛なりし佛教は、漸く北方に其の基礎を築くに至りたり、これバガンに佛教の入りし濫觴とす。

紀元十二世紀の頃、緬甸に於けるタトン、バガン等の僧侶、佛陀の遺物并びに菩提樹を拜せんがため、錫崙に赴きしが、其の衆中にトサバタと稱する少壯の沙門あり、深く三藏の義を研めんがため、獨り後に留まり、當時錫崙に最も盛なりしマハーウラ派の教を學び、マ

ヒンダ、チワリ、アナンダ、ラアラ等の數人と共にバガンに還りしかば、之より緬甸には、錫崙のマハーウラ派の佛教廣く一般に行はるゝこととなりたり、これ實にバガンの王ナラバチ、シスーの時代なりき。此の王の死後バガン王朝は漸く衰頽し、國內分裂の悲境に陥りたり。但し此の後と雖、累代の國王皆能く佛教を保護し、アゾ、マンガレー、ラングーンを始めとし、各地の壯麗なる寺院殿堂は、今なほ其の古昔を追懷せしむるの料たり。アゾの舊都は今より凡そ七十年前、大地震のために全都悉く破壊に歸したりしが、マンガレーには舊國王の菩提寺なるシャタータイ寺あり、規模の大なる緬甸第一と稱す。其の他マウルメンのコンハット寺は、特に其の壯麗美麗を以て知られ、ラングーンのチャコンの黄金塔は、同國屈指の靈場にして、參詣の人絡驛常に絶えずといふ。